松江市文化財調査報告書　第１３５集

広岡川河川改修事業に伴う

佐太前遺跡発掘調査報告書

2010年8月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

広岡川河川改修事業に伴う

佐太前遺跡発掘調査報告書

2010年8月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例　言

1．本書は、平成19年度から21年度にかけて財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した、広岡川河川改修工事に伴う佐太前遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は、松江市から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3．本調査地の所在地は、以下の通りである。

松江市鹿島町佐陀宮内87-2、87-3、87-4、88、91-2、92-1

松江市鹿島町名分1348-24、1362-8、1362-9、1365-3

4．現地調査期間

第１次発掘調査　　平成19年11月19日～平成20年７月31日

第２次発掘調査　　平成21年１月16日～平成21年６月24日

工事立会　　平成21年10月15日～平成22年３月９日

5．開発面積及び調査面積

開発面積	4,800㎡
第１次発掘調査面積	1,706㎡
第２次発掘調査面積	613㎡
工事立会調査	961㎡

6．調査組織

依頼者　　松江市土木課

主体者　　松江市教育委員会

平成19年度【発掘調査】

事務局	松江市教育委員会	教育長	福島　律子
	〃　文化財課	課長	古岡　弘行
	〃　〃　調査係	係長	飯塚　康行
	〃　〃　〃	主幹	赤澤　秀則
	〃　〃　〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育委員会　文化財課文化財保護	主事	東森　晋
	〃　〃	企画員	池淵　俊一
	国立大学法人島根大学法文学部	教授	渡辺　貞幸
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団	理事長	松浦　正敬
	〃　埋蔵文化財課	課長	廣江　眞二
	〃　〃	課長補佐	錦織　慶樹
	〃　〃　調査係	主任	門脇　誠也（事務担当者）
	〃　〃　〃	調査員	藤原　哲（調査担当者）
	〃　〃　〃	調査補助員	北島　和子

平成20年度【発掘調査】

事務局	松江市教育委員会			教育長	福島　律子
	〃	文化財課		課長	吉岡　弘行
	〃	〃	調査係	係長	飯塚　康行
	〃	〃	〃	主幹	赤澤　秀則
	〃	〃	〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県考古学会			会長	田中　義昭
	三瓶自然館サヒメル			学芸員	中村　唯史
	鳥取県教育委員会	文化財課		文化財主事	濱田　竜彦
	島根県教育委員会	文化財課		企画員	池淵　俊一
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団			理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課		課長	廣江　眞二
	〃	〃		課長補佐	錦織　慶樹
	〃	〃	調査係	主任	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃	〃	調査員	藤原　哲（調査担当者）
	〃	〃	〃	調査員	江川　幸子
	〃	〃	〃	調査補助員	北島　和子
	〃	〃	〃	調査補助員	田中　基次

平成21年度【発掘調査】

事務局	松江市教育委員会			教育長	福島　律子
	〃	文化財課		課長	吉岡　弘行
	〃	〃	調査係	係長	飯塚　康行
	〃	〃	〃	主幹	赤澤　秀則
	〃	〃	〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	国立大学法人島根大学法文学部			元教授	井上　寛司
	松江市文化財保護審議会			委員	足立　正智
	島根県教育委員会	文化財課		企画員	池淵　俊一
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団			理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課		課長	廣江　眞二
	〃	〃		課長補佐	錦織　慶樹
	〃	〃	調査係	主任	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃	〃	調査員	藤原　哲（調査担当者）
	〃	〃	〃	調査補助員	清水　初美

平成22年度【発掘調査報告書作成】

事務局	松江市教育委員会		教育長	福島　律子
	〃	文化財課	課長	錦織　慶樹
	〃	〃　調査係	係長	赤澤　秀則
	〃	〃　〃	主任	川上　昭一
	〃	〃　〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
実施者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課	課長	大西　誠
	〃	〃　調査係	係長	中尾　秀信
	〃	〃　〃	専門企画員	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃　〃	調査補助員	清水　初美
	〃	〃　〃	調査補助員	宇津　直樹

7．調査に携わった発掘作業員

（発掘作業員）石倉春枝、井上清、井上幸夫、今村邦子、今村ひろ子、今村正人、上田孝子、内田英輔、内田航太郎、内田義、小川吉子、小川真由美、金森まゆみ、田中和美、角田ミヤ子、時安順子、中村健太、秦岡富士子、原美栄、福井正、福田進、福田美代江、　細木澄子、細田信子、細田美智子、細田勇治、細田美晴、松本長子、松本誼、山本嘉男、吉永永子、吉岡啓三郎、和田章、渡部美佐子

（遺物整理員）安部義文、飯塚豊、飯野正子、池澗徹、今井みゆき、江川瀬里奈、小川真由美、金森まゆみ、川谷珠美、北川美枝子、坂本玲子、瀬川恭子、善家幸子、田中富士美、津森淳一、時安順子、中村美枝子、原美喜夫、福田千代志、松島春恵

8．調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々から多大なご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

安達保則、安達由巳、内藤康夫

9．本書に掲載した現場写真、遺物写真は藤原哲、石川崇、清水初美、北島和子が撮影した。航空写真については、株式会社ジェクトに委託して撮影した。

10．本書の執筆・編集は、松江市教育委員会文化財課の協力を得て、藤原哲と清水初美が行った。

11．本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

（弥生土器）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』1992

廣江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古 第８号』1992

12．本書における方位は公共座標北を示し、座標値は日本測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。またレベル値は海抜標高を示す。

13. 本書における遺跡番号は、遺構を示すS、調査区を示すアルファベット、遺構面を示す数字、3桁の連番という順にそれぞれを組み合わせ表すこととした。即ち、B区第1遺構面34番目の遺構はSB1034、C区第2遺構面127番目の遺構はSC2127となる。
14. 出土遺物、実測図及び写真などの資料は、松江市教育委員会において保管している。

目　次

第１章　調査に至る経緯 …… 1

第２章　位置と環境 …… 2

第３章　調査の結果
①調査地点 …… 5
②基本層序 …… 5
③第１次調査　A区 …… 8
B区 …… 9
C・D区 …… 15
第２次調査　G区 …… 59
H区 …… 91
I区　工事立会 …… 97

第４章　まとめ …… 106

挿図目次

第１図　島根県松江市位置図 …… 1
第２図　調査範囲と周辺の遺跡分布図 … 3
第３図　開発予定範囲と調査地 …… 4
第４図　第１次調査A～D区成果図 …… 7
第５図　A区西壁土層断面図 …… 8
第６図　A区出土遺物実測図 …… 8
第７図　B区第１遺構面平面図 …… 9
第８図　B区西壁土層断面図 …… 9
第９図　B区掘立柱建物跡実測図 …… 10
第10図　B区溝状遺構
SB1016～SB1019実測図 …… 11
第11図　B区第２遺構面（縄文遺構図）
平面図 …… 11
第12図　B区下層包含層出土遺物
実測図 …… 12
第13図　B区縄文包含層出土遺物
実測図（１） …… 13
第14図　B区縄文包含層出土遺物
実測図（２） …… 14
第15図　C区D区第１遺構面平面図 …… 15
第16図　SC1005実測図 …… 16
第17図　CD区SC1005出土遺物
実測図 …… 16
第18図　C区D区第２遺構面平面図 …… 17
第19図　C区D区上層断面図 …… 18
第20図　縄文大溝（自然流路）
SC2002平面図、土層断面図 … 19
第21図　CD区SC2002出土遺物
実測図（１） …… 20
第22図　CD区SC2002出土遺物
実測図（２） …… 21
第23図　CD区SC2002出土遺物
実測図（３） …… 22
第24図　CD区SC2002出土遺物

実測図（4） …… 23
第25図　弥生時代前期大溝ＳＣ2001平面図
上層断面図 …… 24
第26図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（1） …… 26
第27図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（2） …… 27
第28図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（3） …… 28
第29図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（4） …… 29
第30図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（5） …… 30
第31図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（6） …… 31
第32図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（7） …… 32
第33図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（8） …… 33
第34図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（9） …… 35
第35図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（10） …… 36
第36図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（11） …… 37
第37図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（12） …… 38
第38図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（13） …… 39
第39図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（14） …… 40
第40図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（15） …… 41
第41図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（16） …… 42
第42図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（17） …… 43
第43図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（18） …… 44
第44図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（19） …… 45
第45図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物
実測図（20） …… 46
第46図　弥生時代前期大溝（ＳＣ2001）
ウッドサークル実測図 …… 47
第47図　弥生時代前期の土器溜まり
ＳＤ2640実測図 …… 48
第48図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物
実測図（1） …… 49
第49図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物
実測図（2） …… 50
第50図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物
実測図（3） …… 51
第51図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物
実測図（4） …… 52
第52図　ＣＤ区上層包含層出土遺物
実測図（1） …… 54
第53図　ＣＤ区上層包含層出土遺物
実測図（2） …… 55
第54図　ＣＤ区上層包含層出土遺物
実測図（3） …… 56
第55図　ＣＤ区下層包含層出土遺物
実測図 …… 57
第56図　Ｇ区第１遺構面（中世～近世）
平面図 …… 59
第57図　第２次調査範囲 …… 60・61
第58図　掘立柱建物跡ＳＧ1001実測図 … 62
第59図　掘立柱建物跡ＳＧ1001出土遺物
実測図 …… 62
第60図　掘立柱建物跡ＳＧ1002実測図 … 63
第61図　掘立柱建物跡ＳＧ1002出土遺物
実測図 …… 64
第62図　掘立柱建物跡ＳＧ1003実測図 … 65
第63図　掘立柱建物跡ＳＧ1004実測図 … 66

第64図　掘立柱建物跡ＳＧ1004出土遺物
実測図（１）…… 66
第65図　掘立柱建物跡ＳＧ1004出土遺物
実測図（２）…… 66
第66図　掘立柱建物跡ＳＧ1005実測図 … 67
第67図　掘立柱建物跡ＳＧ1005出土遺物
実測図 …… 67
第68図　柱穴列ＳＧ1006実測図 …… 68
第69図　柱穴列ＳＧ1006出土遺物
実測図 …… 68
第70図　土坑ＳＧ1182実測図
出土遺物実測図 …… 69
第71図　Ｇ区中世～近世包含層出土遺物
実測図（１）…… 70
第72図　Ｇ区中世～近世包含層出土遺物
実測図（２）…… 71
第73図　Ｇ区第２遺構面（弥生～古墳時代）
平面図 …… 72
第74図　Ｇ区土層断面図 …… 73
第75図　竪穴住居跡ＳＧ2001実測図 …… 74
第76図　竪穴住居跡ＳＧ2001出土遺物
実測図 …… 75
第77図　掘立柱建物跡ＳＧ2002実測図 … 75
第78図　掘立柱建物跡ＳＧ2002出土遺物
実測図 …… 76
第79図　掘立柱建物跡ＳＧ2003実測図 … 77
第80図　掘立柱建物跡ＳＧ2003出土遺物
実測図 …… 77
第81図　掘立柱建物跡ＳＧ2004実測図 … 78
第82図　掘立柱建物跡ＳＧ2004出土遺物
実測図（１）…… 78
第83図　掘立柱建物跡ＳＧ2004出土遺物
実測図（２）…… 79
第84図　掘立柱建物跡ＳＧ2005実測図 … 80
第85図　掘立柱建物跡ＳＧ2005出土遺物
実測図 …… 80
第86図　土坑ＳＧ2405実測図 …… 81
第87図　土坑ＳＧ2405出土遺物
実測図（１）…… 82
第88図　土坑ＳＧ2405出土遺物
実測図（２）…… 83
第89図　土坑ＳＧ2405出土遺物
実測図（３）…… 84
第90図　土坑ＳＧ2405出土遺物
実測図（４）…… 85
第91図　土坑ＳＧ2359実測図 …… 85
第92図　土坑ＳＧ2359出土遺物実測図 … 86
第93図　土坑ＳＧ2223実測図 …… 87
第94図　土坑ＳＧ2223出土遺物実測図 … 87
第95図　土坑ＳＧ2290実測図 …… 88
第96図　土坑ＳＧ2290出土遺物実測図 … 88
第97図　土坑ＳＧ2117実測図
出土遺物実測図 …… 88
第98図　土坑ＳＧ2101実測図 …… 89
第99図　土坑ＳＧ2101出土遺物実測図 … 89
第100図　旧河道ＳＧ3001実測図…… 90
第101図　Ｈ区平面図・土層断面図…… 91
第102図　溝状遺構ＳＨ1201実測図…… 92
第103図　溝状遺構ＳＨ1201出土遺物
実測図…… 92
第104図　Ｈ区中世～近世包含層出土遺物
実測図（１）…… 93
第105図　Ｈ区中世～近世包含層出土遺物
実測図（２）…… 94
第106図　溝状遺構ＳＨ2319実測図
出土遺物実測図 …… 95
第107図　Ｈ区弥生～古墳時代包含層
出土遺物実測図 …… 96
第108図　Ｉ区第２遺構面実測図 …… 97
第109図　土坑ＳＩ2068実測図 …… 98
第110図　土坑ＳＩ2068出土遺物実測図… 98
第111図　土坑ＳＩ2001実測図…… 99
第112図　土坑ＳＩ2001出土遺物実測図… 99
第113図　溝状遺構ＳＩ2094実測図 …… 100

第114図　溝状遺構ＳＩ2094出土遺物
実測図 …… 100
第115図　溝状遺構ＳＩ2102実測図 …… 101
第116図　溝状遺構ＳＩ2102出上遺物
実測図 …… 101
第117図　土坑ＳＩ2082・溝状遺構ＳＩ2058
実測図 …… 102
第118図　土坑ＳＩ2082・溝状遺構ＳＩ2058
出上遺物実測図 …… 102
第119図　溝状遺構ＳＩ2081実測図 …… 103
第120図　溝状遺構ＳＩ2081出土遺物
実測図（１） …… 103
第121図　溝状遺構ＳＩ2081出十遺物
実測図（２） …… 104
第122図　Ｍ－３出土遺物実測図 …… 105

図１　佐太神社社殿配置（貞享以前）と
調査区との位置関係…… 108
図２　佐太神社社殿配置（貞享期：1684～
1687年）と調査区との位置関係… 109

図版目次

図版１　佐太前遺跡弥生時代前期の大溝から
講武盆地を望む
佐太前遺跡弥生時代前期の大溝から
佐太神社周辺
図版２　佐太前遺跡調査前風景
Ａ区土層堆積状況
Ｂ区ＳＢ1001完掘状況
図版３　ＳＢ1001柱根検出状況
ＣＤ区ＳＣ2002
ＣＤ区ＳＣ2001遺物出土状況
図版４　ＣＤ区ＳＣ2001遺物出土状況
ＣＤ区ＳＣ2001土層堆積状況
ＣＤ区ウッドサークル検出状況
図版５　ＣＤ区ＳＣ2001鋤未製品出土状況
ＣＤ区ＳＣ2001完掘状況
ＣＤ区ＳＣ2640遺物出土状況
図版６　現地説明会風景
Ｇ区第１遺構面完掘状況
Ｇ区第１遺構面掘立柱建物跡
ＳＧ1003～1005完掘状況
図版７　Ｇ区土坑ＳＧ2405遺物出土状況
Ｇ区土坑ＳＧ2223遺物出上状況
Ｇ区土坑ＳＧ2117遺物出土状況
図版８　Ｇ区第２遺構面完掘状況
Ｈ区第２遺構面完掘状況
工事立会風景
図版９　縄文土器、弥生土器、石器
図版10　弥生土器
図版11　弥生上器
図版12　弥生土器、石器
図版13　弥生土器、石器、木製品
図版14　土師質土器、瓦、陶器
図版15　弥生土器、土師器
図版16　弥生土器、土師器、石器、石製品
図版17　陶磁器、瓦、須恵器、古銭、上師器
図版18　弥生上器、上師器、瓦質土器

第１章　調査に至る経緯

松江市鹿島町佐陀宮内地区にある普通河川広岡川は、地区内を東西に流れる本川と住宅密集地を流れる支川により構成される地区内の重要河川であるが、未改修河川のため河川断面も小さく、通水能力も低い状況であり、洪水時にはたびたび氾濫し、家屋への浸水被害を与えていた。

このことから平成16年度、松江市（旧、八束郡鹿島町）では、河川改修事業に着手することとなった。

一方、工事予定地である佐太神社周辺には周知の佐太前遺跡が広がっていた。佐太前遺跡は昭和20年代に佐陀川の護岸が崩れた際に土砂の中から遺物が発見されたことによって知られた遺跡で、弥生時代前期に成立する遺跡として著名であり、旧鹿島町教育委員会により鹿島町立歴史民俗資料館（現、松江市立鹿島歴史民俗資料館）建設に伴う発掘調査が、昭和60年から翌61年にかけて実施され、弥生時代から中世に及ぶ遺跡であることが確認されている。

しかし、佐太前遺跡の範囲は確定しておらず、旧鹿島町教育委員会では遺跡の範囲を確認するため平成15年度において試掘調査を行ない、今回調査範囲の発掘調査が必要な旨を回答した。

この後、平成17年度の市町村合併を経て平成19年10月、発掘調査依頼書が松江市教育委員会に提出された。

松江市教育委員会では調査対象地内の一部に現道を開削し河川を拡幅する部分が存在することから、現河川下側部分の調査方法と併せ、島根県教育委員会と協議を行った。

結果、迂回路が確保できない現道部分の一部と現河川下側部分については、工事時に立会調査を行うこととし、迂回路を確保できる道路については交通規制を行い、発掘調査を実施することとなった。

第１図　島根県松江市位置図

第２章　位置と環境

島根半島のほぼ中ほどに位置する講武盆地は、面積180haの広い水田を有しており、半島部では持田、川津平野とならぶ耕地面積である。この盆地は谷奥から流れだす講武川によって形成された沖積地で肥沃な耕作地となっており、古くから水稲耕作地としての条件を備えていたものと考えられる。

周知の遺跡である佐太前遺跡（１）は、この講武盆地の南西端に位置しており、今回の調査でも弥生時代前期から、中・近世に至る遺構、及び縄文土器を含む大量の遺物も出土している。

この講武盆地西側には、1933年に史跡指定を受けた縄文時代の佐太講武貝塚（10）がある。この貝塚は縄文時代前期の所産であるが、周辺低湿地の調査で縄文時代から古墳時代にわたる遺物包含層が確認されている。貝塚を構成する貝のほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められており、縄文時代前期には、周辺部がこうした貝の生育に適した環境であったと考えられる。一方で貝層中には堅果類の果皮も多く含まれていたことを考えると、当時の人々が汽水域で魚介類を採取し、周辺の山野で鳥獣や堅果類を求めて暮らしていたことがうかがえる。

講武川北側に位置する堀部第１遺跡（46）や北講武氏元遺跡（49）から縄文時代後期から晩期の遺物が多く出土している。

弥生時代には、北講武氏元遺跡から縄文時代晩期の突帯文土器や遠賀川系の弥生土器が共伴して出土しており、盆地内において初期水田が開発されていたと想定される、縄文時代から弥生時代への過渡期の様相をうかがうことの出来る重要な遺跡である。

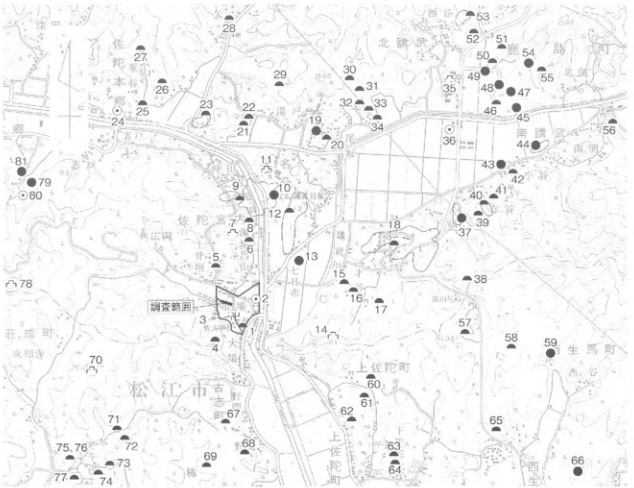
堀部第１遺跡で検出された弥生前期の墳墓は、遠賀川系の土器のみを供献しており北講武氏元遺跡周辺で暮らしていた人々の墳墓と考えたい。

盆地内南側では、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小廻遺跡（42）が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系や吉備系、朝鮮半島系の土器など、搬入遺物が大量に出土した南講武草田遺跡（44）では他地域との交流がうかがわれ、この時代から海上交通が重要な役割を果たしていたと考えられる。

古墳時代に入ると、講武盆地の南側の丘陵地に奥才古墳群（18）で68基の古墳を確認、40基が調査され、前期から後期を通じて築造された古墳群であることが確認された。この奥才古墳群では、礫床と呼ばれる礫敷きの箱式石棺・木棺を主体部としている。また、「奥才型木棺」と呼ばれる長い礫敷きの木棺を２～３室に区切った木棺は、この島根半島と九州北部、丹後など分布が限られている。この古墳群からは、内行花文鏡、方格渦文鏡、素環頭大刀、碧玉製の石釧、琥珀製勾玉などの副葬品が出土している。

奥才古墳群の西側に位置する丘陵には、未調査ではあるが柄鏡型の墳丘をもつ前方後円墳を含め、10余基からなる鵜灘山古墳群（12）がある。北側の丘陵には全長40mの前方後方墳をもつ名分丸山古墳群（23）がある。これら、古墳時代前期にさかのぼる古墳群が分布している。

古墳時代後期では、切石造りの石棺式石室をもつ岩屋古墳（52）や、横穴式石室を有していたと伝えられ、鉄剣や須恵器の子持壷が出土した向山古墳（51）などが築造される一方、横穴墓が各地に分布している。工事中に発見された高田尾横穴墓では、２体の人骨とともに金銅製の圭頭



1．佐太前遺跡
2．佐陀川流域条里制遺跡
3．佐太神社神宮寺跡
4．弥山古墳群
5．伝朝山越前守墓
6．芦山横穴群
7．芦山城跡
8．免目横穴群
9．免目古墳群
10．佐太講武貝塚
11．大勝間山城跡
12．鵜灘山古墳群
13．名分塚田遺跡
14．海老山城跡
15．小川古墳群
16．小川宝篋印塔
17．嵐廻横穴群
18．奥才古墳群
19．名分藤山遺跡
20．名分藤山古墳
21．かまの古墳群
22．かまの横穴
23．名分丸山古墳群
24．本郷池頭遺跡
25．峯谷寺の上古墳
26．峯谷寺の奥横穴群
27．峯谷寺の横穴群
28．一矢横穴
29．田中の奥横穴
30．芦谷横穴
31．中ノソラ古墳
32．北田古墳
33．尾坂古墳
34．荒神古墳
35．小田山城跡
36．講武川流域条里制遺跡
37．南講武大日遺跡
38．才の奥横穴群
39．清水の奥横穴群
40．中尾谷山古墳群
41．中尾谷山横穴
42．南講武小廻遺跡
43．南講武小廻第２遺跡
44．南講武草田遺跡
45．堀部第４遺跡
46．堀部第１遺跡
47．堀部第３遺跡
48．堀部第２遺跡
49．北講武氏元遺跡
50．雉ヶ崎荒神古墳
51．向山古墳
52．岩屋古墳
53．柏古墳群
54．堀部第５遺跡
55．堀部古墳
56．多久神社裏古墳群
57．後谷横穴群
58．郷戸横穴群
59．大岩遺跡
60．かねじ谷横穴群
61．尾添古墳群
62．椋塚古墳
63．小林古墳
64．荒張古墳群
65．梨廻古墳群
66．半田池遺跡
67．M48古墳群
68．M49古墳群
69．M55古墳
70．牛切山城跡
71．M57古墳
72．帯差古墳
73．小丸山古墳
74．牛切会場古墳
75．牛切横穴群
76．牛切古墳
77．長瀬金蔵畑中古墳
78．伊貝山城跡
79．伴次山遺跡
80．志谷奥遺跡
81．志谷奥Ｂ遺跡

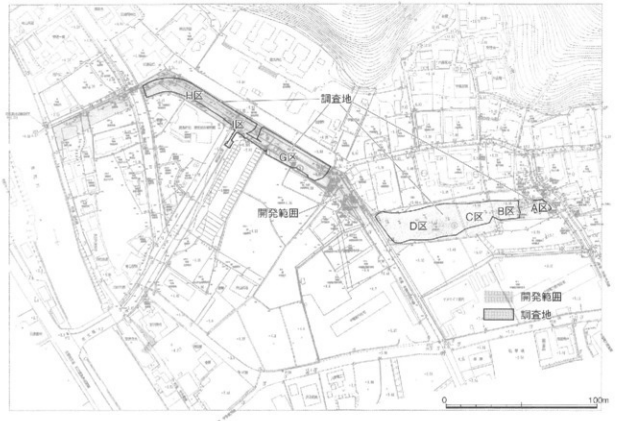
第２図　調査範囲と周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：25000）

大刀が出土している。

平安時代末には、佐太前遺跡の西側にある佐太神社の周辺は安楽寺院に寄進され、佐陀荘が成立している。『出雲国風土記』によると、出雲国一宮である熊野大社に次ぐ二宮であり、古代末から中世にかけて勢力を誇っていた。鎌倉時代初期に佐陀荘の下司職に補佐された朝山氏が佐陀神社の神主であった。佐陀荘は戦国末期には毛利氏の支配下に入り、荘園としての体制は失われていったようである。

戦国時代に入るとこの一帯にも多くの山城が築かれており、大勝間山城跡（11）や芦山城跡（7）、海老山城跡（14）、伊貝山城跡（78）、小田山城跡（35）などが知られている。大勝間山城は『陰徳太平記』という軍記物に名前が記されている。

近世には、江戸時代に松江藩の清原太兵衛によって宍道湖から日本海へ抜ける人工の河川である佐陀川が開削された。これによって宍道湖沿岸の水害が緩和され、流域の水田開発が進み、水運による交易も盛んになり、この地域に発展をもたらしていった。



第３図　開発予定範囲と調査地（Ｓ＝１：2500）

第３章　調査の結果

①調査地点（第３図）

佐太前遺跡の今回開発面積は4,800㎡で、広岡川に沿って細長く設定されている。そこで、北西から南東に向かってＡ～Ｈの調査区を設定した。ただし、佐太神社の社殿前や水道管・下水道管・電柱などが交差して調査が困難な箇所があり、調査が出来ない箇所に関しては工事施工時に立会調査を行い、必要最小限の調査を行った。実際に面的な発掘調査を実施したのはＡ～Ｄ区、及びＧ区とＨ区である。

各区の調査面積は、第１次発掘調査のＡ区が167㎡、Ｂ区が225㎡、Ｃ区が336㎡、Ｄ区が978㎡。第２次発掘調査のＧ区が426㎡、Ｈ区が187㎡。立会調査が961㎡である。

②基本層序（第５・８・19・74・101・108図）

佐太前遺跡のＡ～Ｄ区一帯は旧水田として利用されていた地域であるが、調査前においては全面にわたって葦などが生い茂る荒蕪地となっていた。一方、Ｇ区は佐太神社の社前にあり、現状ではアスファルト道路とその周辺の盛土・畑となっており、一部は水田として利用されていた。

Ｈ区は昭和60年に発掘調査が実施された鹿島歴史民俗資料館の西隣にある。このように各地点は距離的に離れているため基本層位に若干の相違が認められる。各地点の基本層位は以下のとおりである。

Ａ区（第５図）においては１層が表土、２層が旧耕作土であり、７層目の灰褐色粘質土がＢ区建物跡と対応すると考えられ、その下８～10層が縄文の遺物包含層、11層以下が無遺物層という堆積状況であった。

Ｂ区（第８図）においては１～３層は盛土や一部表土であり、５～７層は縄文や弥生土器、磁器などの細片が出土していることから、後世の撹乱を受けているものと考えられる。その下の９層（茶褐色砂質土）から建物跡を検出している。10～14層は10cm～20cmのほぼ水平な堆積であり、18層より上坑や柱穴、自然流路などを検出しているが遺構にともなう遺物は出土していない。15・18・19層が縄文の遺物包含層、その下層がＡ区11層と対応する黒色の無遺物層という堆積状況であった。

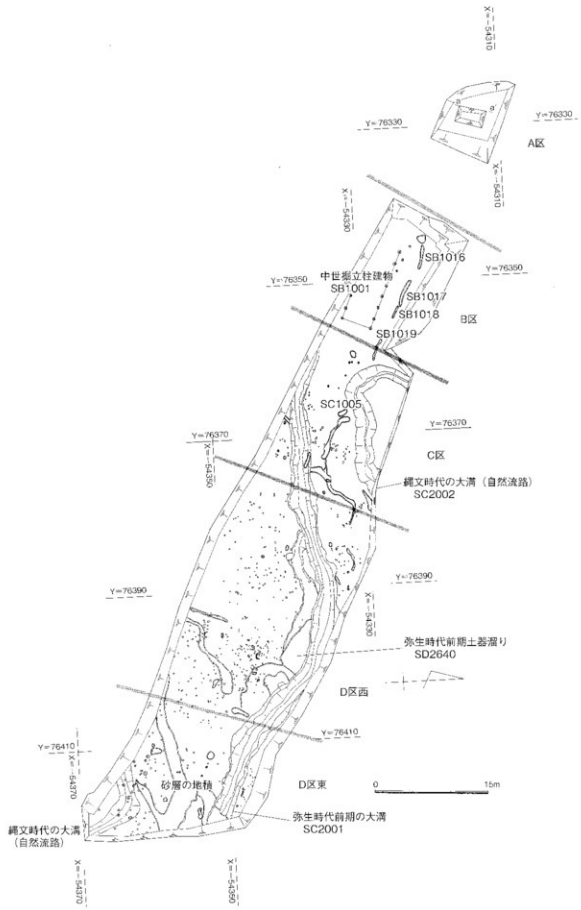
Ｃ・Ｄ区（第19図）においては１層が旧耕作土であり、Ｃ区においてはその下層７層（暗褐色シルト）で、Ｄ区西側においては５層（明茶褐色砂質土）で、Ｄ区東側においては15層（明茶褐色砂質土）で第１遺構面を検出している。

また、Ｃ区においては12層（灰茶褐色粘質土）、Ｄ区西側においては27層（明茶褐色シルト）Ｄ区東側においては19・24層（灰茶褐色砂質土）が第２遺構面で、弥生前期の大溝や、土器溜まり、縄文の自然流路などを検出している。遺物は縄文土器、弥生土器などが出土している。その下、Ｃ区では16層、Ｄ区西側では40・42・44層、Ｄ区東側では45層の黒色無遺物層という堆積であった。

Ｇ区（第74図）においては１・３・４・５・６・10・15・16・17層が、厚さ1.4m～2.0mほどの盛土や撹乱土が堆積している。盛土の下49・50層が旧耕作土であり、その下層に厚さ10cm～20

cmの茶褐色遺物包含層22・27・103・104層が堆積する。100・104層において第１遺構面を検出し、中近世の建物跡や、多くの柱穴、土坑も検出している。その下層137・152・153層は弥生から古墳時代の遺物包含層が堆積しており、多量の遺物が出土している。この黒色包含層の下層が明茶褐色上の地山171・172・173層で第２遺構面を検出し、建物跡や多くの柱穴、土坑を検出した。180層で旧河道を２本検出している。

Ｈ区（第101図）においては１～２層は盛土であり、その下に旧耕作土の３層が堆積している。その下６層・32層（暗灰色粘質土）や50層（黄褐色砂質土）が堆積しており、これが第１遺構面で、中近世の遺構や遺物が出土している。その下８・65層（黒褐色粘質土）が弥生から古墳時代の遺物包含層である。その下54層（黄褐色シルト層）が第２遺構面の地山であり、柱穴や溝を検出しているが、遺構にともなう遺物はほとんど出土しなかった。その下に黒色粘土無遺物層55層が堆積している。



第４図　第１次調査Ａ～Ｄ区成果図（Ｓ＝１：500）

③調査の概要

第１次調査

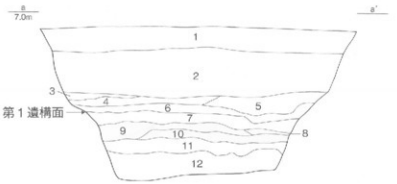
Ａ区（第４・５・６図）

Ａ区は今回調査範囲の中でも最も西北側の調査区である。現状は畑であり、部分的に後年の盛土がかなり堆積していた。トレンチ調査を行ったところ、遺構などの存在がなく、トレンチ調査で終了した。

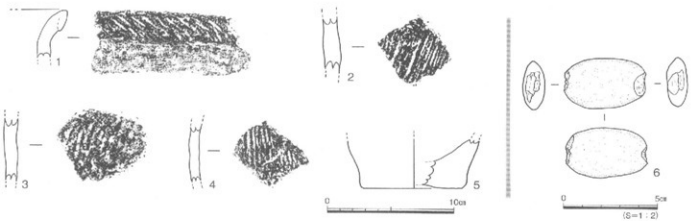
基本層序としては、表土及び畑に伴う耕作土（第５図１層）があり、この畑の下は灰色の旧耕作土（第５図２層）が堆積していた。その下の暗灰褐色粘土層（第５図７層）が後述の中世掘立柱建物跡検出層と対応することから、第５図７層標高5.4～5.5mが第１遺構面の基盤層と考えられる。

先述したように遺構は検出されなかったが、第１遺構面の下、標高5.3～4.8m付近で縄文土器を主体とする遺物包含層（第５図８～10層）を検出した。

出土遺物はコンテナ１箱程度で、図化したものは６点である。１～５は縄文土器の細片で条痕を施している。１は口縁片、５は底部である。６は両端を打ち欠いた石錘である。



第５図　Ａ区西壁土層断面図（Ｓ＝１：60）

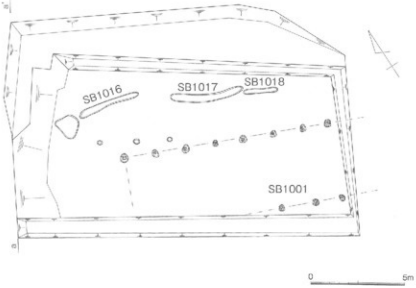


第６図　Ａ区出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

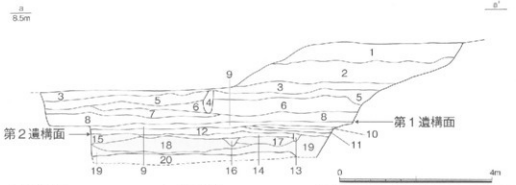
B区

B区第１遺構面（第４・７・８・図）

B区はA区のすぐ南東隣の調査地で、現状では近年の盛土やバラスが１m近く堆積しており、その上に畑や駐車場が設けられていた。盛土の下は灰色や黄褐色の粘質土がほぼ水平に堆積し、縄文・弥生土器から磁器までの細片が認められた（第８図５～７層）。その下、標高5.8m前後の灰色強粘土層（第８図８層）から人力掘削を行い、遺構・遺物の検出に努めたところ、標高5.5m（第８図９層）の第１遺構面から溝や柱根などが検出された。以下に主要な遺構と遺物について記す。



第７図　B区第１遺構面平面図（S＝１：200）

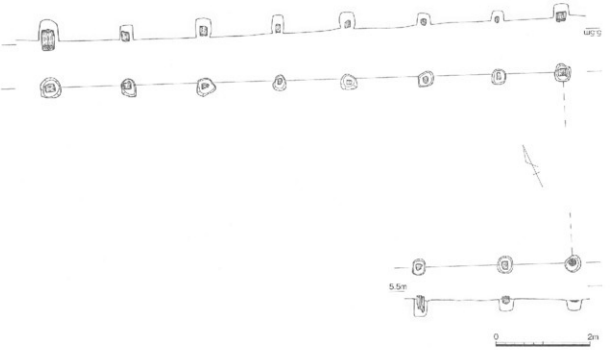


第８図　B区西壁土層断面図（S＝１：100）

中世掘立柱建物跡　ＳＢ1001（第７・９図）

Ｂ区第１遺構面南側で検出された大型建物跡で、主軸をＷ－23°－Ｎにとる。検出長は７間×１間（11m×４m）であるが、遺構が調査範囲外に延びると思われるため、実像としてはもう少し大きいかもしれない。各柱を構成するピット内には角材の柱が良好に残っていた。ピット内からは出土遺物が皆無なため、遺構の時期比定は困難であるが、第１遺構面の基盤層となる第８図９層から８世紀頃の須恵器が出土しており、これ以降の建物であると考えられる。

柱は根元の数十cmだけ残っており、大部分が後世の削平を受けている様子であった。

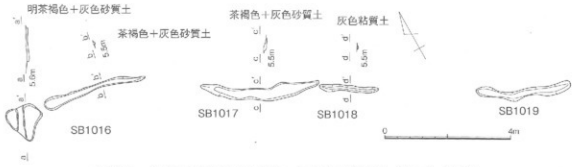


第９図　Ｂ区掘立柱建物跡実測図（Ｓ＝１：80）

溝　ＳＢ1016～1019（第７・10図）

Ｂ区第１遺構面北側で検出したこの溝は、幅40cm、深さ８cm程度で途切れ途切れに東西方向に走っている。主軸をＷ－28°－Ｎにとる。この溝状遺構は掘立柱建物跡ＳＢ1001より５cm程高いところから検出しており、雨落ち溝の可能性も考えられるが、ここでは溝状遺構とした。

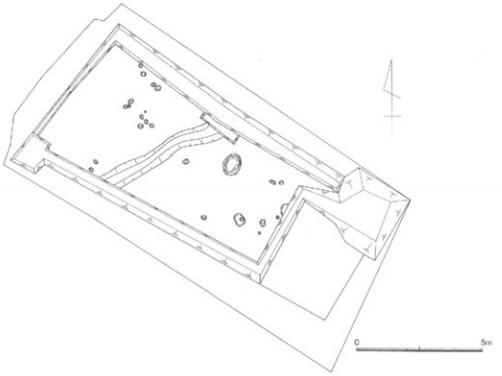
埋土から弥生土器が出土しているが、時期を決定するものではなく、細片のため図示できなかった。



第10図　B区溝状遺構ＳＢ1016～ＳＢ1019実測図（Ｓ＝１：120）

B区第２遺構面（第４・７・８・11図）

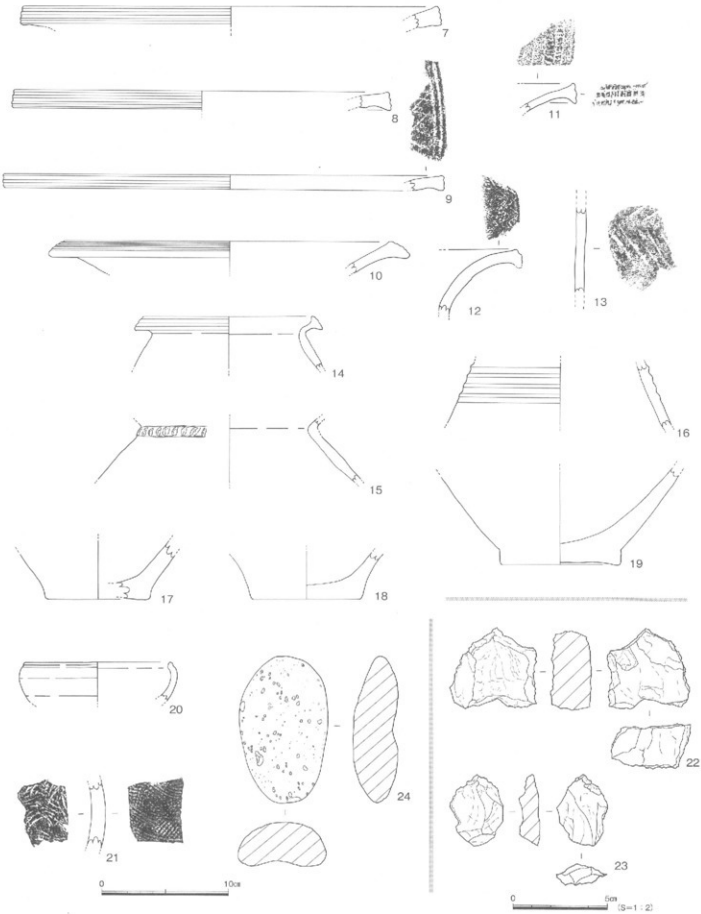
中世建物跡などを検出した第１遺構面の下は２～３段に分けて人力掘削を行った。特に標高5.0～5.5m前後の緑色シルト～砂層（第８図15・18・19層）は縄文時代の遺物包含層であり、土坑やピット、自然流路と思われる溝などの遺構も検出したが、遺構に伴うような遺物はほとんど出土しなかった。



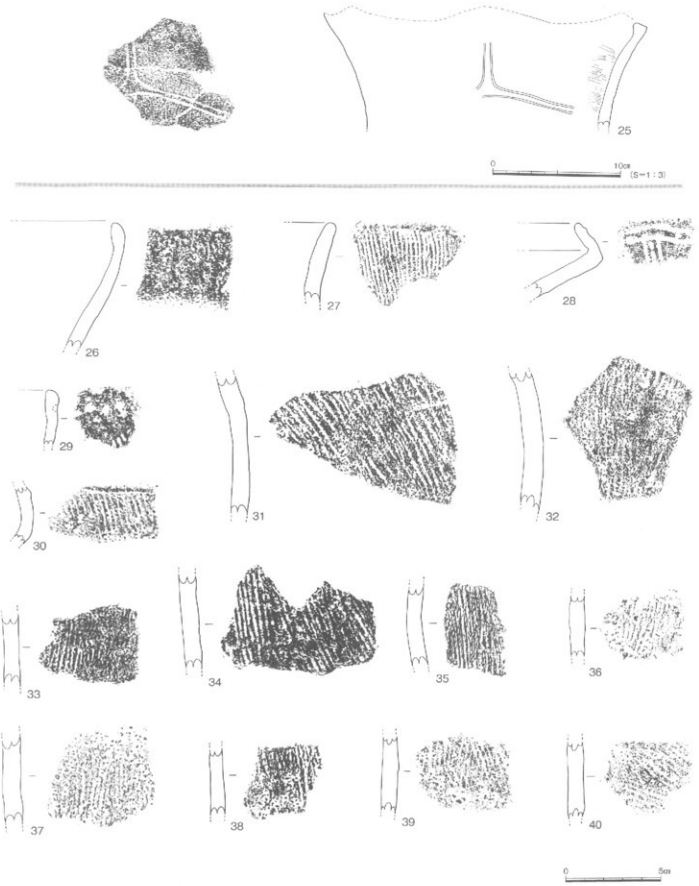
第11図　B区第２遺構面（縄文遺構図）平面図（Ｓ＝１：150）

遺物包含層出土遺物（第12・13・14・図）

B区の遺物包含層出土遺物については、第１遺構面までの盛土～灰色粘土層（第８図１～８層）の出土遺物は、撹乱のため、説明を割愛した。主に第1遺構面のベースとなる茶褐色砂質土（第８図９層）からのものを下層包含層出土遺物（第12図７～23）、それより更に下の標高5.0～5.5m前後の緑色シルト～砂層（第８図15～19層）からのものを縄文包含層出土遺物（第13・14図25～49）の２つの区分に分けて報告する。



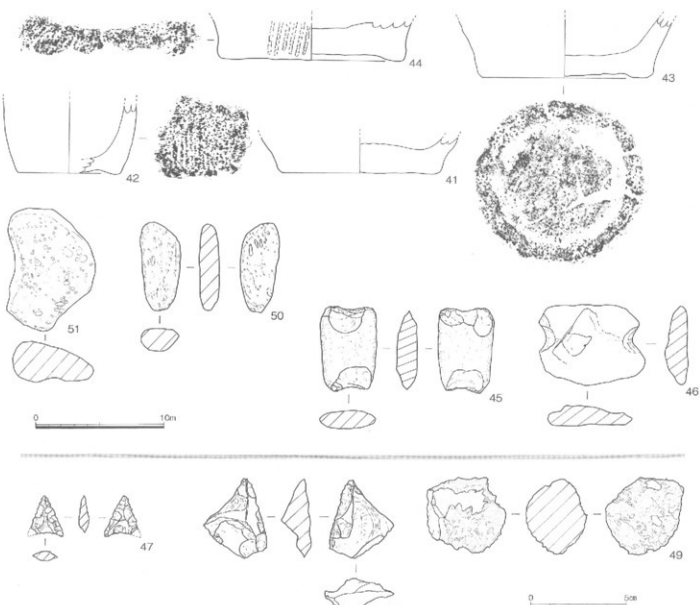
第12図　B区下層包含層出土遺物実測図（S＝1：3）



第13図　B区縄文包含層出土遺物実測図（1）（S＝1：2）

下層包含層出土遺物について、７～12は弥生土器の壺、凹線文を施した広口壺が多い。９は沈線上の格子目文、11には廉状文、12は波状文を施す。13は体部片で綾杉文を施す。14は凹線を施す甕、15は貼付突帯を施した壺、16は肩部に凹線を施す。17～24は弥生土器の底部片、20は須恵器の碗、21は須恵器の甕でタタキ目を残す。22、23はメノウの小剥片、24は軽石である。

縄文包含層出土遺物について、25～28は縄文土器の鉢で、25はわずかに口縁部分が残る。波状口縁か。26～29は口縁部分の小片で、29には刺突文を施す。30～44は条痕や縄文を施した縄文土器片で、30～40は体部片、41～44は底部である。45～49は石器で、45、46は石錐、47は黒曜石製の凹基式の石鏃、48は黒曜石の剥片、49も黒曜石だが、ほぼ自然面を残している。50・51は軽石である。

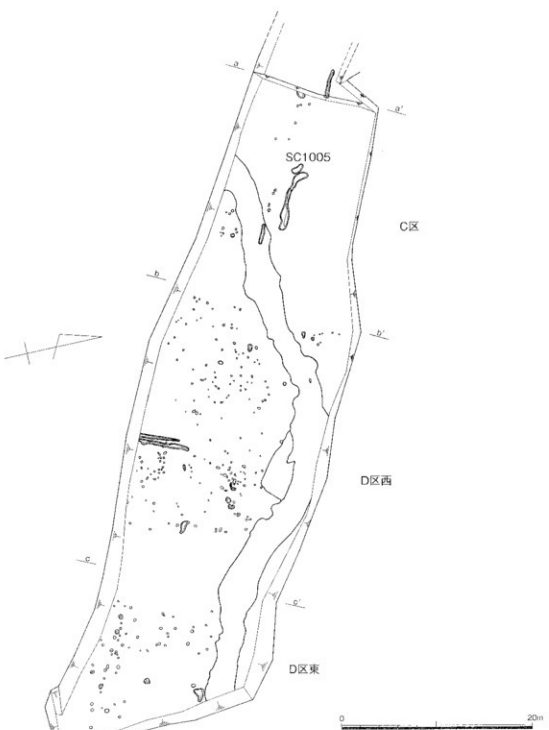


第14図　B区縄文包含層出土遺物実測図（２）（S＝１：３）

C・D区

C・D区第１遺構面（第15図）

C区の東側D区は、調査面積が広いため、D区西、D区東と２分割して調査を実施した。当該調査区は一面の旧水田地帯で基本層序も同一であり、地形的に同じ関連にある。また、弥生時代の大溝が引き続いて検出されたため、C・D区で併せて報告する。

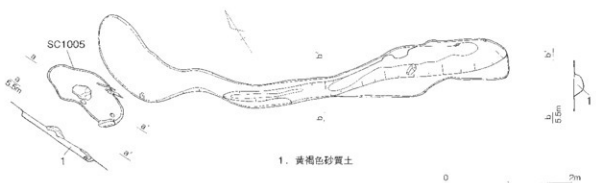


第15図　C区D区第１遺構面平面図（S＝１：400）

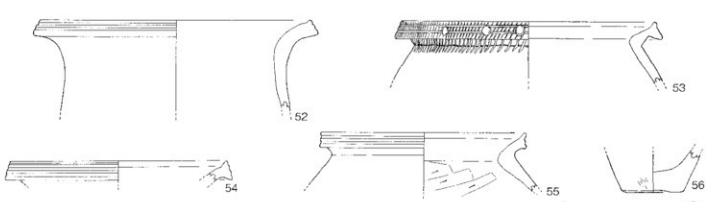
C・D区は旧水田地帯であり、地形的には北西（C区側）から南東（D区側）に向けて低くなっている。C～D区の広範囲にわたって、灰色の旧耕作土下標高4.6～5.0mから多数のピットが確認出来たため、これを第1遺構面として面的調査を行った。この面のベース土は明茶褐色土層で遺構の埋土は大別して黒色土と灰色土からなっていた。以下、主要な遺構と遺物について記す。

土坑　SC1005（第16・17図）

SC1005はC区北側で検出された土坑で、長軸1.4m、短軸0.7m、深さ0.1mを測り、埋土は黄褐色砂質土で弥生時代中期の遺物が出土している。出土遺物（第17図52～56）のうち、52、54は凹線を施した弥生土器の壷の口縁部分で、52の復元口径は21cm、残存高は7.2cmを測る。
53は加飾性の高い弥生土器の甕で、刻目と沈線を加えた後、円形浮文を付している。



第16図　SC1005実測図（S＝1／60）



第17図　CD区SC1005出土遺物実測図（S＝1：3）

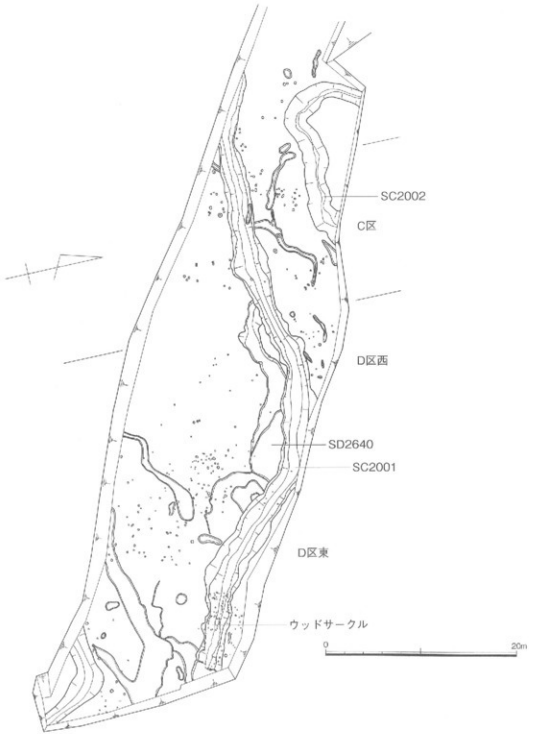
C・D区第2遺構面（第18・19図）

第1遺構面において、輪郭は不明瞭だが遺構と思われるものもあったため、人力掘削にて第1遺構面のベース土を若干掘り下げて精査を行ったところ、標高4.5～4.9mで更に多数の遺構を検出した（第18図）。これを第2遺構面とし、主な遺構は弥生時代前期の大溝SC2001（第25図）、弥生時代前期の土器溜まりSD2640（第47図）、縄文時代の自然流路SC2002（第20図）、多数のピット類である。SC2001からは大量の弥生土器を検出し、この溝に接する位置に検出されたSD2640からも多くの弥生土器を検出した。第1次調査の出土遺物はコンテナ70箱余だが、うち8

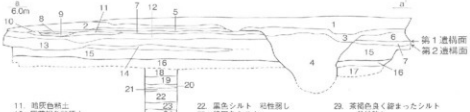
～９割はＳＣ2001とＳＤ2640関連の出土遺物で占められるといった状況であった。

第２遺構面と呼称したが、第１遺構面では明確でなかったものが良好に検出されたものが多数を占めると考えられるため、調査成果図として合成した図を作成した（第18図）。

Ｃ区では緑灰色粘土層の縄文時代中期の遺物包含層（第19図13～15層）、Ｄ区では（34層・38層）から遺物は検出されたが、自然流路などの他に顕著な縄文時代の遺構は存在しなかった。以下に主要な遺構と遺物について記す。

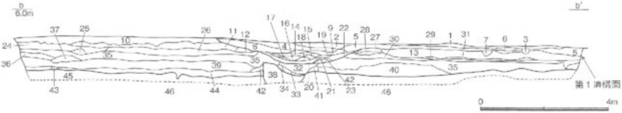


第18図　Ｃ区Ｄ区第２遺構面平面図（Ｓ＝１：400）



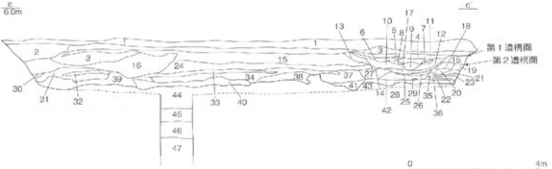
1. 暗灰色強粘土　旧耕土
2. 明茶褐色シルト　包含層
3. 明茶褐色よく締まったシルト
4. 暗灰色砂礫層
　縄文後期～晩期初頭の
　遺物含、自然流路か
5. 緑褐色砂質土　径1㎜未満の礫含
6. 暗茶褐色シルト
7. 暗褐色シルト
　比較的良く締まる
　B区中世建物検出面
8. 灰色粘土
9. 暗茶褐色粘質土
10. 暗灰褐色シルト
11. 暗灰色粘土
12. 灰茶褐色粘質土
13. 緑灰色粘質土
　縄文包含層
14. 緑灰色砂質土
　径1～5㎜の砂礫含
　（旧河道か）縄文包含層
15. 緑灰色粘土　縄文包含層
16. 黒色強粘土　無遺物層
17. 緑白灰色良く締まったシルト
18. 淡緑色強粘土
19. 緑色強粘土及びシルト
20. 緑色粘土
21. 暗緑色粘土
22. 黒色シルト　粘性弱し
23. 緑灰色シルト
24. 緑色シルト
25. 黒色強粘土
26. 緑灰色砂礫層
　径1～5㎜の礫含
27. 暗褐色粘土
28. 黒色粘質土
29. 茶褐色良く締まったシルト
　粘性強し
30. 暗緑色強粘土
31. 緑色粘土
32. 緑色砂礫層　径1㎝大の礫多し
33. 茶褐色良く締まったシルト

C区　西壁土層断面図（S＝1：120）



1. 灰色強粘土　旧耕作土
2. 暗灰色粘土＋
　明茶褐色ブロック土
3. 暗灰色砂質土（ブロック）
4. 茶褐色砂質土　小礫含
5. 明茶褐色砂質土　鉄分沈殿
6. 灰色砂質土＋明茶色シルト
7. 暗灰色砂質土
　炭、径2㎜の砂含
8. 灰色砂礫層
　径1～3㎝の礫多し
9. 灰色＋緑色砂礫層
　径3㎝の礫含
10. 暗灰褐色比較的　よく締まった
　シルト
11. 茶褐色よく締まったシルト
12. 茶褐色＋灰色砂質土
13. 褐色砂　径1～3㎜の礫を
　多量に含
14. 灰色砂層
　径4㎝の礫含、粘性あり
15. 緑灰色砂層　ややシルト
16. 緑灰色砂層
　径1～5㎝の礫含
　やや粘性あり
17. 緑灰色粘質土
18. 灰色砂層
19. 暗灰色砂質土
20. 緑灰色砂層＋暗灰色粘土
　炭・土器含
21. 灰色砂層　炭含
22. 灰色粘土　礫・炭含
23. 青灰色砂層　径1㎝の礫含
24. 暗灰褐色よく締まった粘質土
25. 茶褐色砂層
26. 灰茶褐色砂質土
　径1～5㎝大の礫多し
27. 明茶褐色シルト　やや砂質
28. 灰茶褐色にごった砂質土
29. 褐色比較的よく締まった
　シルト
30. 褐色シルト　やや砂質
31. 暗灰色粘土　旧表土か
32. 灰色砂層
　径1～3㎜の礫多し
33. 暗灰色有機質層
34. 緑灰色砂層　やや粘質、炭含
35. 明茶色粘土
36. 茶褐色シルト
37. 茶褐色シルト　やや砂質
38. 緑色砂層　非常に細かい砂
39. 暗茶褐色粘土
40. 緑色強粘土
　（トレンチ部分は）無遺物層
41. 灰色強粘土
　40層のグライ化したものか
42. 黒色強粘土　無遺物層
43. 緑灰色粘土
44. 黒色強粘土　無遺物層
　42層と異なる
45. 暗緑灰色強粘土
46. 緑灰色よく締まったシルト

D区　西側西壁土層断面図（S＝1／120）



D区　東側西壁土層断面図

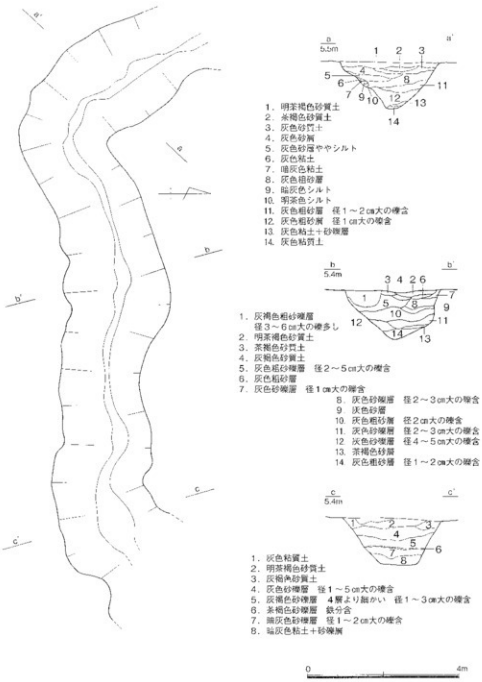
1. 灰色強粘土　旧耕作土
2. 灰褐色砂層＋茶褐色シルト
　遺物包含層
3. 茶褐色粘質土　鉄分沈殿
4. 明茶褐色よくしまったシルト
　D区土器溜まり検出層
5. 暗灰色砂質土
6. 暗灰色砂質土
　径1～3㎝の小礫含
7. 暗灰褐色砂層
8. 暗灰色シルト　砂質砂粒含
9. 灰色砂層
　径1～3㎜の非常に細かい砂
10. 暗灰色砂層
　径1～3㎜の非常に細かい
　砂、炭含
11. 暗灰褐色砂礫層
　8層よりやや色調が明るい
12. 灰褐色砂礫層
　径1～3㎝の礫多し
13. 灰褐色砂礫層
　8層より礫が少なく砂が多い
14. 暗灰色砂質土
　径1～5㎝の礫含
15. 明茶褐色砂質土　小礫含
16. 明茶褐色よくしまったシルト
17. 暗灰色粘土
　炭・有機質・土器含
18. 灰茶褐色砂礫土
　径4㎝前後の礫を多く含
19. 灰茶褐色砂質土　砂礫が多い
20. 暗灰色砂礫層
　径3㎝前後の礫が非常に多い
21. 茶褐色シルト
　部分的に径1～3㎝の礫を
　多く含
22. 暗褐色砂質土　砂粒多し
23. 暗灰色シルト　旧表土か
24. 明茶褐色よくしまったシルト
25. 灰色粘質土
26. 灰色砂層
　水が流れたような粘土を含
27. 茶褐色砂礫層
　径3～4㎝の礫多し
28. 明茶褐色砂礫層
　径4㎝前後の礫を含
29. 茶色砂ブロック土
30. 灰色砂礫層
31. 灰褐色砂礫層
　径2～3㎝の礫含
32. 暗灰色粘質土　旧表土か
33. 暗褐色砂質土　旧表土か
34. 茶褐色シルト
　やや緑色ブロック含
35. 茶褐色砂質土
36. 灰色粘質土　旧表土か
37. 暗茶褐色砂礫層
　径1～4㎝の礫多し
38. 緑灰色砂質土
　砂が多くやや粘質あり
39. 灰褐色砂礫層
　径2～3㎝の礫含
40. 明茶褐色砂質土
41. 暗茶褐色砂層
42. 灰茶褐色粘土
43. 緑茶褐色砂礫層
44. 緑灰色砂礫層　灰色強粘土含
45. 黒色強粘土
46. 緑色砂層
47. 緑色粘土

第19図　C区D区土層断面図（S＝1：120）

縄文時代の自然流路　ＳＣ2002（第20・21・22・23・24図）

Ｃ区の第２道構面標高4.9m付近で明確に検出された大溝で、若干の蛇行をしながら東西方向に走っている。溝の検出長は16.1m、最大幅は2.8m。断面の形状はＶ字形から逆台形を呈しており、最大深さは1.3mと非常に深い。埋土は灰色砂礫層がベースで、茶褐色砂層や灰色粘土層が混じっている。

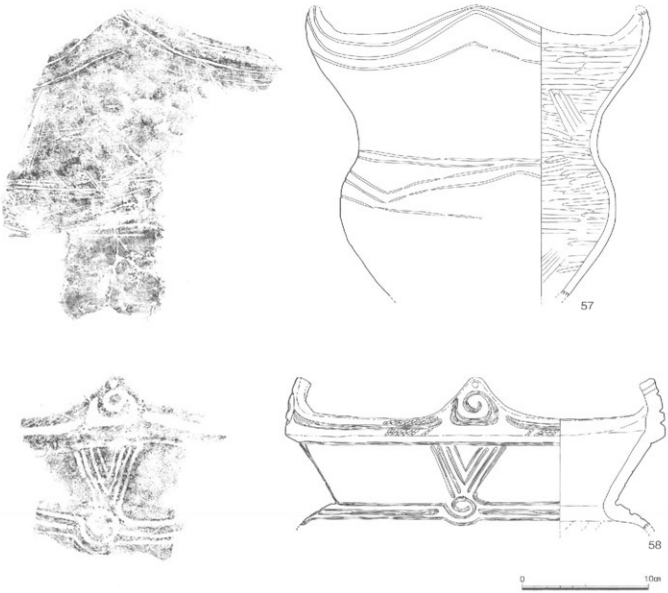
この溝からは縄文後期～晩期初頭のものと考えられる遺物が比較的まとまって出土している。



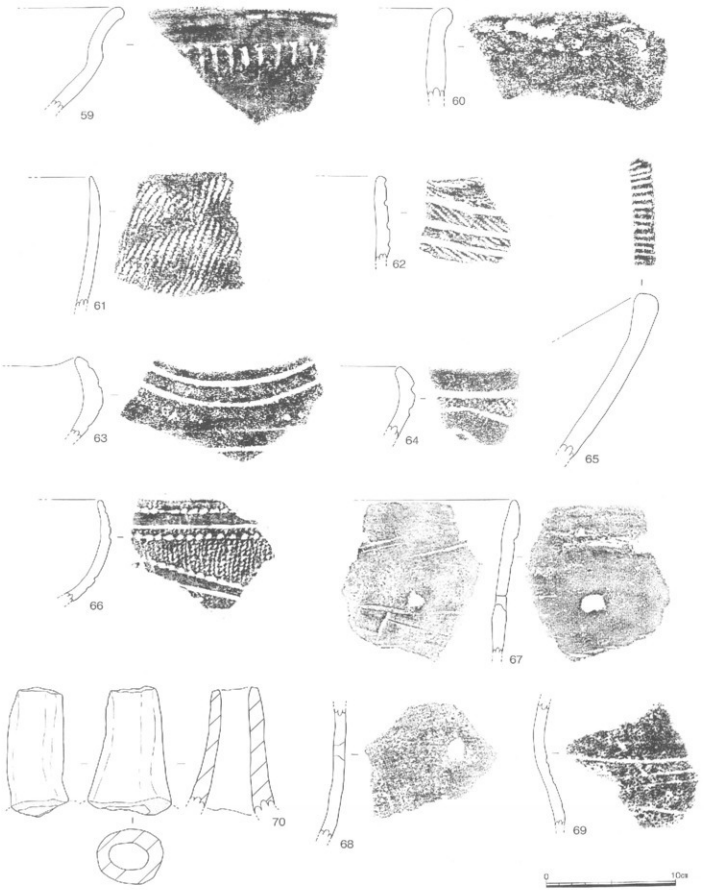
第20図　縄文大溝（自然流路）ＳＣ2002平面図、土層断面図（Ｓ＝１：100）

溝の埋土はほぼ砂層のみではあったが、断面に極めて鋭いV字形を示す箇所もあり、人工のものか自然のものかの判断に苦しんだ。そこで地質学からの現地指導を受けたところ、自然河道の可能性が高く、縄文時代の海進や海退に伴う地表面の変化において形成されたものではないかとのコメントを受けた。

出土遺物（第21・22・23・24図57～88）の57～79は縄文土器、80～88が石器である。57は残存部位が多い深鉢で、口径26cm、残存高23cmを測る。色調は黒色でキャリパー形の器形、口縁形状は波状口縁を呈している。外面は太い沈線により曲線文を描くが、施文後に外面全体をナデており、沈線は部分的にナデ消されている。内面はヨコミガキを主として全体的に丁寧にミガキを施している。58の精製深鉢は口縁部が肥厚するいわゆる縁帯文土器で、沈線による直線文及び曲線文を描いている。復元口径は28cmで、口縁端部には穿孔が見られる。59～67は口縁部分で、59の



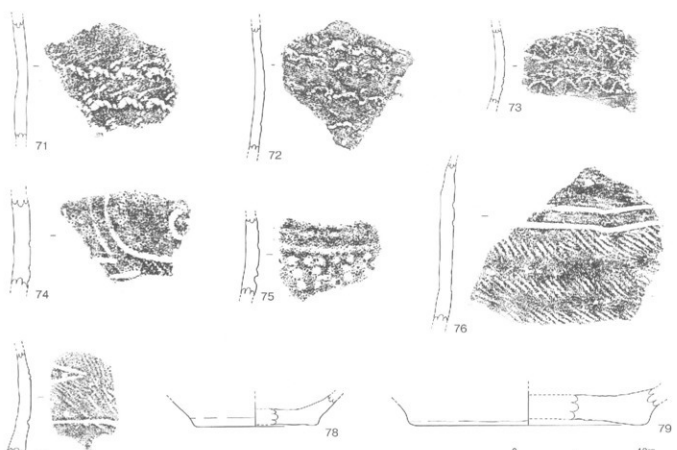
第21図　ＣＤ区ＳＣ2002出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：３）



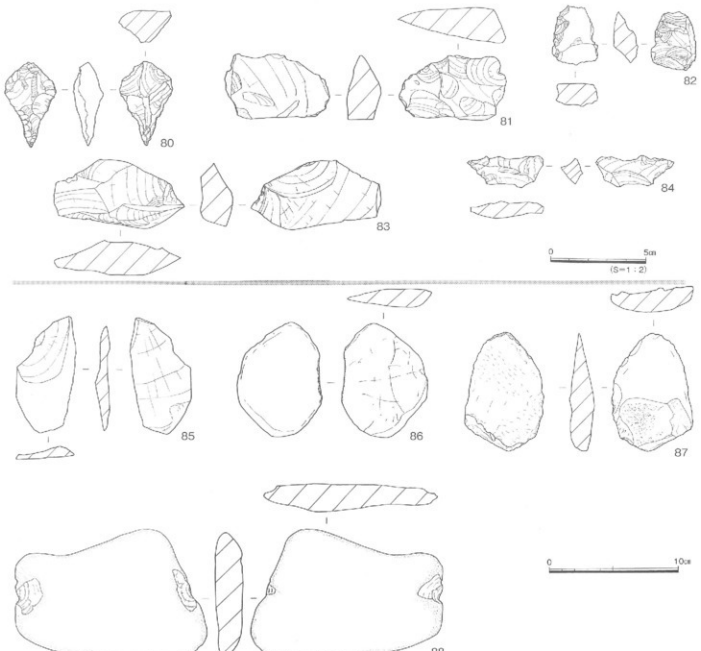
第22図　ＣＤ区ＳＣ2002出土遺物実測図（2）（Ｓ＝１：３）

深鉢は口縁部分をやや凹ませ、体部に刺突文を施す。60は小片で傾きは不明、口縁端部に丸みを帯びる。61の口縁端部はやや尖り気味、調整は外面が縄文、内面がナデである。76は外面に縄文を施した後、太い沈線を描く。63の破片はキャリパー形の波状口縁か、残存部分では太い沈線が３条確認できる。65は波状口縁の破片、口唇分に爪形の刺突文による刻目が見られる。66は精製の鉢で、口縁部がやや内湾し、縄文、沈線、刺突と加飾性に富んでいる。67は直立気味の口縁端部をやや肥厚させ、荒いナデ調整を行う一方、体部は内外面全体をミガキ、丁寧に仕上げている。体部に焼成後の穿孔が見られる。68にも体部に穿孔が見られる。70は注口土器の注口部分である。71～77は体部の小片で、71～73の撚糸文、74の曲線文、75の刺突文、76の縄文など、様々な文様が見られる。78と79は底部である。

80～88の石器は、80の石錐状の黒曜石と、88の石錘を除き剥片である。



第23図　ＣＤ区ＳＣ2002出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１：３）



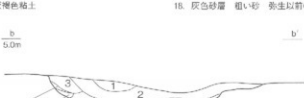
第24図　ＣＤ区ＳＣ2002出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１：３）

弥生時代前期の大溝　ＳＣ2001（第25～45図）

Ｃ～Ｄ区の長い範囲にわたって検出された弥生時代前期の大溝で、検出長65.8m、最大幅4.2m、最大深さ0.7mを測る。溝を平面的に見ると、東半分では南側（佐太神社側）に向かって緩やかに円弧を描くように、西半分はほぼ直線的に走っており、西端は北側にわずかに膨らみつつある。

溝の断面形状は緩やかなU字形を成している。部分的に弥生時代以前の砂層などを確認しており、自然の河道を利用しつつ形成されていったものと考えられる。埋土は黒～暗灰褐色の粘質土を主体に、粗砂や砂層などからなり、主体となる層からは大量の弥生土器が出土した。このような土層の堆積状況にあるため、流水のあった状態（砂層堆積）やほぼ滞水していた状態（粘質土

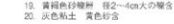
1．茶灰色砂礫層　径3cm大の礫含
2．明茶褐色よくしまった砂質土
3．灰色シルトブロック
4．灰色砂層　粘質強し
5．灰色砂層
6．暗灰褐色粘土　水が流れたような細かい砂含
7．暗灰褐色粘土
8．緑灰色砂層　粘質強し
9．暗灰褐色粘土
10．緑茶褐色砂層　細かい砂
11．暗灰色砂層　粘性強し
12．灰色砂層　細かい砂
13．暗灰褐色粘土
14．暗灰褐色粘質土　砂含
15．明茶色砂層　鉄分多く含
16．黄褐色粗砂層
17．灰色砂層　径3cm大の礫含
18．灰色砂層　粗い砂　弥生以前の砂層か



1．灰色砂礫土
2．灰褐色砂礫層
3．黒灰色粘質土
4．褐色粘質土
5．灰色砂層
6．灰色粘質土
7．濃灰色粘質土
8．灰色粘土
9．灰色細砂層　緑色小礫含

1．灰色砂層
2．茶褐色砂質土
3．灰色砂層　粗かい砂　径1cm大の礫含
4．暗灰色粘土＋砂
5．灰色砂層
6．黄色細砂質土　径1cm大の礫多し
　遺物少ないが弥生土器わずかに含
7．茶褐色砂礫土　径1cm大の礫含　縄文土器？含
8．灰色粘土
9．灰色砂層　径1～2cm大の礫含
10．茶褐色粗砂礫層　径2～3cm大の礫含
11．灰色砂層
12．暗灰色強粘土
13．茶褐色砂層

1．明茶～灰色よくしまった砂質土
2．暗灰褐色よくしまった粘質土　砂含
3．白～茶色粗砂層　径0.5cm大の礫含
4．緑茶褐色砂質土　ややシルト
5．暗灰色細質土＋黒色炭
6．炭色砂層　径0.5～1cm大の礫含
7．暗灰色粘質土　10層と同じ砂を含
8．暗灰色粘土　灰色砂含
9．暗灰色やや粗い砂層
10．茶褐色比較的粗い砂質土
11．暗灰色粘土
12．明茶色砂質土
13．暗灰褐色砂質土　径3cm大の礫含
14．暗灰色粘土　多量の粘土ブロック含
15．茶灰色シルト　砂含
16．灰茶色砂質土＋粘土
17．暗灰色粘土＋砂　16層より粘質強し
18．暗灰色強粘土
19．黄褐色砂礫層　径2～4cm大の礫含
20．灰色粘土　黄色砂含



第25図　弥生時代前期大溝ＳＣ2001平面図（Ｓ＝１：250）　土層断面図（Ｓ＝１：40）

堆積）などがあったと考えられる。

この溝の用途に関しては不明であるが、縄文時代の流路の確認や大量の出土遺物、溝の埋土などから見て、縄文以来の旧河道を利用するような形で形成され、水路などの利用や集落縁辺のごみ捨て場として機能を果たしていたと考えられる。この溝の底面からはいくつか杭列を検出した。

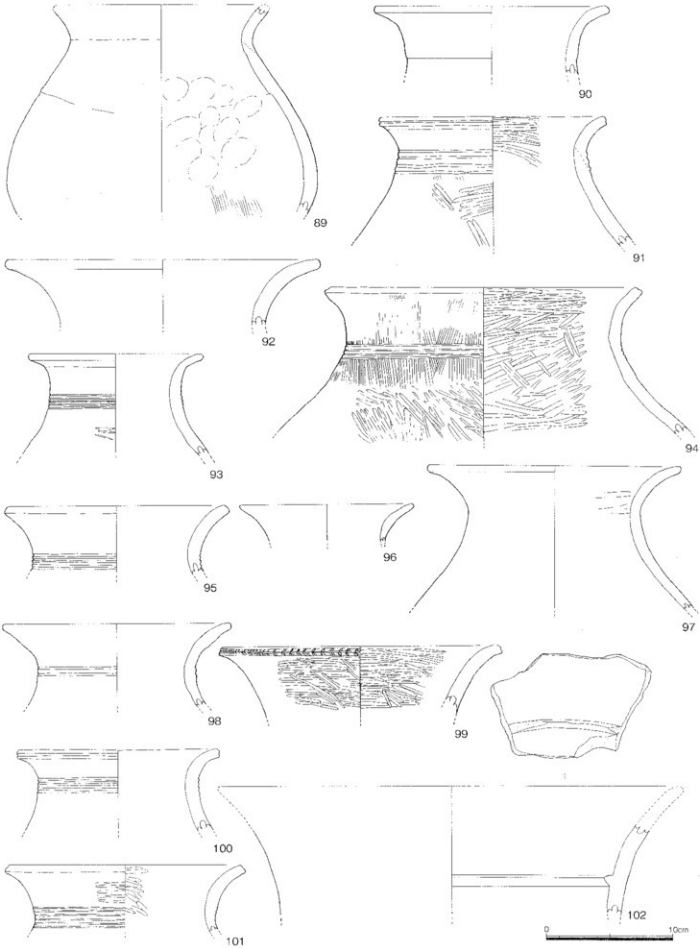
出土遺物は弥生時代前期の壷、甕、鉢、蓋の他に、石包丁、石鏃、石錘、紡錘車、石皿、木製の櫛、鍬、鋤未成品などを検出している。土器の型式はほぼ全て弥生時代前期後半（新段階）のものであり、溝は比較的短期間に埋没したものと考えられる。

出土遺物の詳細は下記のとおりである。

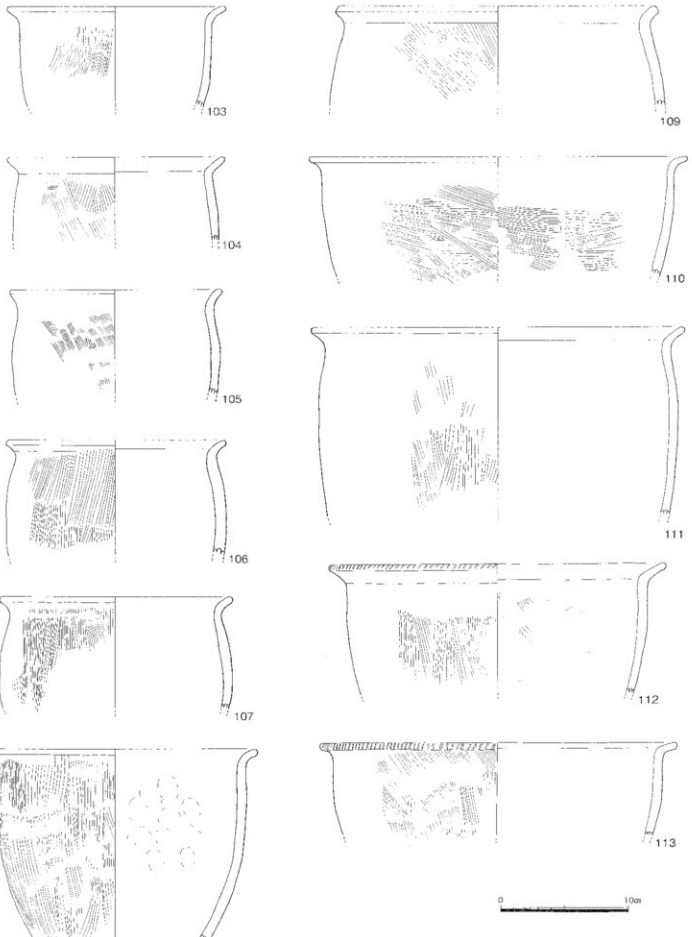
89～94は弥生土器の壷である。89の調整は外面がナデ、内面オサエで、作りがやや粗雑な印象を受ける。端部は若干欠損していると思われ、断面観察では結土紐は外傾している。90は小片で、詳細は不明だが、残存部分の頸部にわずかに段が見える。91は口縁片で、復元口径17.9cm、調整は外面がハケ目後ミガキ、内面はミガキ、口唇部に沈線１条、頸部に沈線４条を施す。92は極小片、93は口縁片で沈線５条を施す。ミガキを行っていると思われるが風化が著しい。94は口縁部分のみ４分の１ほど残存し、口縁端部は面をなし、頸部に沈線４条、調整は外面がハケ目後ミガキ、内面はミガキである。95は口縁片で、残存部分に沈線を４条確認できる。96～102も口縁片であり、96は風化が極めて著しい。97は復元口径20cm、残存高11.5cmのやや大型品、98は作りが粗雑で器壁の凹凸が著しい。99は内外面を丁寧にミガキ、口縁端部には沈線と刻目を施す。100・101は頸部などに太い沈線を施す。102は口縁内面に貼付突帯を施している壷の小片であるが、復元口径は32cmを測る大型品であったと思われる。

103～142は弥生土器の甕である。木道構であるＳＣ2001からは壺は少ないが、甕の破片が多量に出土している。甕の口縁～体部に限っても、無文またはハケ目調整を残すもの（103～113）沈線を１～２条施すもの（114～123）、沈線を３～４条施すもの（124～134）、加飾性が高く、刻目・沈線・刺突・条痕など様々な文様を施すもの（135～142）など様々なものが出土している。103～113にはハケ目痕が残存しており、112・113の口縁端部には刻目を施す。114～123は沈線を１～２条施し、116は外面にハケ目、内面にオサエを施している。122の復元口径は34.4cm、124～134は沈線を３～４条施し、ハケ目などの調整が残っている。135～142は加飾性の高いもので、135は上半分の２分の１程度残存し、色調は暗茶褐色を呈す。復元口径27.0cm、残存高17.8cmを測る。口縁端部は貼付で刻目を施し、その下に３条×３列の沈線を施す。沈線の列の間に円形（正確には逆Ｃ字）の刺突文を巡らせている。内外面の調整はナデ？で、外面にはススが付着している。136は小片で、復元口径22.3cm、残存高8.0cmを測る。口縁端部は三角状に尖り、刻目とその下に沈線を２条施している。外面にミガキ痕が残る。

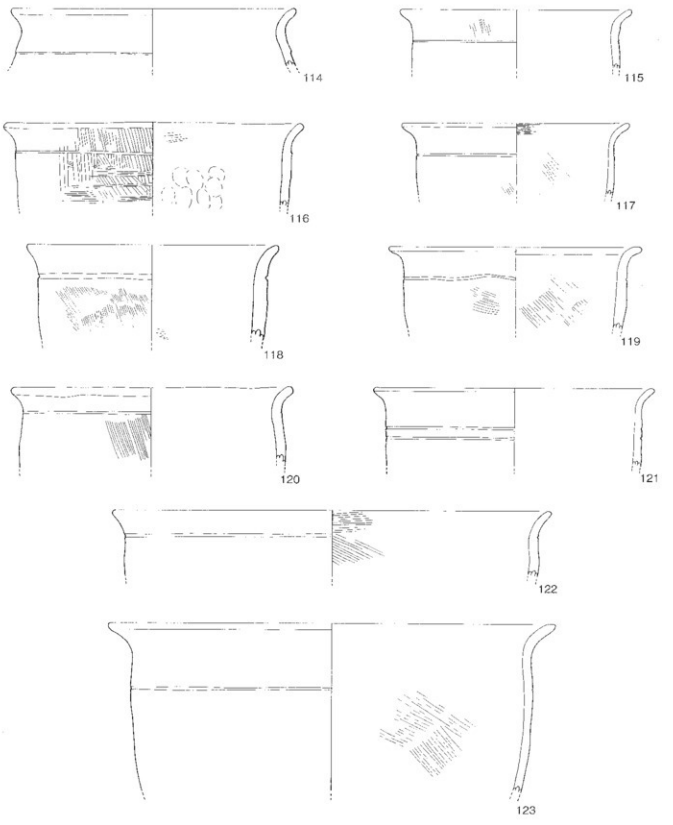
137は復元口径32.0cm、残存高5.9cmで、刻目と沈線、円形の竹管文を施し、内外面のハケ目はナデ消している。138・139・142は刻目と沈線、三角形（逆V字）の刺突文を施したものである。140は小片で、復元口径14.2cmを測り、ミニチュアかもしれない。外面に沈線と貝殻施文を行う。143～153は、弥生土器の鉢、もしくは甕である。143は鉢と考えたが、壺かもしれない。復元口径16.4cm、残存高18.2cmを測り、口縁～腹部の３分の１ほどの残存である。口縁には刻目と沈線５条の装飾を施す。調整は外面にハケ目が良好に残り、内面には部分的にミガキ？が見られる。



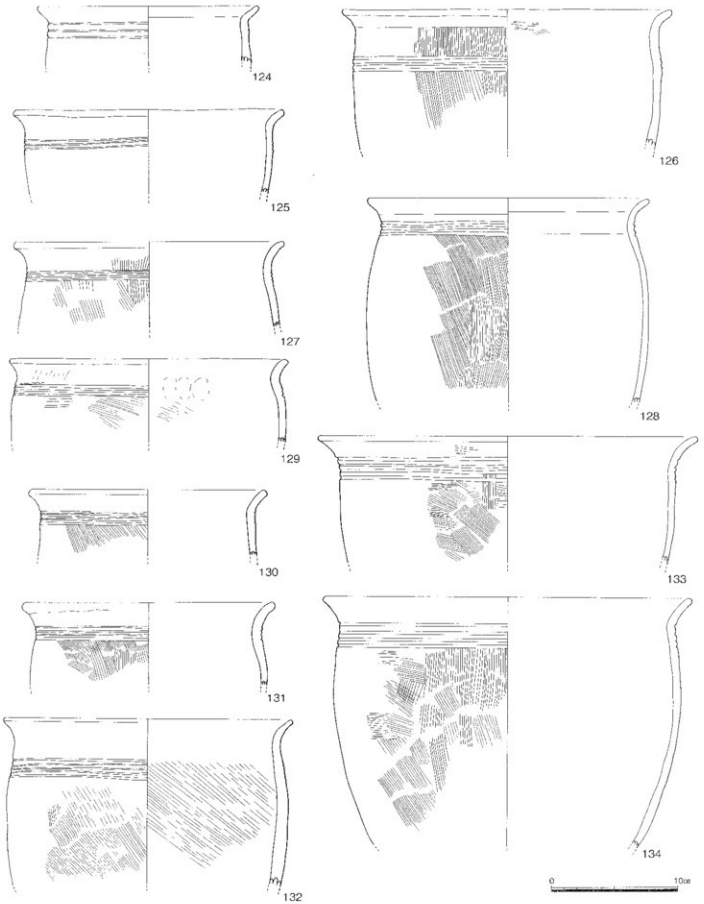
第26図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：３）



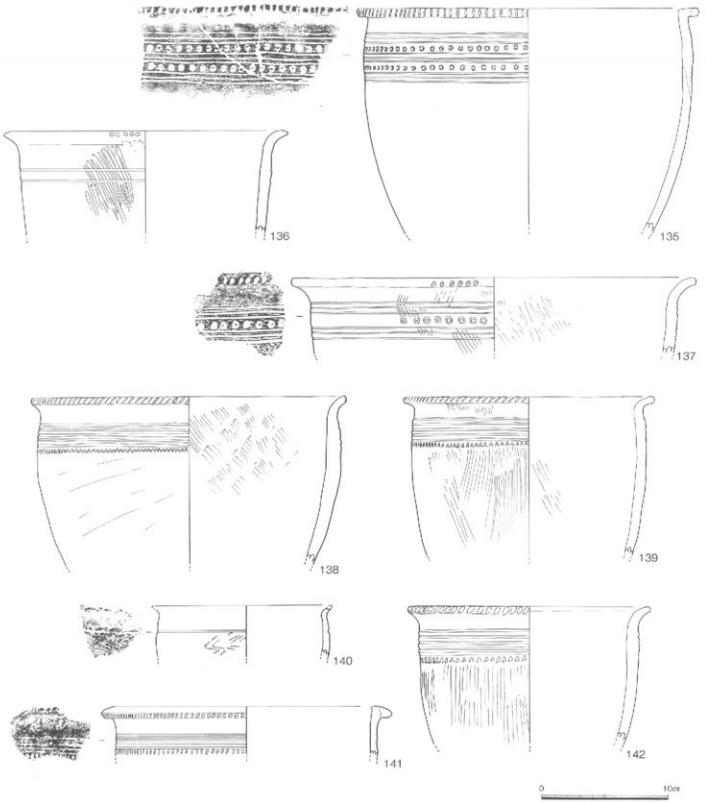
第27図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１：３）



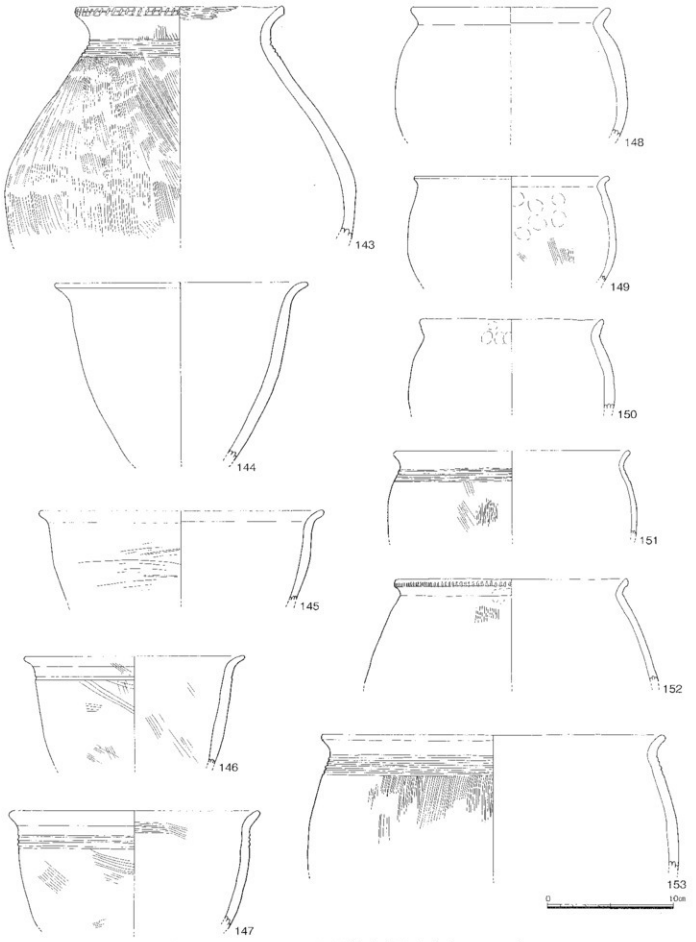
第28図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（3）（Ｓ＝１：３）



第29図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１：３）



第30図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（５）（Ｓ＝１：３）

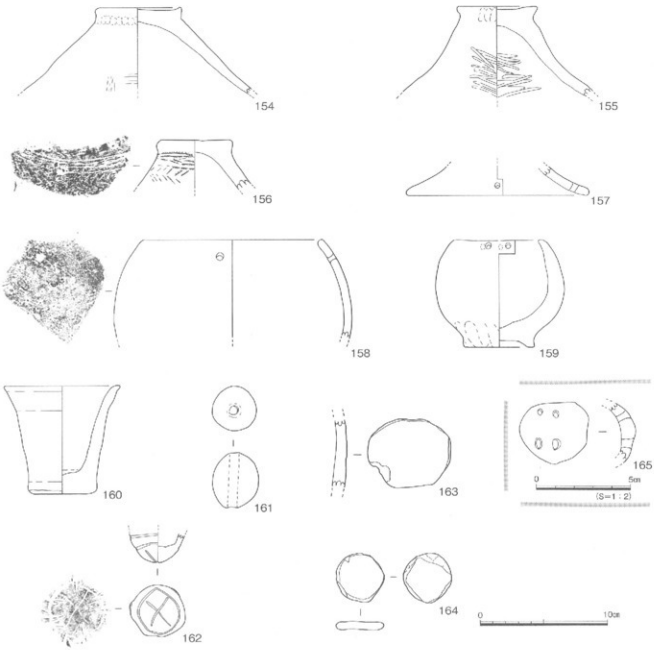


第31図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（6）（Ｓ＝１：３）

ススが付着しており煮沸に使用していたものと思われる。144は小片で風化が著しい。145は小片で、外面は一見ケズリと思われるような荒いハケ目があり、ススが付着している。146・147はどちらも小片で沈線が施されている。148～153は体部が丸みを帯びる鉢で、148は無文であるが、149・150はオサエ痕、151・153は沈線、152は刻目を施している。

154～157は蓋である。155は内外面にミガキ調整、156は外面に貝殻施文、157は穿孔が見られる。

158は鉢だが小片のため傾きが不確定的であるが、丸い体部で穿孔を施している。159は完形の有蓋鉢であるが、特に上半部の風化が著しい。口径7.2cm、器高8.4cm、胴径10.2cm、底径5.6cm

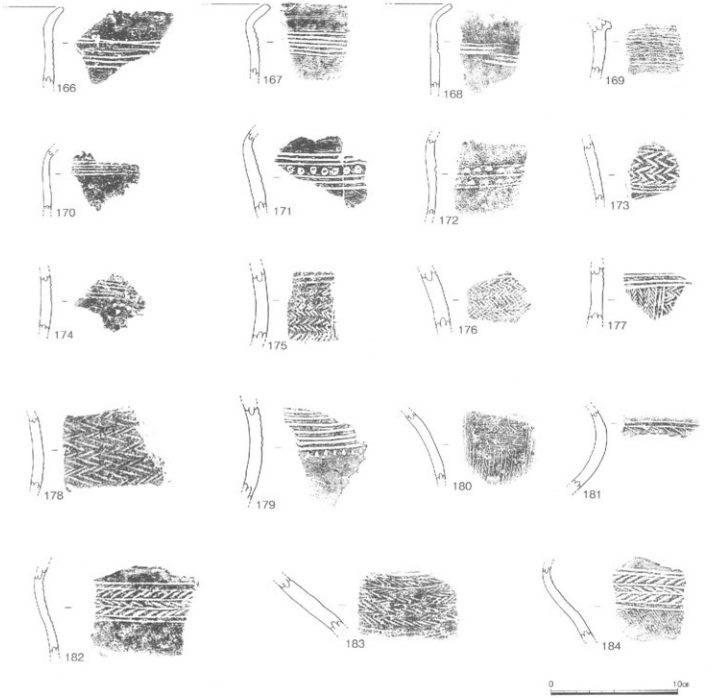


第32図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（7）（Ｓ＝１：３）

を測るやや小型品で、脚部は指オサエにて手づくね状に成形している。160はコップ状の形態をなしており、全体にナデ調整を施している。端部がもう少し伸びるかもしれない。

161～165はその他の土製品である。161は土錘で黒斑が見られる。162は器種不明、天地も不明である。ミニチュア製品か。軟質で赤褐色を呈しており、沈線により×印と直線文を施している。163・164は土製円盤で、163は径5.0cm、164は径3.5cmを測る。165は陶壌で音孔が4孔残る。

166～184は文様の残る弥生土器の微細片で、復元径の測定が不可能なものである。166は7条の



第33図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（8）（Ｓ＝１：３）

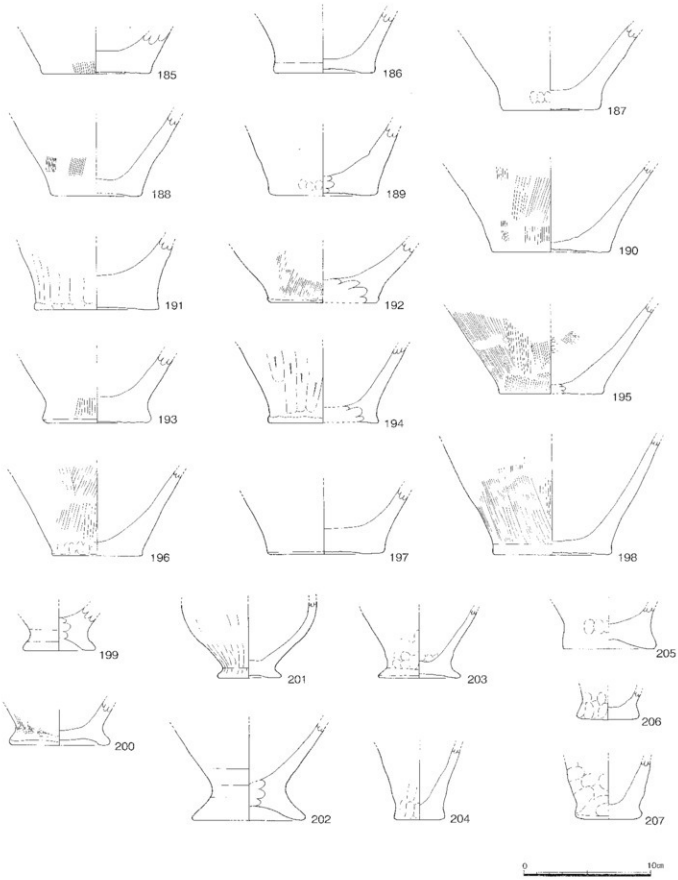
沈線、167は６条の沈線、168は太い３条の沈線が接する部分、169は貝殻文、170は５条の沈線、171は沈線と竹管文、172は列点文、173は羽状文、174は細い７条の沈線、175は沈線と貝殻文、176は貝殻文、177は沈線と羽状文、178は羽状文、179は沈線と列点文、180は貝殻施文、181は羽状文、182～184は沈線と羽状文と、様々な文様構成が見られる。

185～237は弥生土器の底部片である。228と237は外面底部に籾痕をとどめる。

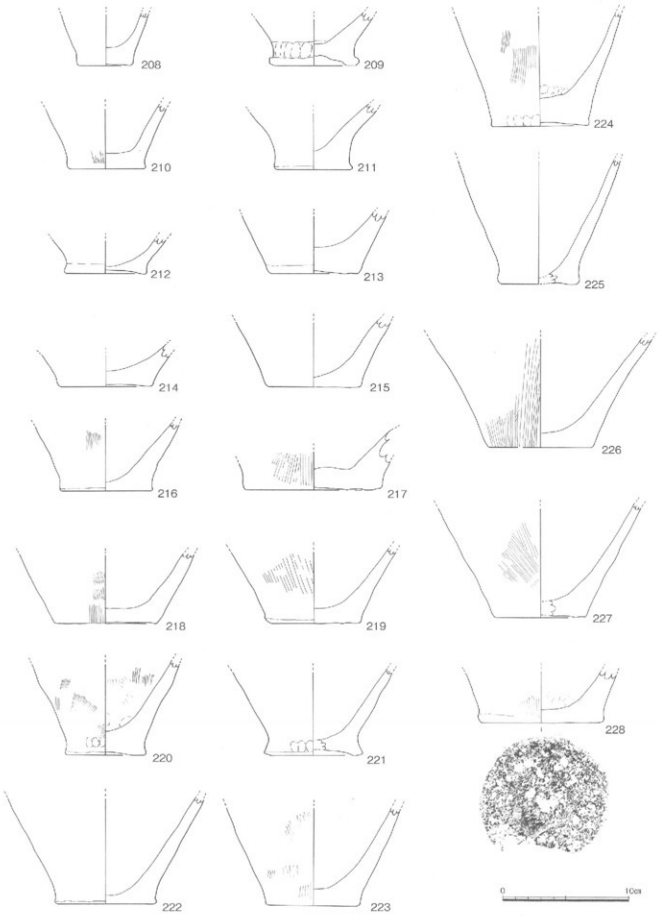
241～305は打製石器である。238は打製石鏃で、長軸8.7cm、短軸6.0cmを測る。239は両面調整スクレーパーまたは大型の打製石包丁で、長軸11.9cm、短軸6.4cmを測る。240はサヌカイト製の尖頭器だが欠損があり全体形は不明である。残存長は5.2cmを測る。241・242は扁平な石材を用いた石錘で、石材の端を数カ所打ち欠いている。243・244は凹み石で、243は長軸9.0cmであるが、244は24.9cmの大型品である。245～254・255～265は叩き石で、拳大のものを中心に敲打痕が見られるものである。266～287は剥片器または剥片でいずれも不定形、中にはナイフ形の先尖の刃器も見られる。

291～299は磨製石器で、291～293は石包丁である。291は両面ともに比較的よく残る研磨痕があり、残存長11.8cm、幅5.9cm、厚さ0.7cmを測る。穿孔部分は両面から穿っている。292・293は小片で、穿孔部分が残る。294は直線的な刃部を持つ石器で、長軸8.5cm、短軸5.0cm、厚さ0.9cmを測る。刃部を研磨しているが、刃先は潰れている。製作途中の石包丁か転用された不定型刃部の局部磨製製品かと考えられる。295は磨製石器の未成品と考えられるもので、両面が研磨途上で打製の剥離面が不明瞭になっている。部分的に刃部が磨かれているが、器種は不明。残存部は長軸5.4cm、短軸3.6cmの小型品である。296は薄い磨製石器で、長軸4.1cm、短軸2.2cm、厚さ0.1cmを測り、３辺のうち２辺は研磨により刃部を作り出している。297は玉作関連の資料で、長軸7.1cm、短軸3.6cmの長方形を呈しており、凝灰岩製か。施溝部分が２ヶ所あり、うち１ヶ所の溝部分で剥離している。298は砥石か、六角柱状の形態をなし、各辺はやや凹む。長軸6.9cmを測るが欠損が多く、詳細は不明である。299も砥石か、断面が台形をなし滑らかな面を持つ。長軸14.0cm、短軸5.0cm、厚さ4.2cmを測る。

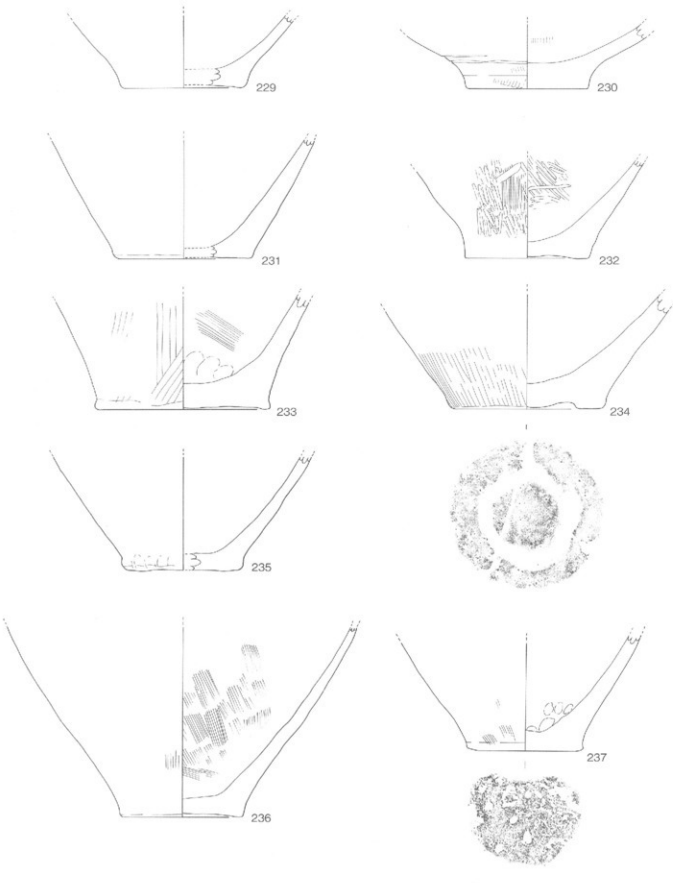
300～305は石斧の未成品である。300は残存長軸15.2cm、短軸8.5cm、径は8.0cmを測る大型の太型蛤刃石斧か。製作の初期段階を示し、部分的に原石面と思われる箇所も見られ、粗割り及び粗い敲打痕があり、研磨部分は認められない。301は敲打痕が残り形態も直線的に成形されている。302は欠損部分があり、残存長軸16.8cm、短軸7.3cm、最大断面長7.2cmを測る。研磨部分はなく敲打段階であるが、刃部は丸みを帯びていることから蛤刃石斧と考えられる。303は、上・下端ともに欠損している。部分的に研磨が見られるものの、敲打痕も残っている。304は残存長軸12.8cm、短軸5.0cm、厚さ4.2cmを測り、研磨部分が見られるものの敲打痕が見られる。305は石斧か。



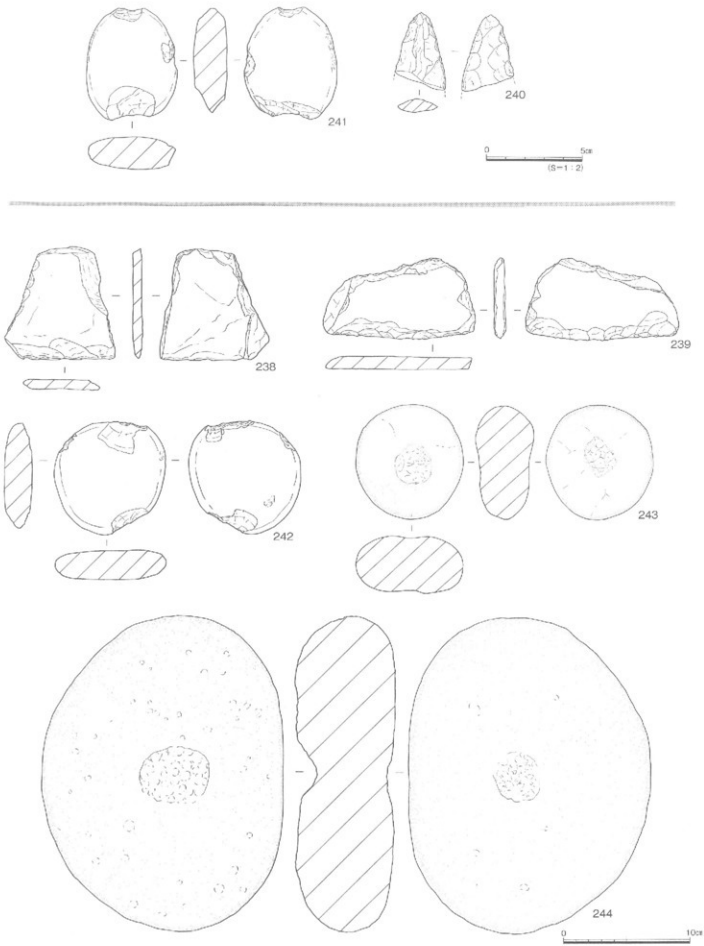
第34図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（9）（Ｓ＝１：３）



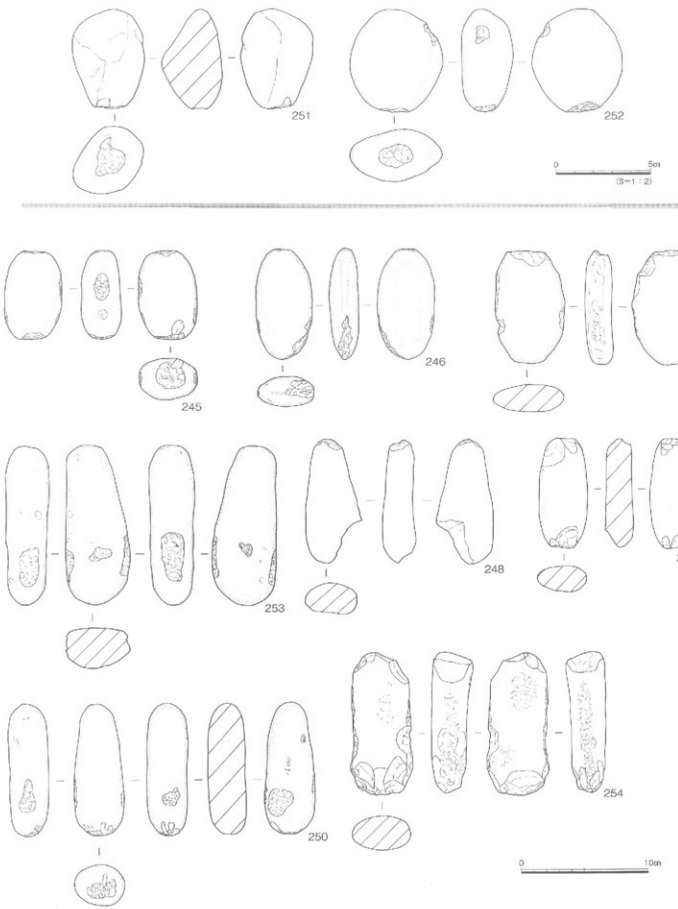
第35図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（10）（Ｓ＝１：３）



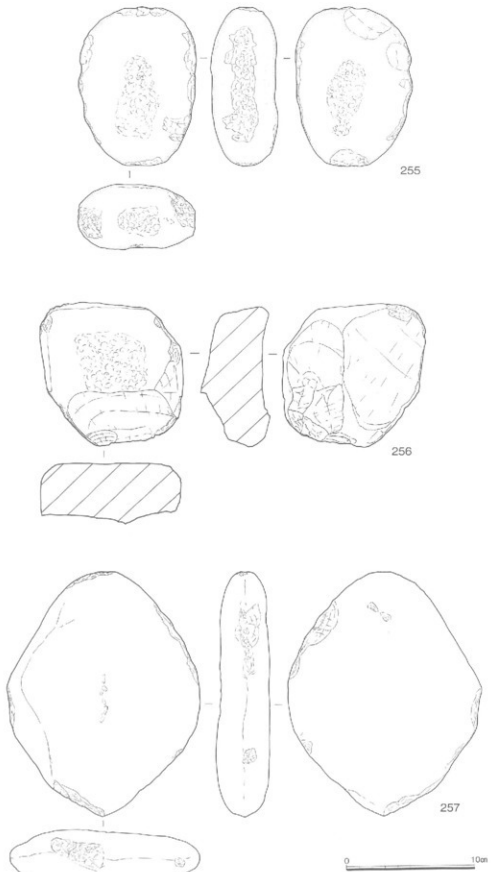
第36図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（11）（Ｓ＝１：３）



第37図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（12）（Ｓ＝１：３）

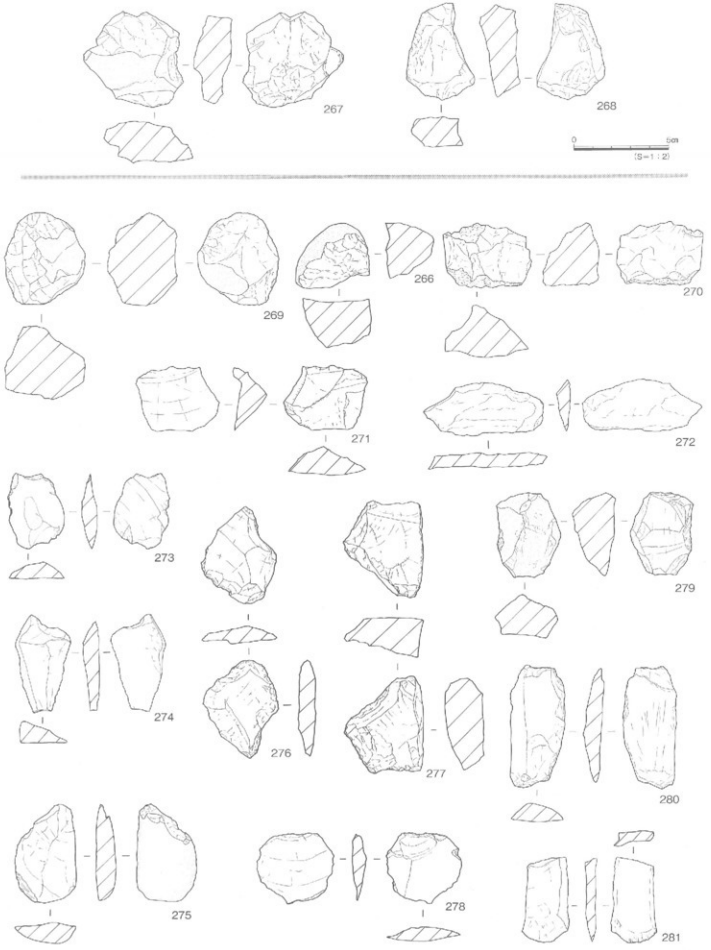


第38図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（13）（Ｓ＝１：３）

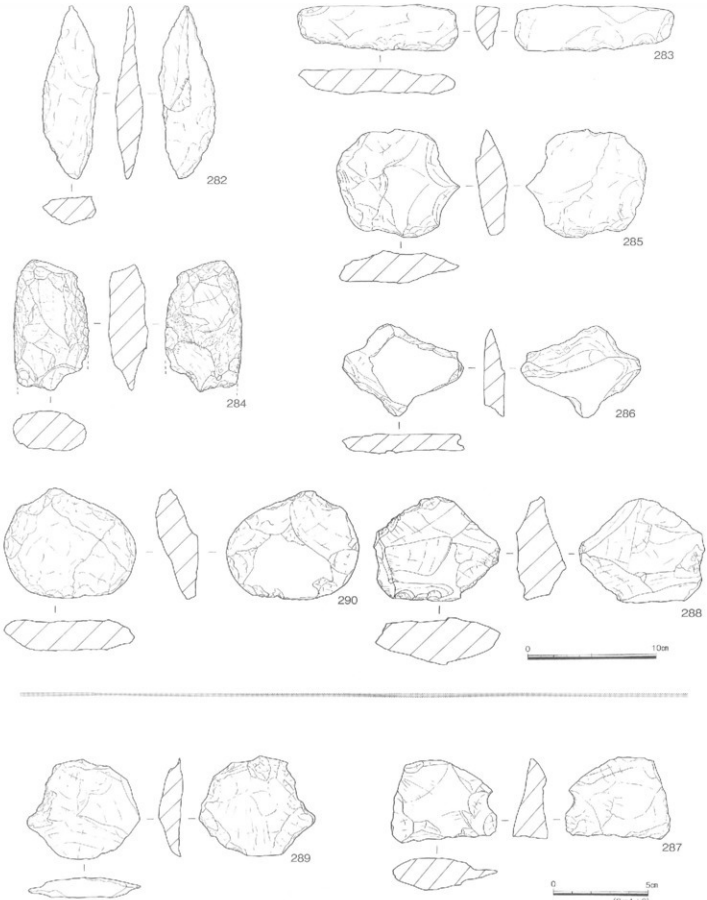


第39図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（14）（Ｓ＝１：３）

第40図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（15）（Ｓ＝１：３）

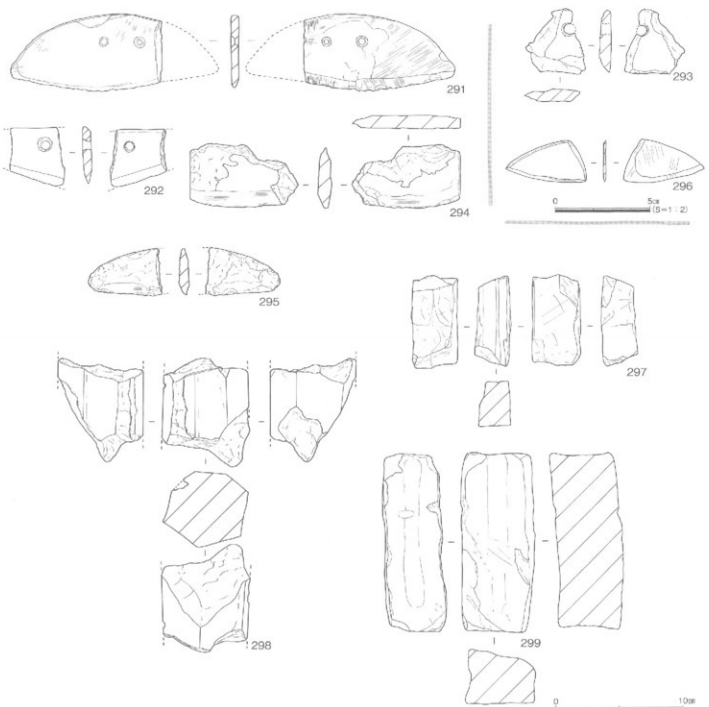


第41図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（16）（Ｓ＝１：３）



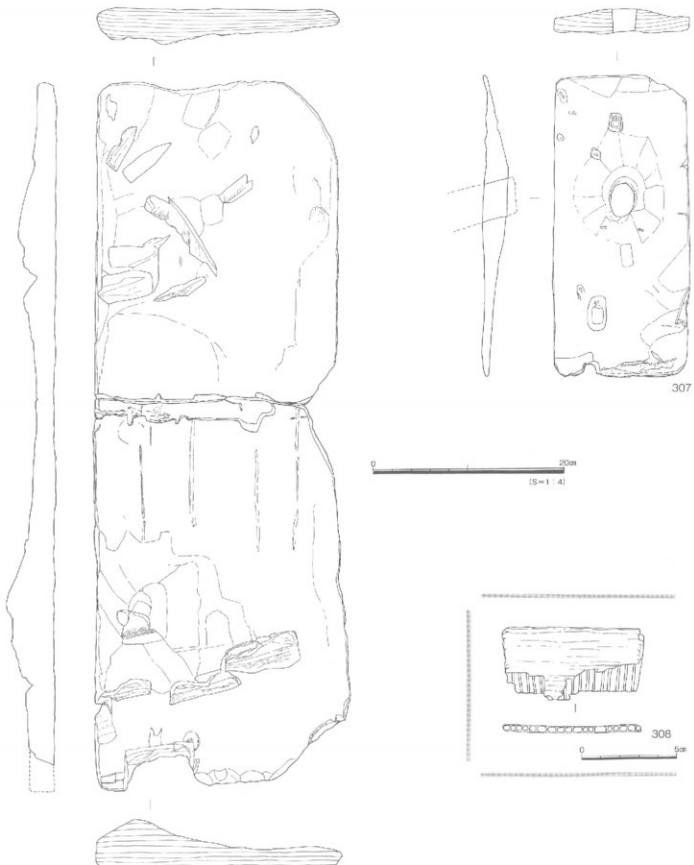
第42図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（17）（Ｓ＝１：３）

306～308は木製品で、306は鋤の未成品で、木材を２つ繋げている。307は直柄の平鍬の身で、長軸32.0cm、短軸14.4cm、厚さ2.5cm、柄穴の長軸は4.2cm、短軸2.9cmを測る。308は縦櫛で、結歯部分のみの残存で歯部は欠損している。



第43図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（18）（Ｓ＝１：３）

第44図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（19）（Ｓ＝１：３）



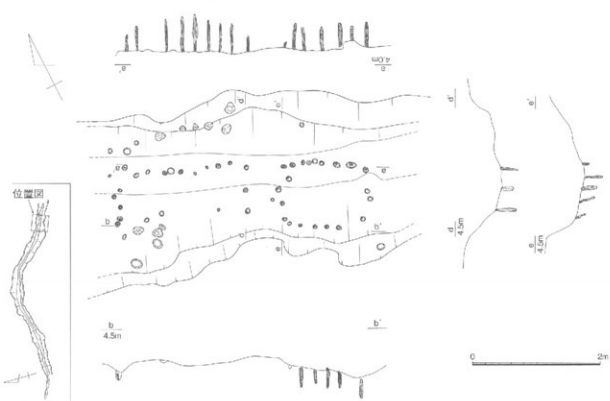
第45図　ＣＤ区ＳＣ2001出土遺物実測図（20）（Ｓ＝１：２）

ウッドサークル（第46図）

弥生時代前期の大溝ＳＣ2001の底面、標高3.5m～3.8m付近に打ち込まれた、２つのウッドサークルと考えられる杭列を検出した。溝の北側、南岸に沿うように、ほぼ東西方向を向いている。

平面プランは、方形を意識した楕円形に見える。西側のウッドサークルの規模は、検出長0.8m×2.1mで、杭は北側と東西に頭部を欠損した状態で、地中0.25m～0.60mほど残存していた。杭は12本検出した。径５cm前後で先端部分は、削って鋭い切断面を有するものもある。

東側のウッドサークルは、隅丸方形状に見え、四方に杭が残存し、規模は1.5m×1.0mである。杭はやはり、頭部を欠損し、地中0.1m～0.4mほど残存し、その先端は西側同様、鋭い切断面を有するものもある。これらのウッドサークルは、通常水没していたと考えられるが、流水状態や、滞水状態にあったのではなかろうか。この溝内より、鍛及び製作途中の広鍬や、木片等が出土している状況から、用途は不明であるが、木製品製作に関連する施設であると考えたい。



第46図　弥生時代前期大溝（ＳＣ2001）ウッドサークル実測図（Ｓ＝１／60）

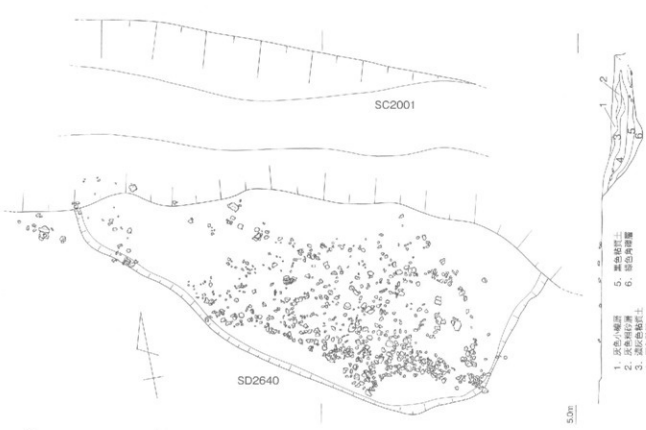
弥生時代前期の土器溜まり　ＳＤ2640（第69図）

弥生時代前期の大溝ＳＣ2001に接する位置に検出された、長軸7.1m、短軸3.1m、深さ５cm程度の浅い土器溜まりである。遺構の検出段階で土器片が大量にまとまっていることを認めることが出来た。遺構の切り合い関係ではＳＣ2001に切られているように検出されたが、出土遺物はほぼ同じ時期や器種であり、本来的にはＳＣ2001と一体であったか、ほぼ同時併存の遺構であった可能性が高い。遺構の用途としては、遺物はほぼ全て砕片で出土したため、ＳＣ2001と同じく最終的には遺物が投棄された状態であろう。出土遺物は以下の通り。

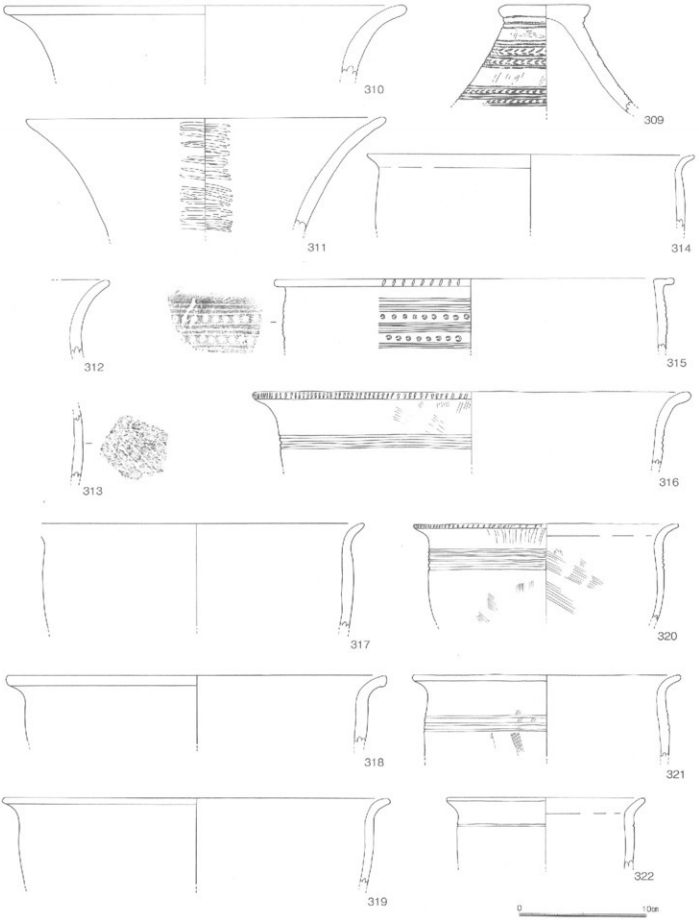
309は弥生土器の蓋である。頂径は7.2cm、残存高8.5cmを測る加飾性の高い蓋で、貝殻施文による直線文と羽状文で美しく飾られている。全体的に風化が著しいが、外面調整に一部でミガキが確認できる。内面調整はナデである。

310～313は弥生土器の壺である。311は細片で風化が著しいがミガキ痕が確認できる。313は体部片で綾杉文を施す。

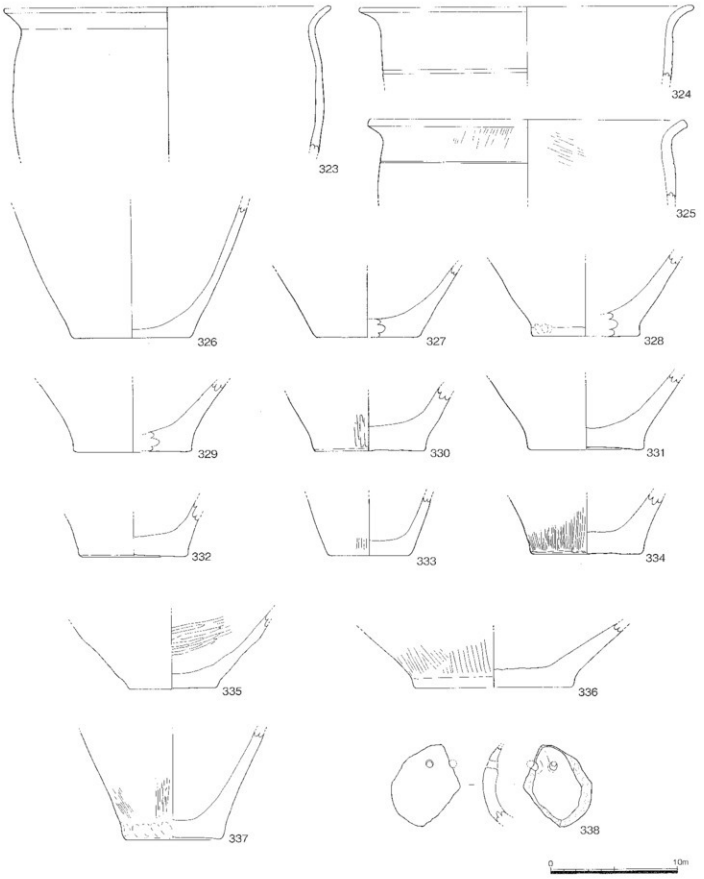
314～325は弥生土器の甕または鉢である。314は風化が著しく調整は不明である。315は加飾性の高い甕で、刻目・沈線・竹管文（逆Ｃ字）で飾られている。316は刻目と沈線を施した甕で、調整は外面がハケ目後ナデ、内面はナデである。317～319も小片で風化が著しく調整は不明であ



第47図　弥生時代前期の土器溜まりＳＤ2640実測図（Ｓ＝１：60）



第48図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物実測図（1）（Ｓ＝1：3）

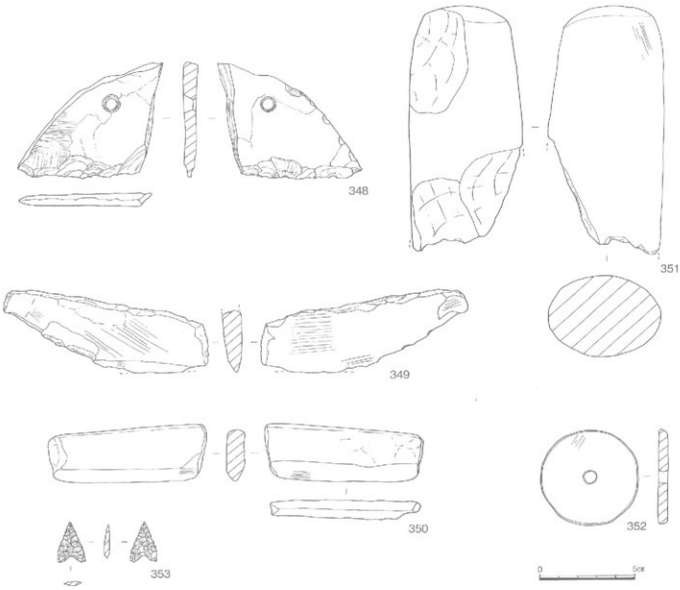


第49図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物実測図（2）（Ｓ＝１：３）

第50図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物実測図（3）（Ｓ＝１：３）

る。320は丸い体部であり鉢か。復元口径20.9cm、残存高7.7cm、太い沈線を５条施しており、内外面はハケ目調整である。321は小片で風化が著しく、外面に沈線を３条施す。322も小片で復元口径は15.8cmと比較的小さく、１条の沈線を施す。323は復元口径25.4cm、残存高11.5cmを測る大型の甕で、内外面はナデ調整である。324・325は風化が著しい甕片で、いずれも沈線を１条施す。326～337は弥生土器の底部片、338は陶塤である。

339～353は石器である。339は石鏃である。基本的には打製であるが刃部のみ縦方向に研磨している局部磨製石器である。340は石鎌で、全体的に研磨しているが、体部は剥離痕が粗く残り、刃部のみ丁寧に研磨している。341はサヌカイト製の刃器である。体部がわずかに湾曲しており、そのふくらんだ部分が刃部である。部分的に敲打痕があり、叩き石として転用されていると考えられる。



第51図　ＣＤ区ＳＣ2640出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１：２）

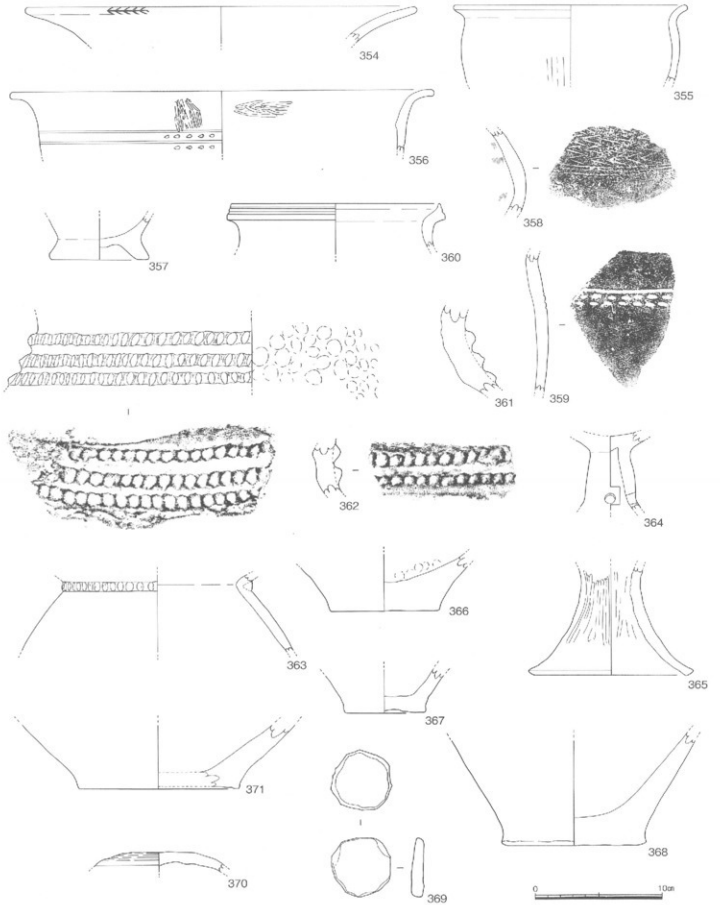
342は拳大の叩き石で、前後左右上下の６方向全てに敲打痕が残り、あらゆる方向から使用していることがわかる。343～347は剥片である。343は部分的に刃部が見られるので、不定形の刃部として使用したかもしれない。344は風化が著しく詳細は不明。345には剥離痕があるものの刃部はなし。346は角礫で部分的に剥離と刃つぶしが認められる。347は板状の剥片である。348は石包丁で、残存長軸7.5cm、短軸6.2cm、厚み0.7cmを測る。研磨されているのは部分的で、刃部も研磨されておらず全体的に剥離痕が目立ち、未成品であろうか。穿孔部分は両面から穿っている。また、縦方向に割れており全体の３分の１程度の残存と思われるが、この割れた面に擦痕があり、未成品を転用しようとしていたのかもしれない。349も石包丁か、残存長軸10.8cm、短軸3.3cm、厚み0.8cmを測り、刃部と研磨箇所が認められるが欠損部分が多く詳細は不明である。350は刃器で、長軸8.2cm、短軸1.8cm、厚み0.8cmを測る。刃部は研磨されており、研磨痕または使用痕は長軸方向へ走る。493は磨製石斧で、刃部は欠損している。残存長軸12.4cm、短軸5.9cm、厚み4.3cmを測る。352は磨製の紡錘車の完形品で、径5.1cm、孔径0.8cm、厚み0.6cmを測る。353は黒曜石の打製石鏃、長軸2.1cm、短軸1.4cm、厚み0.3cmを測る。

遺物包含層出土遺物（第52～78図）

Ｃ・Ｄ区の包含層は旧耕作土下の明茶褐色土層を中心とする上層包含層（第19図２層、第29図５層・第19図２層）と、下層の緑灰色粘土層の下層包含層（第19図13～15層、第19図43層、第19図38層）に分けて報告する。上層包含層は弥生時代を主体とする遺物包含層であり、下層包含層は縄文時代を主体とする遺物包含層である。

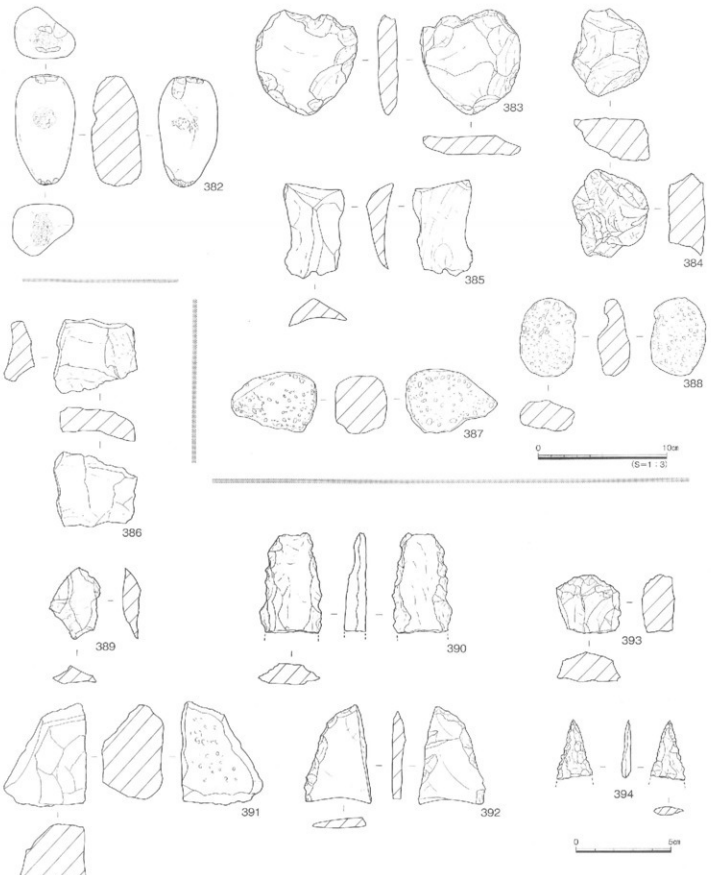
354～394は上層包含層より出土した遺物である。354～368は弥生土器で、354は壺の口縁部の小片で、口縁端部に綾杉文が施されている。355は甕の小片で、外面にススが付着している。356も甕で、極細片だが沈線と竹管文が施されている。357は脚部片で、復元底径7.6cmを測る。358は体部の小片で、沈線と羽状文が施されている。359も体部片で、刺突文と沈線がめぐる。360は甕の小片で、復元口径16.4cm、口縁端部に凹線文を２条施している。361は壺の細片であるが、復元頸部径は33.6cm、器厚1.8cmの大型品で、肩部に指頭圧痕を加えた貼付突帯を巡らせている。この突帯は残存部分では３条確認できる。内面の調整は全体的に指オサエ痕が残る。363も壺で、頸部の復元口径は14.8cmを測り、肩部に指頭圧痕を施した貼付突帯をめぐらせている。364・365は高坏で、残存部分では364に透かし穴が２穴確認できる。365の調整は外面がミガキ、内面に絞り目が残る。366～368は弥生土器の底部である。369は土製円盤、370は須恵器の坏身である。

372～394は石器である。372は太型蛤刃石斧で、長軸10.2cm、短軸5.6cm、厚み3.0cmを測り、風化が著しい。515は磨製の石斧片で、欠損部分が多く詳細は不明である。374は石斧未成品か、研磨は部分的であり敲打痕が残る。375・376は石棒か。375は欠損があるが直線的で、断面は円形である。376は磨製で断面形態は円形で外面は研磨している。377は磨製の石斧片か、研磨部分は確認できるものの、小片であるため詳細は不明である。378は叩き石で、長軸11.2cm、短軸4.3cmを測る。379は凹み石（石皿）で、長軸17.4cm、短軸13.9cm、厚み5.4cmを測る。380はサヌカイト製の刃器または打製の石包丁で、形状は長方形である。中央部は使用のためか、やや凹んでいる。523はサヌカイトの剥片、全面的に剥離しているが、鋭い刃部は見られない。381は自然石

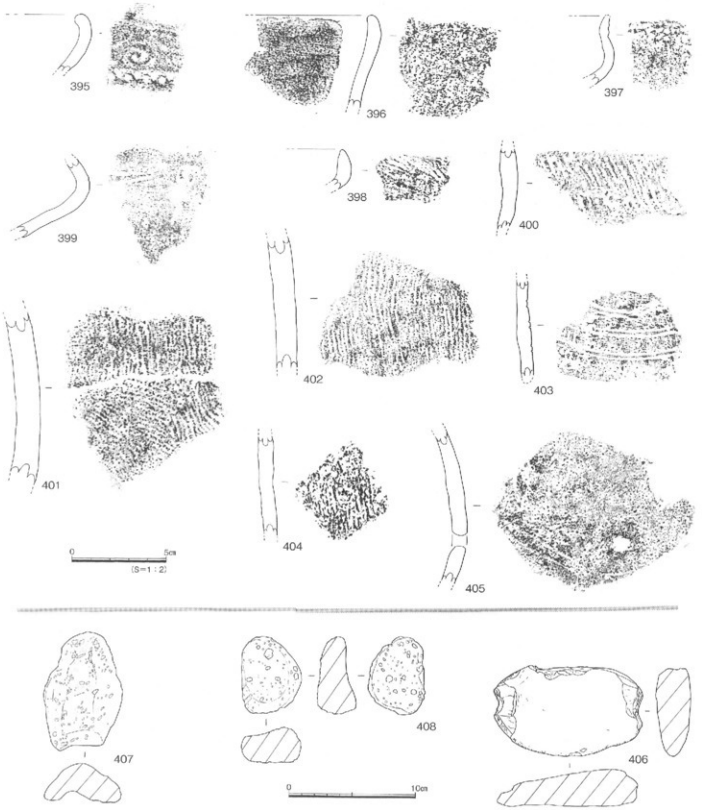


第52図　ＣＤ区上層包含層出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：３）

第53図　ＣＤ区上層包含層出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１：３）



第54図　ＣＤ区上層包含層出土遺物実測図（3）（Ｓ＝１：２）



第55図　ＣＤ区下層包含層出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

を利用した叩き石である。長軸8.3cm、短軸4.6cmで掌にすっぽりと収まる大きさである。3～4方向に敲打痕がある。383は不定形の刃器で、いびつな円形で全方向に刃部を持つが、いずれも鈍い作りである。385・386は瑪瑙の石核や剥片、387・388は軽石である。389は瑪瑙の小剥片で、長軸3.7cm、短軸2.3cmを測る。390はサヌカイト製の小剥片または刃器で、左右の両面とも細部を調整している。391は瑪瑙の剥片、392はサヌカイトの小片、394はサヌカイト製の石鏃である。

395～408は下層包含層出土遺物で、395～405は縄文土器である。395～398は口縁の小片で、395は口縁が丸みを帯び、外面に刺突文を施す。396は無文で、397は体が丸く収まる深鉢である。爪形文を施している。399は竹管文状の痕跡が見られる。400～405は体部片で、貝殻条痕などが施されており、405には穿孔が見られる。

406は両端を打ち欠いた石錘で、407・408は軽石である。

第２次調査（第57図）

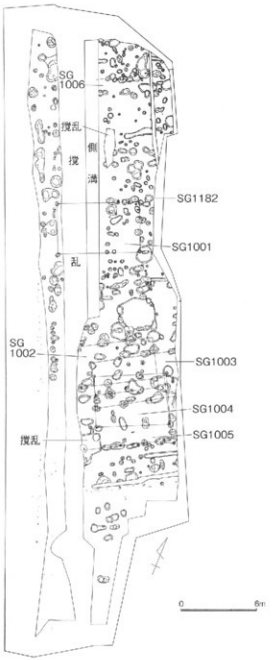
第２次調査は佐太神社社殿前の613㎡の調査を行った。北側よりG区・H区と調査区を設定したが、調査区の中に、生活道路あるいは、河川であるため、迂回路の確保が困難な部分については、工事施工時に工事立会をすることとした。

G区（第56・57図）

G区は佐太神社前面に位置し、現状はアスファルト道路、畑、一部水田である。厚い部分では1.4m以上の盛土が堆積しており、盛土の下は、旧耕作土の灰色粘土（第74図49・50層）が堆積している。これを掘削後標高4.1～4.2mの第一遺構面茶褐色砂質土（第74図104層）で、400に及ぶ土坑や柱穴を検出し、建物跡を５棟復元した。

第２遺構面は標高4.2～3.7mの明茶褐色土（第74図172層）において、500に及ぶ土坑や柱穴を検出し竪穴住居跡１棟をはじめ、建物跡を５棟復元した。

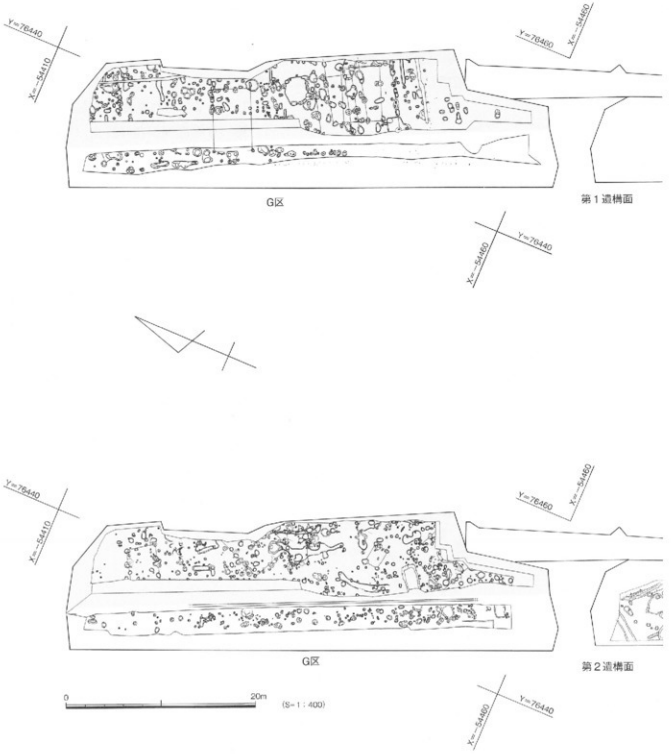
また、G区西側の事前の調査が困難である広岡川河川敷及び、道路部分について工事立会調査を実施した。



第56図　G区第１遺構面（中世～近世）平面図（S＝１：300）

G区　第１遺構面

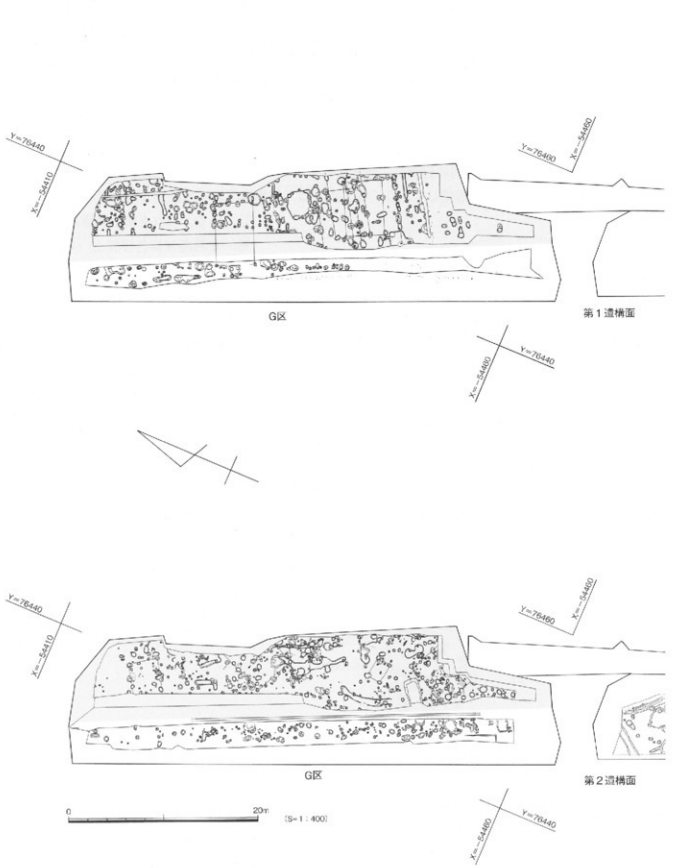
第一遺構面においては、中世～近世にかけての建物跡５棟を検出している。出土遺物や、主軸を考えると、この建物跡が、佐太神社に関連する建物跡である可能性は高いと推察される。このことについては後述する。



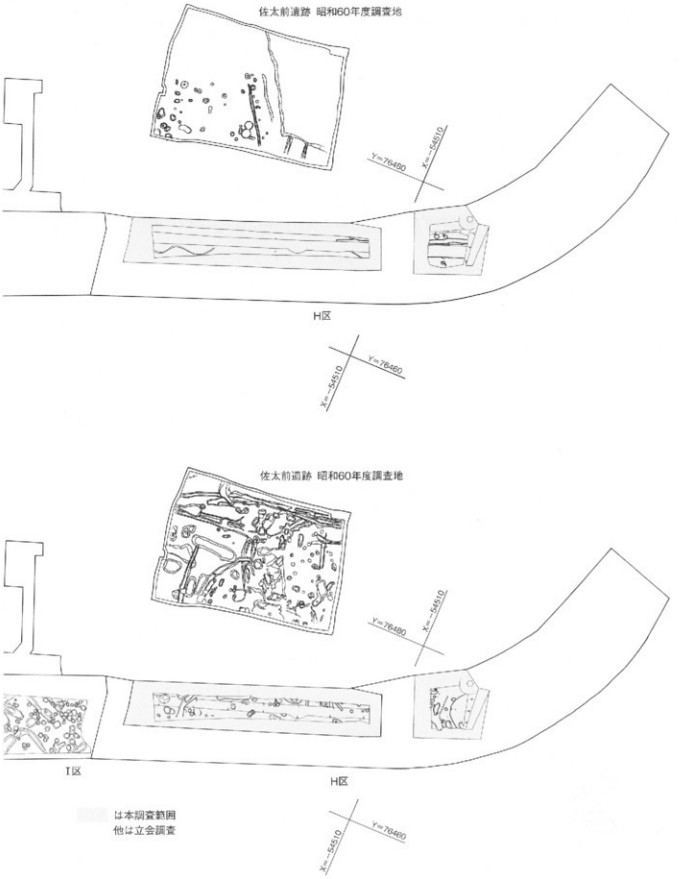
第57図　第２次調査範囲

佐太前遺跡 昭和60年度調査地
Y=76480
X=-56510
H区
X=-56510
Y=76460

佐太前遺跡 昭和60年度調査地
Y=76480
X=-56510
I区
H区
は本調査範囲
他は立会調査
X=-56510
Y=76460



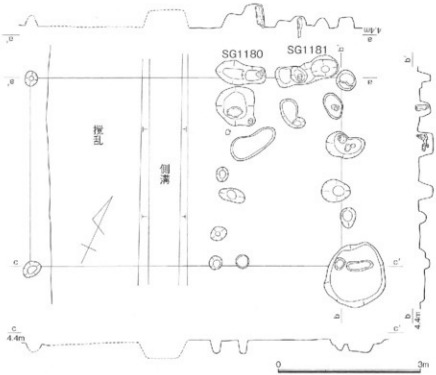
第57図　第２次調査範囲



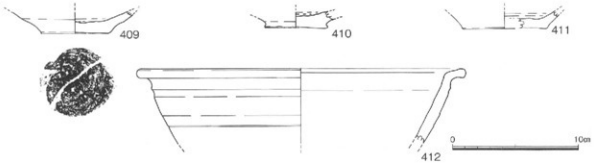
掘立柱建物跡　ＳＧ1001（第56・58・59図）

調査区中央よりやや北側、標高4.3m付近で検出した。主軸をＥ－25°－Ｎにとる。検出長は２間×１間（6.5m×4.0m）であるが、建物の中央から西側にかけて撹乱を受けており、建物の規模は確認出来なかった。柱穴間は約2.1m×4.0m、深さは検出面より0.5m～0.25mである。建物の西側から検出した柱穴は、工事立会で検出した。柱穴内は暗灰色粘土を主体とする堆積であった。

また、柱穴内には柱と考えられる径0.15m～0.10mの丸太が出土した。あまり加工はなされず底面も粗い加工であったが、中には先端部分を尖らせた杭状のものもあった。出土遺物は409～411の土師器の皿が出土した。底部にわずかに糸切り痕をとどめる。ＳＧ1180から瀬戸の鉢の口



第58図　掘立柱建物跡ＳＧ1001実測図（Ｓ＝１：80）



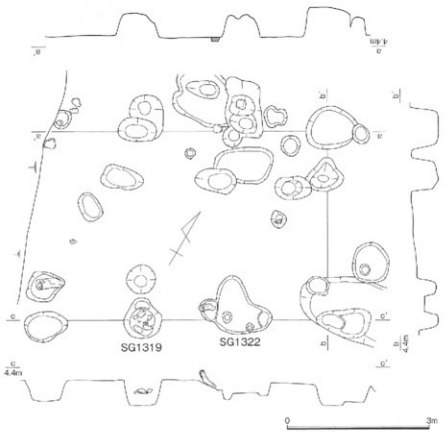
第59図　掘立柱建物跡ＳＧ1001出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

縁412が出土した。口径26.0cmを測り、灰オリーブを呈す。16世紀末と考えられる。

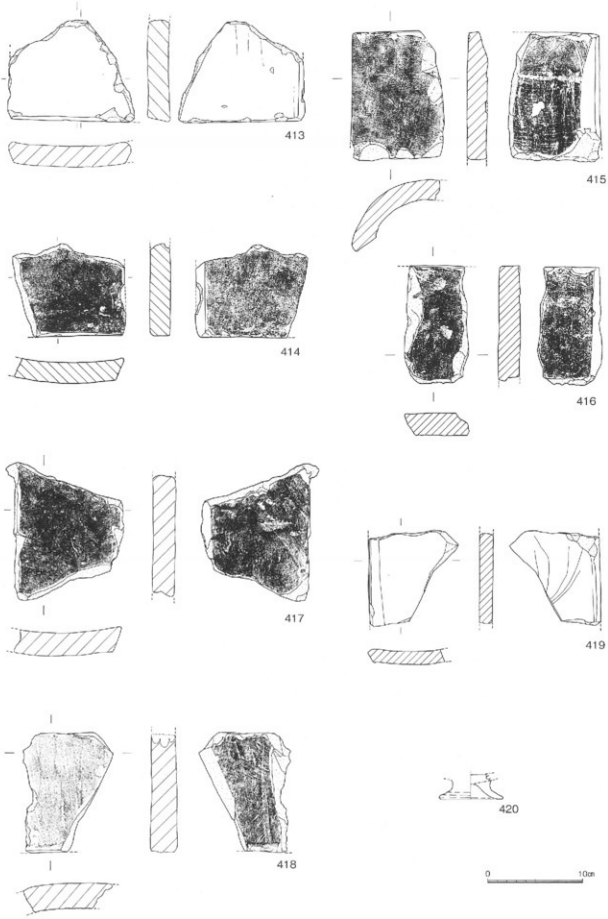
掘立柱建物跡　ＳＧ1002（第56・60・61・図）

調査区中央より南側、標高4.1mで検出した。主軸をＥ－31°－Ｎにとる。検出長は３間×１間（6.0m×4.0m）で、柱穴間は2.0m×4.0m、柱穴の深さは、検出面より0.55m～0.3mである。平面形は不整の楕円形で、建物の西側は撹乱を受けており、規模は確認出来なかった。柱穴内は灰色粘土及び、暗灰色粘土主体の土層堆積であった。

出土遺物は、ＳＧ1322、ＳＧ1319から瓦413～416が出土している。瓦415は丸瓦で、凸面はヘラケズリとナデが、凹面はコビキＢが施される。また付近より平瓦418が出土しており、わずかに布目をとどめる。中世の瓦と考えられる。



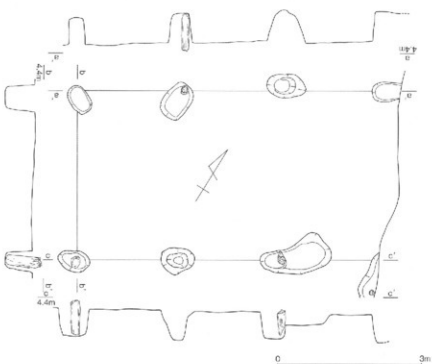
第60図　掘立柱建物跡ＳＧ1002実測図（Ｓ＝１：80）



第61図　掘立柱建物跡ＳＧ1002出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

掘立柱建物跡　ＳＧ1003（第56・62図）

調査区南側、標高4.2mで検出した。掘立柱建物跡ＳＧ1002、1004と重複し、主軸をＥ－32°－Ｎにとる。検出長は３間×１間（6.5m×3.5m）、柱穴間は2.1m～2.2m×3.6m、深さは検出面より0.55m～0.7mを測る。柱穴は楕円形で、建物は東側が調査区外へ続いている。規模の確認はできなかった。柱穴内は暗灰色粘土主体の堆積であったが、遺物は出土しなかった。



第62図　掘立柱建物跡ＳＧ1003実測図（Ｓ＝１：80）

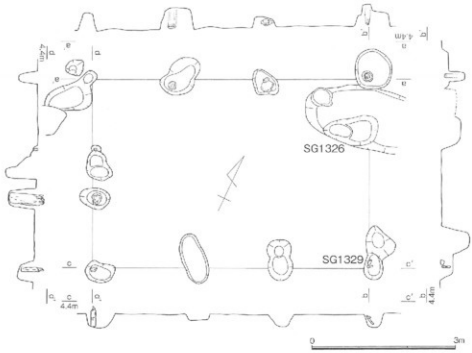
掘立柱建物跡　ＳＧ1004（第56・63・64・65図）

調査区南側、標高約4.1m付近で検出した。掘立柱建物跡ＳＧ1003、ＳＧ1005と重複している。主軸をＥ－27°－Ｎにとる。検出長は３間×１間（5.8m×4.0m）、柱穴間は1.8m～2.1m×4.0m、深さは検出面から0.65m～0.25mを測る。柱穴内は灰色粘土、暗灰色粘土主体の堆積であった。

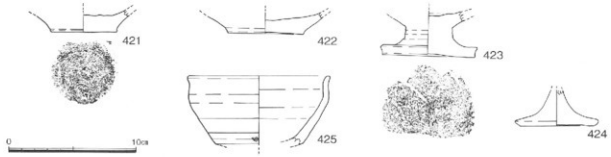
出土遺物はＳＧ1326から421土師器皿、ＳＧ1329から425瀬戸美濃の天目茶碗が出土した。外面は施釉が施され、茶褐色を呈す。時期は15世紀末～17世紀初頭のものと考えられる。423、424は柱状高台で、423は、底部に回転糸切痕をとどめる。426の丸瓦は凹面がコビキＡである。

掘立柱建物跡　ＳＧ1005（第56・66・67図）

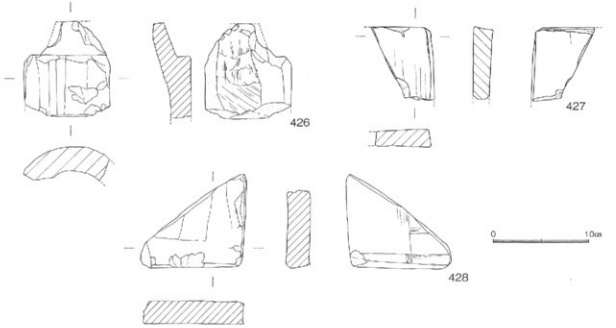
調査区南側、標高約4.1m付近で検出した。掘立柱建物跡ＳＧ1003・ＳＧ1004と重複している。主軸をＥ－30°－Ｎにとる。検出長は３間×１間（6.5m×5.0m）で柱穴間は1.9m～2.5m×5.0m、深さは0.2m～0.6mを測る。柱穴内は灰色粘土を主体とする堆積であった。



第63図　掘立柱建物跡ＳＧ1004実測図（Ｓ＝１：80）



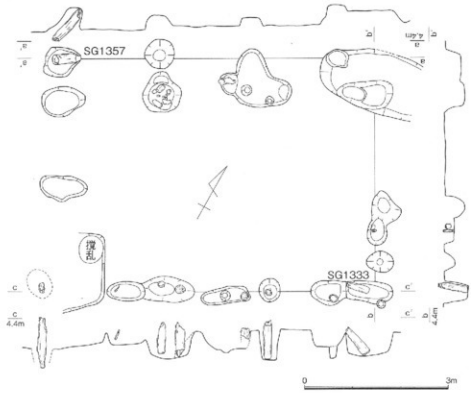
第64図　掘立柱建物跡ＳＧ1004出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１：３）



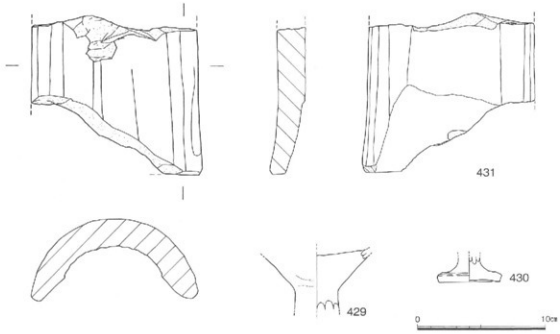
第65図　掘立柱建物跡ＳＧ1004出土遺物実測図（２）（Ｓ＝１：４）

また、柱穴内より柱と考えられる丸太、径0.15m前後が出土した。あまり加工はなされず、底面も粗い加工であった。長さは0.7m前後であった。

出土遺物は、429・430の柱状高台がＳＧ1333より出土している。12世紀前後のものと考えられる。また丸瓦431も出土しており、凸面は削り後ナデを施し凹面はコビキＡである。



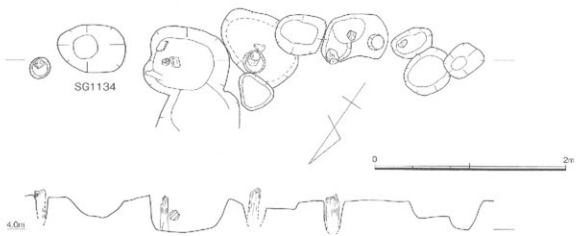
第66図　掘立柱建物跡ＳＧ1005実測図（Ｓ＝１：80）



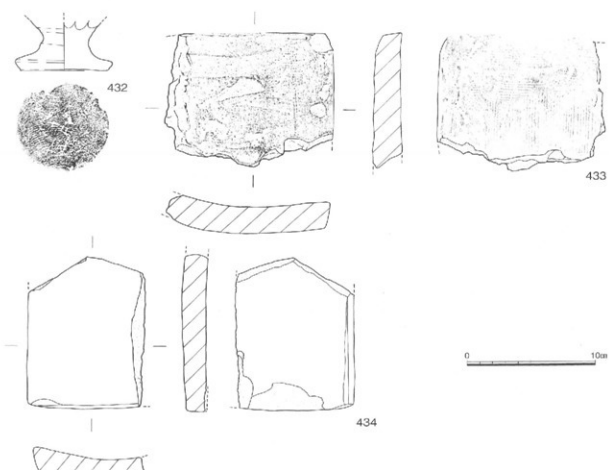
第67図　掘立柱建物跡ＳＧ1005出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

柱穴列　ＳＧ1006（第56・68・69図）

調査区北側、標高4.3m付近で検出した。柱と思われる径0.10m～0.15mの丸太で、長さ0.4mほどであった。検出長4.4mを測る。柱穴は不整楕円形で、建物の可能性もあるが関連する柱穴の検出には至らなかった。



第68図　柱穴列ＳＧ1006実測図（Ｓ＝１：40）

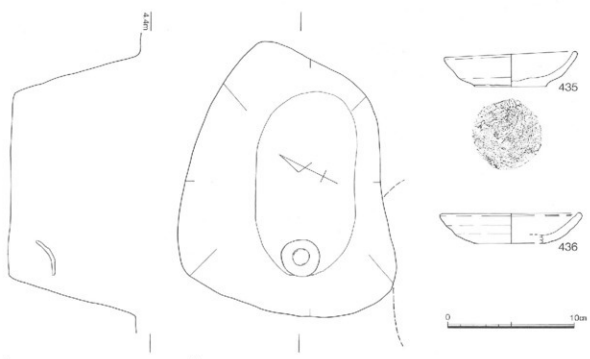


第69図　柱穴列ＳＧ1006出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

出土遺物は、底面に静止糸切り痕をとどめる柱状高台432がＳＧ1134から出土している。平瓦433は凹面にハケ状工具によるナデがみられる。

土坑　ＳＧ1182（第56・70図）

調査区中央、掘立柱建物跡ＳＧ1001の東側、標高4.4mで検出した不整楕円形の土坑である。長軸0.7m、短軸0.5mを測る。土坑内は暗灰色粘土で、床面より８cmのところから、土師器皿435・436が出土した。435は底部径10.3cmで、回転糸切り痕を残す完形である。

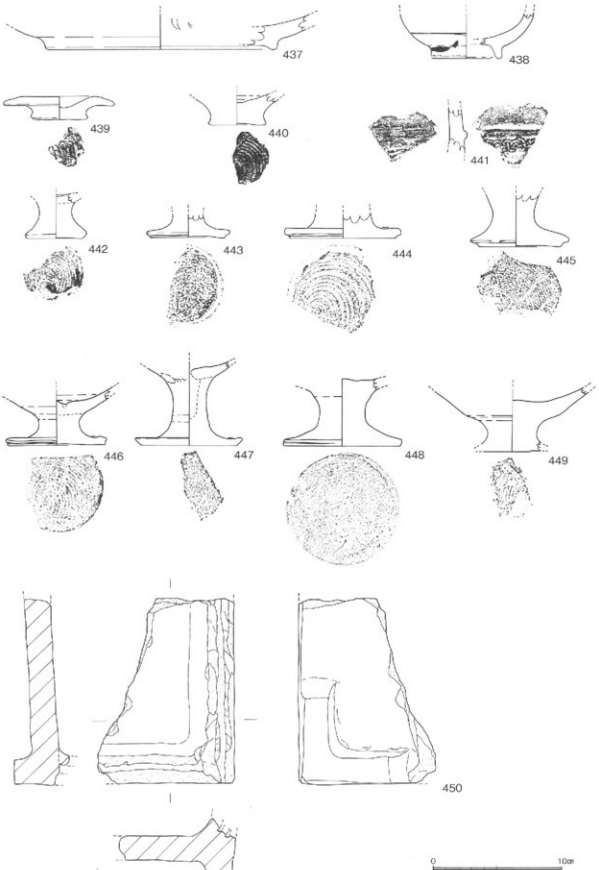


第70図　土坑ＳＧ1182実測図（Ｓ＝１：10）出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

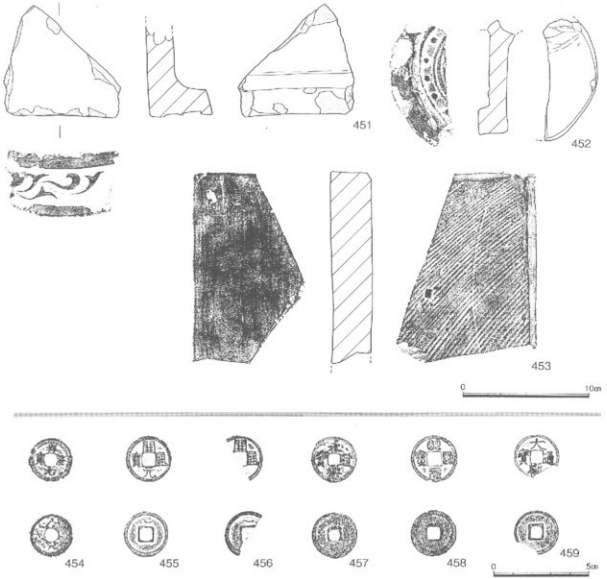
中世～近世遺物包含層（第94・95図）

前述したように、標高4.5m付近で検出した旧耕作土下の明茶褐色砂質土（第74図100・101層）が、中・近世の遺物包含層である。

出土遺物437は肥前の大皿で、底部径17.5cmを測る。内面に青磁釉、褐釉、外面に青磁釉を施す。17世紀後半のものと考えられる。438は陶胎染付碗で底部径5.1cmを測る。外面に施釉、呉須絵が施される。18世紀中頃のものと考えられる。439・440は土師器杯で439は口径8.6cm、底部径3.9cmを測る。口縁は歪である。微細砂粒を含み底部には回転糸切痕を残す。440は底部径4.4cmを測る。441は軟質で、外面暗灰色、断面灰白色の不明土器である。442の柱状高台は軟質で、底部径4.7cmを測る。内外面とも灰白色を呈し糸切後ナデを施す。443～449は柱状高台である。底面に回転糸切痕をとどめる。12世紀前後と思われる。450は瓦質土器の火鉢と思われる。縦14.5cm、横10.5cmを残す。外面は黒灰色、内面は灰白色で底部に２cmほどの脚をもつ。451～452は瓦



第71図　G区中世～近世包含層出土遺物実測図（1）（S＝1：3）

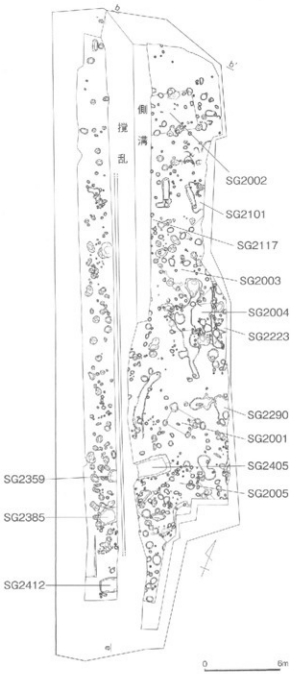


第72図　G区中世～近世包含層出土遺物実測図（2）（S＝1：3、S＝1：2）

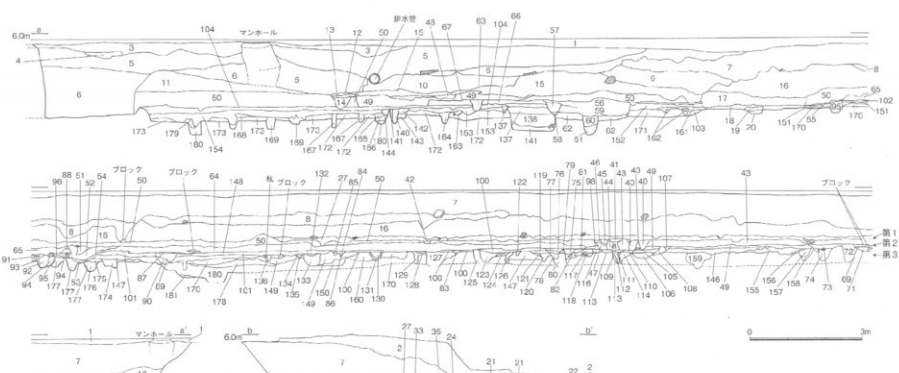
である。453も瓦と考えるが不明で、凹面は櫛状工具によるナデか？　厚さ3.2cmを測る。454～459は銭貨で454の祥符元寶は模鋳銭で、16世紀後葉と考えられる。455・456の開元通寶は、背面に星が存在する。16世紀後葉と考えられる。457は永楽通寶、458は明道元寶で、北宋銭で中世の渡来銭の中でも多い。459は大観通寶で江戸中期以降と考えられる。

G区　第２遺構面（第79・80図）

第１遺構面検出後、１面ベース土の茶褐色砂質土をさらに掘削していくと、黒褐色粘質土の弥生時代～古墳時代にかけての遺物包含層となっている。この層には遺物が大量に含まれており、遺構の検出を行ったが、遺構の埋土もほぼ同様であり、遺構の検出は困難であった。そのため、遺物を取り上げながら、遺構の検出を行った結果、明茶褐色土層の第２遺構面標高3.7m～4.2mで、建物跡５棟をはじめ、土坑、柱穴を、500以上検出した。建物跡は、弥生時代後期から古墳時代初めにかけての遺物が出土している。また、土坑内には土器が大量に廃棄されたようで、ＳＧ2405をはじめ、立会調査を行った、ＳＧ2359、ＳＧ2385、ＳＧ2412も同様の上層堆積、出土遺物であった。



第73図　G区第２遺構面（弥生～古墳時代）平面図（S＝１：300）



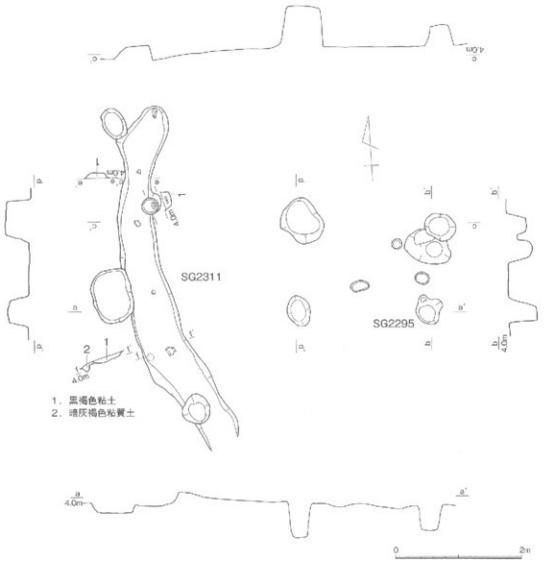
1. アスファルト
2. 黒土　暗色砂質土
3. 灰色砂質土
4. 黄色混砂土（下水管埋土）
5. 黄暗赤砂土（下水管埋土）　盛土
6. 黄暗色砂質土＋灰色砂質土　盛土
7. 黄褐色砂質土　盛土
8. 黄褐＋暗褐色土　盛土
9. 褐灰色粘土
10. 褐灰砂質土＋灰色砂質土　暗褐
11. 黄褐色砂質土
12. 褐灰色粘土
13. 褐灰色砂質土
14. 褐灰色シルト　やや砂質
15. 黄褐＋暗褐色土　盛土
16. 褐灰色粘土
17. 褐灰色シルト　やや砂質
18. 褐灰色粘土
19. 褐灰色粘土
20. 褐灰色粘土　ブロック多　盛土
21. 褐灰色粘土　混合
22. 褐灰色砂質土
23. 褐灰色シルト　やや砂質
24. 褐灰色粘土
25. 褐灰色粘土＋黄色ブロック　暗褐
26. 暗褐色粘土
27. 明黄褐色よくしまったシルト
　包含層1面
28. 黒褐色シルト　黒色包含層か
29. 明茶褐色シルト
30. 黄褐色シルト
31. 灰褐色よくしまったシルト
32. 黒褐色よくしまったシルト
33. 褐灰色シルト
34. 明茶褐色よくしまった砂質土
35. 黒褐色砂質土　径1～3mmの礫多
36. 明茶褐色砂質土
37. 褐灰色砂質土
38. 暗褐色粘質土
39. 褐灰色粘土
40. 灰褐色粘土
41. 灰褐色粘土
42. 灰褐色粘土
43. 明褐色砂質
44. 灰褐色粘土
45. 暗褐色粘土
46. 明茶褐色
47. 褐灰色粘土
48. 灰色粘土　旧粘土
49. 黒褐色粘土＋黄色ブロック　暗褐
50. 暗褐色粘土
51. 黒褐色粘土＋黄色ブロック
52. 黒褐色粘土
53. 褐色シルト
54. 茶褐色シルト
55. 黄褐色砂質
56. 暗灰色粘土
57. 緑黄＋黒色砂質土
58. 黒褐色粘土
59. 暗灰褐色粘土　暗褐
60. 黒褐色粘土
61. 灰色粘土
62. 緑色よくしまったシルト
63. 褐灰色粘土
64. 褐灰色粘土
65. 灰色粘土　混合
66. 灰黒色粘土　やや砂質
67. 明茶褐色砂質土
68. 茶褐色シルト
　径1～2mmの礫含（やや砂質）
69. 暗褐色シルト
70. 灰色砂質土
71. 褐灰色砂質土
72. 褐灰色粘質土
73. 褐灰色砂質土
74. 褐灰色シルト
75. 灰褐色粘土
76. 茶褐色砂質土
77. 灰色粘質土
78. 灰黒色砂質土
79. 灰褐色シルト
80. 褐灰色砂質土
81. 暗茶褐色シルト
82. 暗褐色砂質土
83. 灰色シルト
84. 灰色砂シルト
85. 暗褐色粘土
86. 暗褐色粘土
87. 茶褐色砂質
88. 黒色シルト　ブロック
89. 灰褐色粘土
90. 暗褐色粘土
91. 黒褐色シルト
92. 黒褐色粘土　黄色ブロック
93. 黒色シルト
94. 茶褐色砂質土　径3mm大の礫含
95. 黒褐色粘土
96. 暗褐色粘土
97. 明茶褐色砂質土　径1～5mmの礫含
98. 暗褐色粘土
99. 茶褐色土　炭分含
100. 明茶褐色土　鉄分含
101. 褐灰色粘土
102. 暗褐色粘質土　径1～3mm大の礫含
103. 茶褐色シルト
104. 茶褐色よくしまった砂質土
105. 黒褐色よくしまったシルト
106. 暗褐色シルト
107. 黒褐色粘質土
108. 褐色粘土
109. 褐色砂質土
110. 暗茶色粘土
111. 明茶色シルト
112. 暗茶色粘土
113. 茶褐色シルト
114. 褐色シルト
115. 褐灰色砂質土
116. 褐灰色シルト
117. 茶褐色粘土
118. 褐灰色砂質土
119. 褐灰＋茶褐色シルト
120. 茶褐＋褐灰色粘土
121. 褐灰色シルト
122. 褐灰色粘土
123. 灰色シルト
124. 灰灰色シルト
125. 褐灰色粘土
126. 褐灰色粘土
127. 褐色礫粘土
128. 明褐色砂質土
129. 暗褐色よくしまったシルト
130. 褐色粘土
131. 茶褐色粘土
132. 茶褐色砂質土
133. 暗褐色粘土
134. 暗褐色砂質
135. 茶褐色ブロック土
136. 褐灰色粘土
137. 黄色粘土　物室～古墳包含層
138. 灰色粘土　1.37よりやや砂質
139. 黄色シルト
140. 黄褐色粘土ブロック
141. 茶褐色粘土　遺構
142. 暗茶褐色シルト
143. 明茶褐色シルト
144. 褐灰色シルト
145. 灰色礫層　径3～5mm大の中礫多
146. 茶褐色砂質土
147. 黄褐色砂質土　径2mm大の礫含
148. 茶褐色ブロック土
149. 暗褐色砂質土
150. 茶褐色粘土
151. 暗褐色よくしまったシルト
152. 黒色土　弥生～古墳包含層
153. 黒褐色粘土　弥生～古墳包含層
154. 暗褐色粘質土
155. 明茶褐色シルト
156. 暗茶褐色砂質土
157. 茶褐色よくしまったシルト
158. 暗灰褐色シルト
159. 褐灰色砂質土
160. 灰茶褐色砂質土
161. 暗褐色粘土
162. 茶褐色地山ブロック
163. 暗褐色粘質土
164. 黄～黄色ブロック粘土
165. 緑褐色粘土
166. 褐色土
167. 暗褐色粘質土
168. 茶褐色砂質土　径1～3mm大の砂多
169. 黒褐色粘土＋黄色ブロック
170. 黒褐色粘質土
171. 茶褐色砂質土
172. 明茶褐色砂質土　径1mm大の砂粒多
173. 明色褐色粘土
174. 褐灰色粘土
175. 明茶褐色砂質土　やや砂質
176. 褐灰色粘土
177. 茶褐色シルト
178. 褐灰色粘土＋黄色ブロック
179. 褐灰色粘土＋黄色ブロック
180. 褐灰色粘土＋黄色ブロック
181. 褐色粘土＋砂質土
182. 褐灰色シルト
183. 褐灰色粘土
184. 明黄褐色シルト
185. 灰褐色粘土
186. 茶褐色シルト
187. 褐灰色粘土
188. 褐灰色粘土
189. 褐灰色粘土
190. 灰褐色粘土
191. 褐灰色粘土
192. 褐灰色粘土
193. 褐灰色粘土
194. 褐灰色粘土
195. 褐灰色粘土
196. 褐灰色粘土
197. 褐灰色粘土
198. 褐灰色粘土
199. 褐灰色粘土
200. 褐灰色粘土
201. 褐灰色粘土
202. 褐灰色粘土
203. 褐灰色粘土
204. 褐灰色粘土
205. 褐灰色粘土
206. 褐灰色粘土
207. 褐灰色粘土
208. 褐灰色粘土
209. 褐灰色粘土
210. 褐灰色粘土
211. 褐灰色粘土
212. 褐灰色粘土
213. 褐灰色粘土
214. 褐灰色粘土
215. 褐灰色粘土
216. 褐灰色粘土
217. 褐灰色粘土
218. 褐灰色粘土
219. 褐灰色粘土
220. 褐灰色粘土
221. 褐灰色粘土
222. 褐灰色粘土
223. 褐灰色粘土
224. 褐灰色粘土
225. 褐灰色粘土
226. 褐灰色粘土
227. 褐灰色粘土
228. 褐灰色粘土
229. 褐灰色粘土
230. 褐灰色粘土
231. 褐灰色粘土
232. 褐灰色粘土
233. 褐灰色粘土
234. 褐灰色粘土
235. 褐灰色粘土
236. 褐灰色粘土
237. 褐灰色粘土
238. 褐灰色粘土
239. 褐灰色粘土
240. 褐灰色粘土
241. 褐灰色粘土
242. 褐灰色粘土
243. 褐灰色粘土
244. 褐灰色粘土
245. 褐灰色粘土
246. 褐灰色粘土
247. 褐灰色粘土
248. 褐灰色粘土
249. 褐灰色粘土
250. 褐灰色粘土
251. 褐灰色粘土
252. 褐灰色粘土
253. 褐灰色粘土
254. 褐灰色粘土
255. 褐灰色粘土
256. 褐灰色粘土
257. 褐灰色粘土
258. 褐灰色粘土
259. 褐灰色粘土
260. 褐灰色粘土
261. 褐灰色粘土
262. 褐灰色粘土
263. 褐灰色粘土
264. 褐灰色粘土
265. 褐灰色粘土
266. 褐灰色粘土
267. 褐灰色粘土
268. 褐灰色粘土
269. 褐灰色粘土
270. 褐灰色粘土
271. 褐灰色粘土
272. 褐灰色粘土
273. 褐灰色粘土
274. 褐灰色粘土
275. 褐灰色粘土
276. 褐灰色粘土
277. 褐灰色粘土
278. 褐灰色粘土
279. 褐灰色粘土
280. 褐灰色粘土
281. 褐灰色粘土
282. 褐灰色粘土
283. 褐灰色粘土
284. 褐灰色粘土
285. 褐灰色粘土
286. 褐灰色粘土
287. 褐灰色粘土
288. 褐灰色粘土
289. 褐灰色粘土
290. 褐灰色粘土
291. 褐灰色粘土
292. 褐灰色粘土
293. 褐灰色粘土
294. 褐灰色粘土
295. 褐灰色粘土
296. 褐灰色粘土
297. 褐灰色粘土
298. 褐灰色粘土
299. 褐灰色粘土
300. 褐灰色粘土
301. 褐灰色粘土
302. 褐灰色粘土
303. 褐灰色粘土
304. 褐灰色粘土
305. 褐灰色粘土
306. 褐灰色粘土
307. 褐灰色粘土
308. 褐灰色粘土
309. 褐灰色粘土
310. 褐灰色粘土
311. 褐灰色粘土
312. 褐灰色粘土
313. 褐灰色粘土
314. 褐灰色粘土
315. 褐灰色粘土
316. 褐灰色粘土
317. 褐灰色粘土
318. 褐灰色粘土
319. 褐灰色粘土
320. 褐灰色粘土
321. 褐灰色粘土
322. 褐灰色粘土
323. 褐灰色粘土
324. 褐灰色粘土
325. 褐灰色粘土
326. 褐灰色粘土
327. 褐灰色粘土
328. 褐灰色粘土
329. 褐灰色粘土
330. 褐灰色粘土
331. 褐灰色粘土
332. 褐灰色粘土
333. 褐灰色粘土
334. 褐灰色粘土
335. 褐灰色粘土
336. 褐灰色粘土
337. 褐灰色粘土
338. 褐灰色粘土
339. 褐灰色粘土
340. 褐灰色粘土
341. 褐灰色粘土
342. 褐灰色粘土
343. 褐灰色粘土
344. 褐灰色粘土
345. 褐灰色粘土
346. 褐灰色粘土
347. 褐灰色粘土
348. 褐灰色粘土
349. 褐灰色粘土
350. 褐灰色粘土
351. 褐灰色粘土
352. 褐灰色粘土
353. 褐灰色粘土
354. 褐灰色粘土
355. 褐灰色粘土
356. 褐灰色粘土
357. 褐灰色粘土
358. 褐灰色粘土
359. 褐灰色粘土
360. 褐灰色粘土
361. 褐灰色粘土
362. 褐灰色粘土
363. 褐灰色粘土
364. 褐灰色粘土
365. 褐灰色粘土
366. 褐灰色粘土
367. 褐灰色粘土
368. 褐灰色粘土
369. 褐灰色粘土
370. 褐灰色粘土
371. 褐灰色粘土
372. 褐灰色粘土
373. 褐灰色粘土
374. 褐灰色粘土
375. 褐灰色粘土
376. 褐灰色粘土
377. 褐灰色粘土
378. 褐灰色粘土
379. 褐灰色粘土
380. 褐灰色粘土
381. 褐灰色粘土
382. 褐灰色粘土
383. 褐灰色粘土
384. 褐灰色粘土
385. 褐灰色粘土
386. 褐灰色粘土
387. 褐灰色粘土
388. 褐灰色粘土
389. 褐灰色粘土
390. 褐灰色粘土
391. 褐灰色粘土
392. 褐灰色粘土
393. 褐灰色粘土
394. 褐灰色粘土
395. 褐灰色粘土
396. 褐灰色粘土
397. 褐灰色粘土
398. 褐灰色粘土
399. 褐灰色粘土
400. 褐灰色粘土
401. 褐灰色粘土
402. 褐灰色粘土
403. 褐灰色粘土
404. 褐灰色粘土
405. 褐灰色粘土
406. 褐灰色粘土
407. 褐灰色粘土
408. 褐灰色粘土
409. 褐灰色粘土
410. 褐灰色粘土
411. 褐灰色粘土
412. 褐灰色粘土
413. 褐灰色粘土
414. 褐灰色粘土
415. 褐灰色粘土
416. 褐灰色粘土
417. 褐灰色粘土
418. 褐灰色粘土
419. 褐灰色粘土
420. 褐灰色粘土
421. 褐灰色粘土
422. 褐灰色粘土
423. 褐灰色粘土
424. 褐灰色粘土
425. 褐灰色粘土
426. 褐灰色粘土
427. 褐灰色粘土
428. 褐灰色粘土
429. 褐灰色粘土
430. 褐灰色粘土
431. 褐灰色粘土
432. 褐灰色粘土
433. 褐灰色粘土
434. 褐灰色粘土
435. 褐灰色粘土
436. 褐灰色粘土
437. 褐灰色粘土
438. 褐灰色粘土
439. 褐灰色粘土
440. 褐灰色粘土
441. 褐灰色粘土
442. 褐灰色粘土
443. 褐灰色粘土
444. 褐灰色粘土
445. 褐灰色粘土
446. 褐灰色粘土
447. 褐灰色粘土
448. 褐灰色粘土
449. 褐灰色粘土
450. 褐灰色粘土
451. 褐灰色粘土
452. 褐灰色粘土
453. 褐灰色粘土
454. 褐灰色粘土
455. 褐灰色粘土
456. 褐灰色粘土
457. 褐灰色粘土
458. 褐灰色粘土
459. 褐灰色粘土
460. 褐灰色粘土
461. 褐灰色粘土
462. 褐灰色粘土
463. 褐灰色粘土
464. 褐灰色粘土
465. 褐灰色粘土
466. 褐灰色粘土
467. 褐灰色粘土
468. 褐灰色粘土
469. 褐灰色粘土
470. 褐灰色粘土
471. 褐灰色粘土
472. 褐灰色粘土
473. 褐灰色粘土
474. 褐灰色粘土
475. 褐灰色粘土
476. 褐灰色粘土
477. 褐灰色粘土
478. 褐灰色粘土
479. 褐灰色粘土
480. 褐灰色粘土
481. 褐灰色粘土
482. 褐灰色粘土
483. 褐灰色粘土
484. 褐灰色粘土
485. 褐灰色粘土
486. 褐灰色粘土
487. 褐灰色粘土
488. 褐灰色粘土
489. 褐灰色粘土
490. 褐灰色粘土
491. 褐灰色粘土
492. 褐灰色粘土
493. 褐灰色粘土
494. 褐灰色粘土
495. 褐灰色粘土
496. 褐灰色粘土
497. 褐灰色粘土
498. 褐灰色粘土
499. 褐灰色粘土
500. 褐灰色粘土
501. 褐灰色粘土
502. 褐灰色粘土
503. 褐灰色粘土
504. 褐灰色粘土
505. 褐灰色粘土
506. 褐灰色粘土
507. 褐灰色粘土
508. 褐灰色粘土
509. 褐灰色粘土
510. 褐灰色粘土
511. 褐灰色粘土
512. 褐灰色粘土
513. 褐灰色粘土
514. 褐灰色粘土
515. 褐灰色粘土
516. 褐灰色粘土
517. 褐灰色粘土
518. 褐灰色粘土
519. 褐灰色粘土
520. 褐灰色粘土
521. 褐灰色粘土
522. 褐灰色粘土
523. 褐灰色粘土
524. 褐灰色粘土
525. 褐灰色粘土
526. 褐灰色粘土
527. 褐灰色粘土
528. 褐灰色粘土
529. 褐灰色粘土
530. 褐灰色粘土
531. 褐灰色粘土
532. 褐灰色粘土
533. 褐灰色粘土
534. 褐灰色粘土
535. 褐灰色粘土
536. 褐灰色粘土
537. 褐灰色粘土
538. 褐灰色粘土
539. 褐灰色粘土
540. 褐灰色粘土
541. 褐灰色粘土
542. 褐灰色粘土
543. 褐灰色粘土
544. 褐灰色粘土
545. 褐灰色粘土
546. 褐灰色粘土
547. 褐灰色粘土
548. 褐灰色粘土
549. 褐灰色粘土
550. 褐灰色粘土
551. 褐灰色粘土
552. 褐灰色粘土
553. 褐灰色粘土
554. 褐灰色粘土
555. 褐灰色粘土
556. 褐灰色粘土
557. 褐灰色粘土
558. 褐灰色粘土
559. 褐灰色粘土
560. 褐灰色粘土
561. 褐灰色粘土
562. 褐灰色粘土
563. 褐灰色粘土
564. 褐灰色粘土
565. 褐灰色粘土
566. 褐灰色粘土
567. 褐灰色粘土
568. 褐灰色粘土
569. 褐灰色粘土
570. 褐灰色粘土
571. 褐灰色粘土
572. 褐灰色粘土
573. 褐灰色粘土
574. 褐灰色粘土
575. 褐灰色粘土
576. 褐灰色粘土
577. 褐灰色粘土
578. 褐灰色粘土
579. 褐灰色粘土
580. 褐灰色粘土
581. 褐灰色粘土
582. 褐灰色粘土
583. 褐灰色粘土
584. 褐灰色粘土
585. 褐灰色粘土
586. 褐灰色粘土
587. 褐灰色粘土
588. 褐灰色粘土
589. 褐灰色粘土
590. 褐灰色粘土
591. 褐灰色粘土
592. 褐灰色粘土
593. 褐灰色粘土
594. 褐灰色粘土
595. 褐灰色粘土
596. 褐灰色粘土
597. 褐灰色粘土
598. 褐灰色粘土
599. 褐灰色粘土
600. 褐灰色粘土
601. 褐灰色粘土
602. 褐灰色粘土
603. 褐灰色粘土
604. 褐灰色粘土
605. 褐灰色粘土
606. 褐灰色粘土
607. 褐灰色粘土
608. 褐灰色粘土
609. 褐灰色粘土
610. 褐灰色粘土
611. 褐灰色粘土
612. 褐灰色粘土
613. 褐灰色粘土
614. 褐灰色粘土
615. 褐灰色粘土
616. 褐灰色粘土
617. 褐灰色粘土
618. 褐灰色粘土
619. 褐灰色粘土
620. 褐灰色粘土
621. 褐灰色粘土
622. 褐灰色粘土
623. 褐灰色粘土
624. 褐灰色粘土
625. 褐灰色粘土
626. 褐灰色粘土
627. 褐灰色粘土
628. 褐灰色粘土
629. 褐灰色粘土
630. 褐灰色粘土
631. 褐灰色粘土
632. 褐灰色粘土
633. 褐灰色粘土
634. 褐灰色粘土
635. 褐灰色粘土
636. 褐灰色粘土
637. 褐灰色粘土
638. 褐灰色粘土
639. 褐灰色粘土
640. 褐灰色粘土
641. 褐灰色粘土
642. 褐灰色粘土
643. 褐灰色粘土
644. 褐灰色粘土
645. 褐灰色粘土
646. 褐灰色粘土
647. 褐灰色粘土
648. 褐灰色粘土
649. 褐灰色粘土
650. 褐灰色粘土
651. 褐灰色粘土
652. 褐灰色粘土
653. 褐灰色粘土
654. 褐灰色粘土
655. 褐灰色粘土
656. 褐灰色粘土
657. 褐灰色粘土
658. 褐灰色粘土
659. 褐灰色粘土
660. 褐灰色粘土
661. 褐灰色粘土
662. 褐灰色粘土
663. 褐灰色粘土
664. 褐灰色粘土
665. 褐灰色粘土
666. 褐灰色粘土
667. 褐灰色粘土
668. 褐灰色粘土
669. 褐灰色粘土
670. 褐灰色粘土
671. 褐灰色粘土
672. 褐灰色粘土
673. 褐灰色粘土
674. 褐灰色粘土
675. 褐灰色粘土
676. 褐灰色粘土
677. 褐灰色粘土
678. 褐灰色粘土
679. 褐灰色粘土
680. 褐灰色粘土
681. 褐灰色粘土
682. 褐灰色粘土
683. 褐灰色粘土
684. 褐灰色粘土
685. 褐灰色粘土
686. 褐灰色粘土
687. 褐灰色粘土
688. 褐灰色粘土
689. 褐灰色粘土
690. 褐灰色粘土
691. 褐灰色粘土
692. 褐灰色粘土
693. 褐灰色粘土
694. 褐灰色粘土
695. 褐灰色粘土
696. 褐灰色粘土
697. 褐灰色粘土
698. 褐灰色粘土
699. 褐灰色粘土
700. 褐灰色粘土
701. 褐灰色粘土
702. 褐灰色粘土
703. 褐灰色粘土
704. 褐灰色粘土
705. 褐灰色粘土
706. 褐灰色粘土
707. 褐灰色粘土
708. 褐灰色粘土
709. 褐灰色粘土
710. 褐灰色粘土
711. 褐灰色粘土
712. 褐灰色粘土
713. 褐灰色粘土
714. 褐灰色粘土
715. 褐灰色粘土
716. 褐灰色粘土
717. 褐灰色粘土
718. 褐灰色粘土
719. 褐灰色粘土
720. 褐灰色粘土
721. 褐灰色粘土
722. 褐灰色粘土
723. 褐灰色粘土
724. 褐灰色粘土
725. 褐灰色粘土
726. 褐灰色粘土
727. 褐灰色粘土
728. 褐灰色粘土
729. 褐灰色粘土
730. 褐灰色粘土
731. 褐灰色粘土
732. 褐灰色粘土
733. 褐灰色粘土
734. 褐灰色粘土
735. 褐灰色粘土
736. 褐灰色粘土
737. 褐灰色粘土
738. 褐灰色粘土
739. 褐灰色粘土
740. 褐灰色粘土
741. 褐灰色粘土
742. 褐灰色粘土
743. 褐灰色粘土
744. 褐灰色粘土
745. 褐灰色粘土
746. 褐灰色粘土
747. 褐灰色粘土
748. 褐灰色粘土
749. 褐灰色粘土
750. 褐灰色粘土
751. 褐灰色粘土
752. 褐灰色粘土
753. 褐灰色粘土
754. 褐灰色粘土
755. 褐灰色粘土
756. 褐灰色粘土
757. 褐灰色粘土
758. 褐灰色粘土
759. 褐灰色粘土
760. 褐灰色粘土
761. 褐灰色粘土
762. 褐灰色粘土
763. 褐灰色粘土
764. 褐灰色粘土
765. 褐灰色粘土
766. 褐灰色粘土
767. 褐灰色粘土
768. 褐灰色粘土
769. 褐灰色粘土
770. 褐灰色粘土
771. 褐灰色粘土
772. 褐灰色粘土
773. 褐灰色粘土
774. 褐灰色粘土
775. 褐灰色粘土
776. 褐灰色粘土
777. 褐灰色粘土
778. 褐灰色粘土
779. 褐灰色粘土
780. 褐灰色粘土
781. 褐灰色粘土
782. 褐灰色粘土
783. 褐灰色粘土
784. 褐灰色粘土
785. 褐灰色粘土
786. 褐灰色粘土
787. 褐灰色粘土
788. 褐灰色粘土
789. 褐灰色粘土
790. 褐灰色粘土
791. 褐灰色粘土
792. 褐灰色粘土
793. 褐灰色粘土
794. 褐灰色粘土
795. 褐灰色粘土
796. 褐灰色粘土
797. 褐灰色粘土
798. 褐灰色粘土
799. 褐灰色粘土
800. 褐灰色粘土
801. 褐灰色粘土
802. 褐灰色粘土
803. 褐灰色粘土
804. 褐灰色粘土
805. 褐灰色粘土
806. 褐灰色粘土
807. 褐灰色粘土
808. 褐灰色粘土
809. 褐灰色粘土
810. 褐灰色粘土
811. 褐灰色粘土
812. 褐灰色粘土
813. 褐灰色粘土
814. 褐灰色粘土
815. 褐灰色粘土
816. 褐灰色粘土
817. 褐灰色粘土
818. 褐灰色粘土
819. 褐灰色粘土
820. 褐灰色粘土
821. 褐灰色粘土
822. 褐灰色粘土
823. 褐灰色粘土
824. 褐灰色粘土
825. 褐灰色粘土
826. 褐灰色粘土
827. 褐灰色粘土
828. 褐灰色粘土
829. 褐灰色粘土
830. 褐灰色粘土
831. 褐灰色粘土
832. 褐灰色粘土
833. 褐灰色粘土
834. 褐灰色粘土
835. 褐灰色粘土
836. 褐灰色粘土
837. 褐灰色粘土
838. 褐灰色粘土
839. 褐灰色粘土
840. 褐灰色粘土
841. 褐灰色粘土
842. 褐灰色粘土
843. 褐灰色粘土
844. 褐灰色粘土
845. 褐灰色粘土
846. 褐灰色粘土
847. 褐灰色粘土
848. 褐灰色粘土
849. 褐灰色粘土
850. 褐灰色粘土
851. 褐灰色粘土
852. 褐灰色粘土
853. 褐灰色粘土
854. 褐灰色粘土
855. 褐灰色粘土
856. 褐灰色粘土
857. 褐灰色粘土
858. 褐灰色粘土
859. 褐灰色粘土
860. 褐灰色粘土
861. 褐灰色粘土
862. 褐灰色粘土
863. 褐灰色粘土
864. 褐灰色粘土
865. 褐灰色粘土
866. 褐灰色粘土
867. 褐灰色粘土
868. 褐灰色粘土
869. 褐灰色粘土
870. 褐灰色粘土
871. 褐灰色粘土
872. 褐灰色粘土
873. 褐灰色粘土
874. 褐灰色粘土
875. 褐灰色粘土
876. 褐灰色粘土
877. 褐灰色粘土
878. 褐灰色粘土
879. 褐灰色粘土
880. 褐灰色粘土
881. 褐灰色粘土
882. 褐灰色粘土
883. 褐灰色粘土
884. 褐灰色粘土
885. 褐灰色粘土
886. 褐灰色粘土
887. 褐灰色粘土
888. 褐灰色粘土
889. 褐灰色粘土
890. 褐灰色粘土
891. 褐灰色粘土
892. 褐灰色粘土
893. 褐灰色粘土
894. 褐灰色粘土
895. 褐灰色粘土
896. 褐灰色粘土
897. 褐灰色粘土
898. 褐灰色粘土
899. 褐灰色粘土
900. 褐灰色粘土
901. 褐灰色粘土
902. 褐灰色粘土
903. 褐灰色粘土
904. 褐灰色粘土
905. 褐灰色粘土
906. 褐灰色粘土
907. 褐灰色粘土
908. 褐灰色粘土
909. 褐灰色粘土
910. 褐灰色粘土
911. 褐灰色粘土
912. 褐灰色粘土
913. 褐灰色粘土
914. 褐灰色粘土
915. 褐灰色粘土
916. 褐灰色粘土
917. 褐灰色粘土
918. 褐灰色粘土
919. 褐灰色粘土
920. 褐灰色粘土
921. 褐灰色粘土
922. 褐灰色粘土
923. 褐灰色粘土
924. 褐灰色粘土
925. 褐灰色粘土
926. 褐灰色粘土
927. 褐灰色粘土
928. 褐灰色粘土
929. 褐灰色粘土
930. 褐灰色粘土
931. 褐灰色粘土
932. 褐灰色粘土
933. 褐灰色粘土
934. 褐灰色粘土
935. 褐灰色粘土
936. 褐灰色粘土
937. 褐灰色粘土
938. 褐灰色粘土
939. 褐灰色粘土
940. 褐灰色粘土
941. 褐灰色粘土
942. 褐灰色粘土
943. 褐灰色粘土
944. 褐灰色粘土
945. 褐灰色粘土
946. 褐灰色粘土
947. 褐灰色粘土
948. 褐灰色粘土
949. 褐灰色粘土
950. 褐灰色粘土
951. 褐灰色粘土
952. 褐灰色粘土
953. 褐灰色粘土
954. 褐灰色粘土
955. 褐灰色粘土
956. 褐灰色粘土
957. 褐灰色粘土
958. 褐灰色粘土
959. 褐灰色粘土
960. 褐灰色粘土
961. 褐灰色粘土
962. 褐灰色粘土
963. 褐灰色粘土
964. 褐灰色粘土
965. 褐灰色粘土
966. 褐灰色粘土
967. 褐灰色粘土
968. 褐灰色粘土
969. 褐灰色粘土
970. 褐灰色粘土
971. 褐灰色粘土
972. 褐灰色粘土
973. 褐灰色粘土
974. 褐灰色粘土
975. 褐灰色粘土
976. 褐灰色粘土
977. 褐灰色粘土
978. 褐灰色粘土
979. 褐灰色粘土
980. 褐灰色粘土
981. 褐灰色粘土
982. 褐灰色粘土
983. 褐灰色粘土
984. 褐灰色粘土
985. 褐灰色粘土
986. 褐灰色粘土
987. 褐灰色粘土
988. 褐灰色粘土
989. 褐灰色粘土
990. 褐灰色粘土
991. 褐灰色粘土
992. 褐灰色粘土
993. 褐灰色粘土
994. 褐灰色粘土
995. 褐灰色粘土
996. 褐灰色粘土
997. 褐灰色粘土
998. 褐灰色粘土
999. 褐灰色粘土
1000. 褐灰色粘土

第74図　C区土層断面図（S＝1：100）

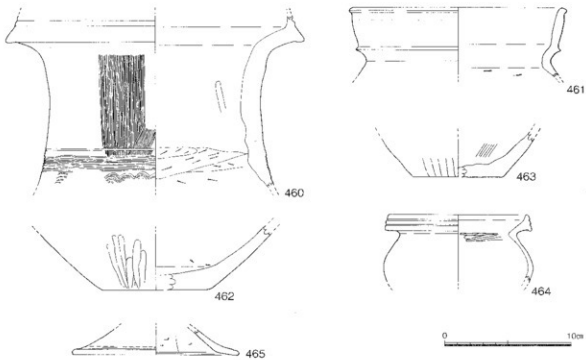
竪穴住居跡　ＳＧ2001（第73・75・76図）

調査区南側、標高3.8m～3.9mで検出した。主軸をW－3°－Nにとる。壁帯溝は検出されなかったが、周溝と考えられる溝を検出した。柱穴間は1.4m×2.2m、深さは検出面より0.3m～0.65mであった。柱穴内は、黒褐色粘質土に黄褐色土混じり、暗褐色土に灰褐色粘質土混じりの堆積であった。

出土遺物460は壺で筒状の頸部から外反し、口縁端部に２条の凹線文と頸部に丁寧なハケ目調整を行い、その下には６条の擬凹線文と波状文を施す。内面は頸部下にヘラケズリを行う。464は小型の甕か鉢で、口径11.0cmを測る。口縁外面に２条の凹線を巡らす。内外面ともヘラミガキとナデ調整を行う。胎土は砂粒をごくわずか含むが緻密である。462、463は壺の底部で外面にヘラミガキを施す。以上ともにＳＧ2311より出土した。461は複合口縁の甕で、口縁端部を外方に折り曲げ、やや肥厚する。ＳＧ2311の柱穴内より出土した。465は高坏脚部で脚径13.1cmを測る。ＳＧ2295から出土した。



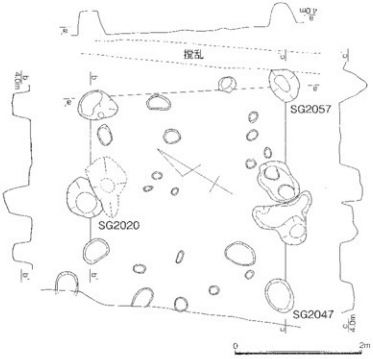
第75図　竪穴住居跡ＳＧ2001実測図（Ｓ＝１：60）



第76図　竪穴住居跡ＳＧ2001出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

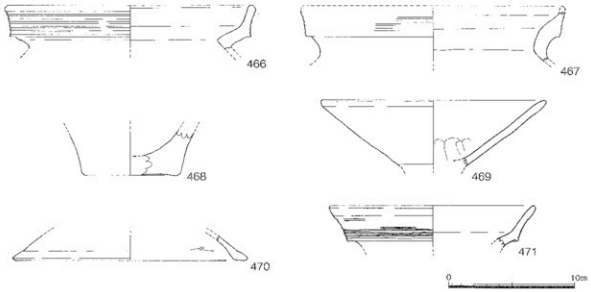
掘立柱建物跡　ＳＧ2002（第98・99図）

調査区北側、標高約1.2mで検出した。主軸をＥ－32°－Ｎにとる。検出長は２間×１間（3.3m×3.1m）で西側は撹乱により不明である。柱穴間は約1.6m×3.1mで深さは検出面より0.45m～0.20mである。柱穴内は黒褐色粘質土であった。



第77図　掘立柱建物跡ＳＧ2002実測図（Ｓ＝１：60）

出土遺物は、466、467が複合口縁の甕で櫛状工具による平行線文を施す。それぞれＳＧ2020とＳＧ2047から出土した。469、470は高坏の坏部と脚部と考えられる。469は、坏部内面に粗いヨコナデを行う。470は内面がヘラケズリであるため脚部としたが不明である。ともにＳＧ2047から出土した。

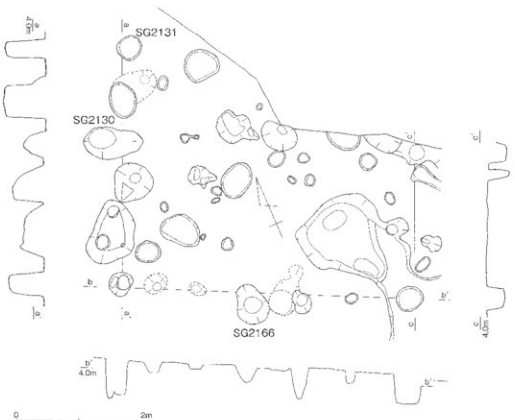


第78図　掘立柱建物跡ＳＧ2002出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

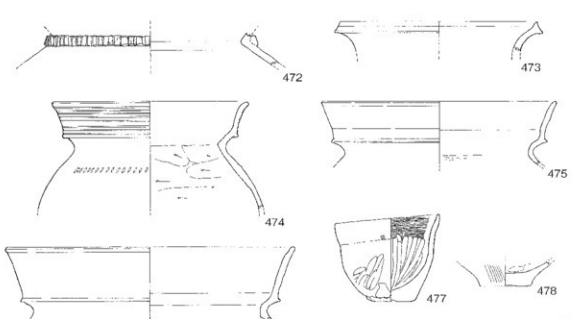
掘立柱建物　ＳＧ2003（第73・79・80図）

調査区中央、標高4.15mで検出した。主軸をＥ－29°－Ｎにとる。検出長は4.5m×3.8mで柱穴間は2.0m～2.5m×2.3mで、深さは検出面より0.66m～0.3mである。柱穴内は黒褐色粘質土に黄褐色上混じりの堆積で、ＳＧ2131のみ黒褐色粘質土であった。

出土遺物は、472が甕か鉢で頸部に指頭圧痕文帯をめぐらす。473の壷とともにＳＧ2166から出土した。477はミニチュアの鉢でＳＧ2130から出土した。外面はハケ目後ヘラミガキ、口縁部内面は丁寧なハケ目、頸部下は縦方向のヘラミガキが施される。474～476の甕はＳＧ2131から出土した。474は口縁外面に平行線文、肩部にわずかに刺突文をのこす。475、476は、口縁が薄く外傾し端部は丸くおさめる。



第79図　掘立柱建物跡ＳＧ2003実測図（Ｓ＝１：60）

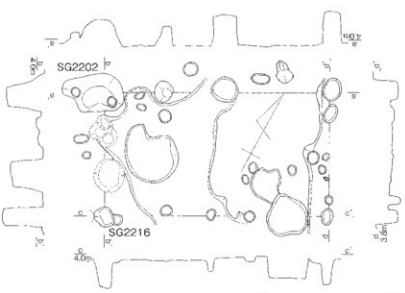


第80図　掘立柱建物跡ＳＧ2003出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

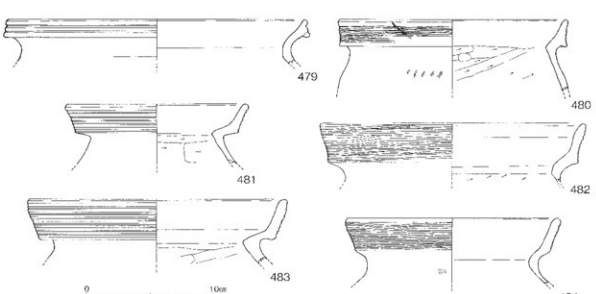
掘立柱建物跡　ＳＧ2004（第73・81・82・83図）

調査区中央ＳＧ2003の南側に隣接し、標高4.1m付近で検出した。主軸はＥ－29°－Ｎにとる。検出長は２間×１間（3.5m×2.0m）で柱穴間は1.7m～1.8m×2.0m、深さは検出面より0.45m～0.2mであった。柱穴内は黒褐色粘質土主体であった。

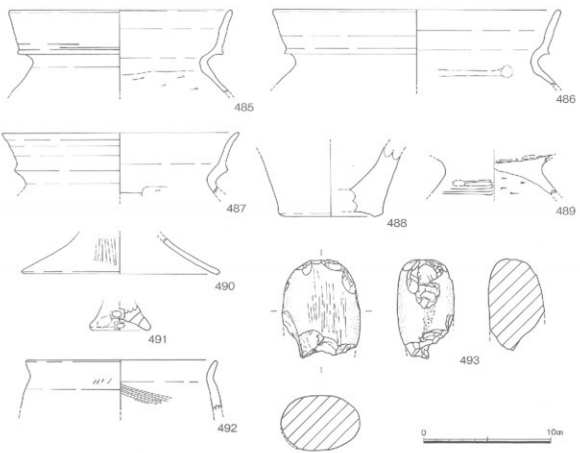
出土遺物は、480～487が複合口縁の甕で、480～484は口縁外面に櫛状工具による平行線文を施す。内面はヨコナデとヘラケズリを行う。485～487は口縁外面に櫛状工具による器面調整痕をわずかに残し、稜は下向きに突出する。草田３期～４期の遺物と考えたい。493は叩き石で砥石の転用である。残存長7.8cm、幅6.0cm厚さ4.4cmを測る。487はＳＧ2216から出土したが、それ以外はＳＧ2202から出土した。



第81図　掘立柱建物跡ＳＧ2004実測図（Ｓ＝１：60）



第82図　掘立柱建物跡ＳＧ2004出土遺物実測図（１）（Ｓ＝１：３）



第83図　掘立柱建物跡ＳＧ2004出土遺物実測図（2）（Ｓ＝１：３）

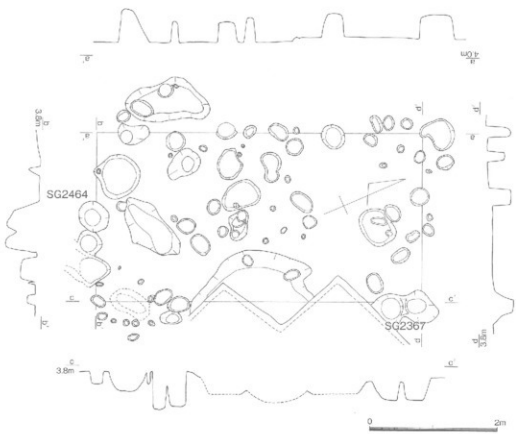
掘立柱建物跡　ＳＧ2005（第73・84・85図）

調査区南側、標高3.7m付近で検出した。主軸をＮ－24°－Ｅにとる。検出長は４間×１間（5.1m×2.7m）で東側は調査区外のため確認出来なかった。西端は調査区外に続くと思われる。柱穴間は1.3m～1.4m×2.7mで、深さは検出面より0.54m～0.25mである。柱穴内は黒褐色粘質土が主体の堆積であった。

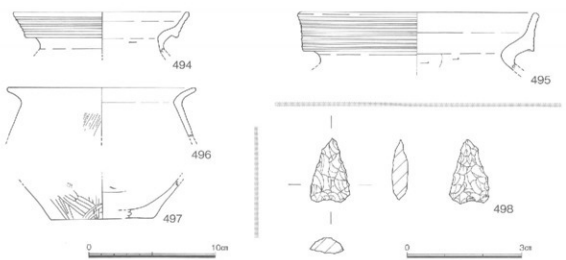
出土遺物494、495は複合口縁の甕で外面に櫛状工具による平行線文を施す。内面はヨコナデと頸部下にヘラケズリを行う。草田３期の遺物と考えたい。それぞれＳＧ2464・2367から出土した。498は黒曜石の石鏃で、長さ1.7cm、幅1.0cmを測る。

土坑　ＳＧ2405（第73・86・87・88・89・90図）

調査区南西、標高3.7m付近で検出した土坑である。主軸はＥ－38°－Ｎにとる。幅1.5m、残存長2.7m、検出面からの深さ0.45mを測る。西側は、工事立会調査でも、撹乱をうけており規模は確認できなかった。土坑内の堆積は黒褐色粘土主体であり、焼けた木片、樹皮、また炭化物を多量に含む土層堆積であった。土坑内からは多量の遺物が出土し、コンテナ７箱ほどであった。

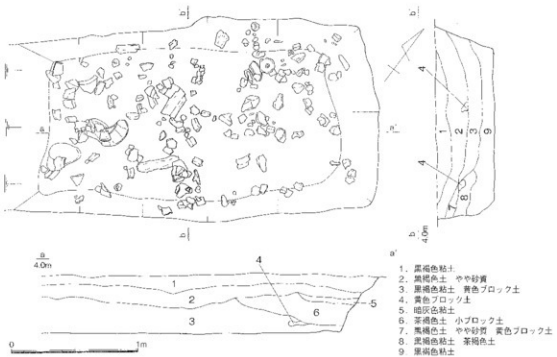


第84図　掘立柱建物跡ＳＧ2005実測図（Ｓ＝１：60）



第85図　掘立柱建物跡ＳＧ2005出土遺物実測図（Ｓ＝１：３、Ｓ＝１：１）

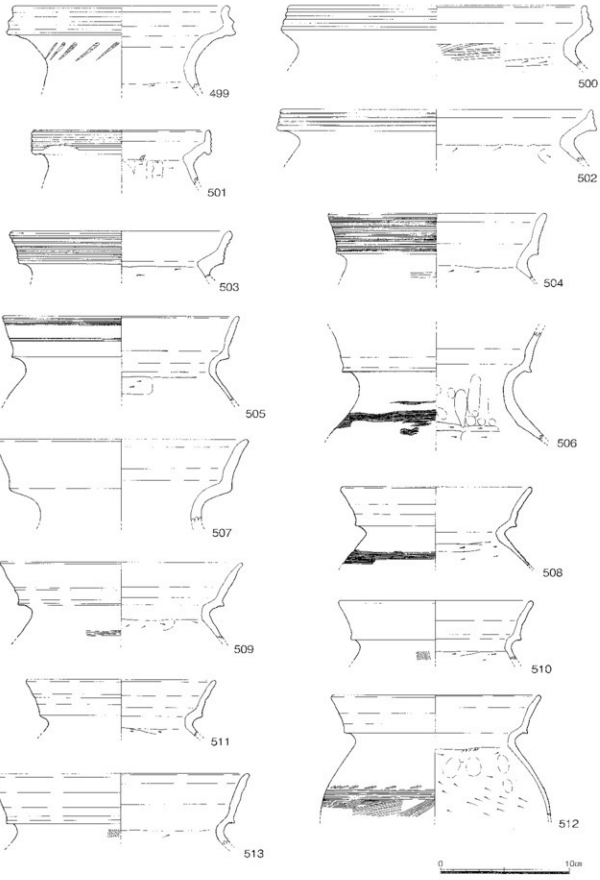
499～501は複合口縁の壷で口縁外面に２条～４条の凹線文を施す。内面はヨコナデ、ヘラケズリ、一部ハケ目調整を行なう。502～505は複合口縁の甕で、502は口縁外面にヘラ状工具による４条の凹線を巡らす。503～505は口縁外面に櫛状工具による平行線文、内面はヨコナデとヘラケズリ



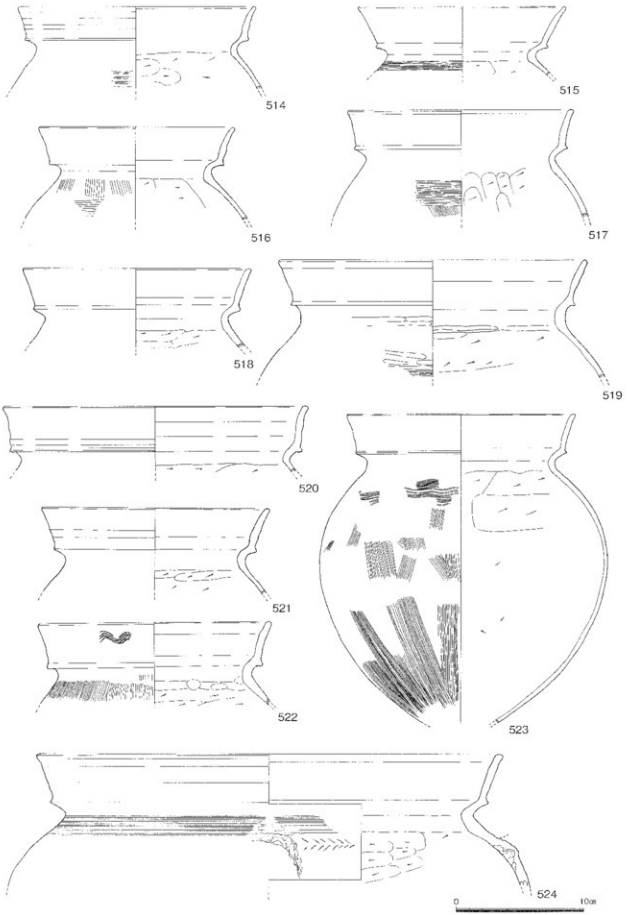
第86図　土坑ＳＧ2405実測図（Ｓ＝１：30）

を施す。口縁はやや外傾する。506・507は複合口縁の壺で、506は肩部に波状文風の半行線文10条を巡らす。内面は指ナデ、ヘラケズリがなされる。508～527は複合口縁の甕で、508～576は、貝殻腹縁による器面調整がなされ、一部ナデ消しを行なう。口縁は上方へ引き出されたようにやや外傾し、端部は丸くおさめる。509・510・513・515・516・517は、外面にハケ目調整を行う。512は外面肩部下にヘラ状工具による刺突文とハケ目調整を行う。523は口径17.7cm、現高24.4cmを測る。口縁端部に平坦面をもち、肩部から胴部へゆるやかな曲線を描く。外面はナデとハケ目、肩部に波長の長い波状文を施す。内面はナデとヘラケズリを行う。524は複合口縁の甕か、注口土器と考えられる。口径36.2cmを測る大型品である。外面は灰色、内面は灰褐色。内外面の一部に注口部が残る。525～527の口縁は、断面はうすく引き出され肩部に櫛状工具による擬凹線文、波状文、貝殻腹縁による刺突文を施す。528～530は底部で、529は、わずかに底部が残る。532～538は鼓形器台で532・533は貝殻腹縁による半行線文を施す。534～538は貝殻腹縁による成形後ヨコナデがなされる。内面はいずれも器受部はヘラミガキ、脚台部はヘラケズリがなされる。539～543は高坏である。540は口径25.5cmを測り、外面の形状は丸味を帯びる。544・545は低脚坏で544は口径23.6cmと大型である。546は不明の特異な土器で、底部径11.0cmを測る。淡橙色を呈し、極めて薄く垂直に立ち上がる筒状の器形。外面は沈線による線刻、鋸歯文が施され、底部はヘラミガキ、内面はハケ状工具によるナデ後、丁寧な指ナデ。底部は貼り付けである。547・548は黒曜石の石鏃で、547は未成品である。

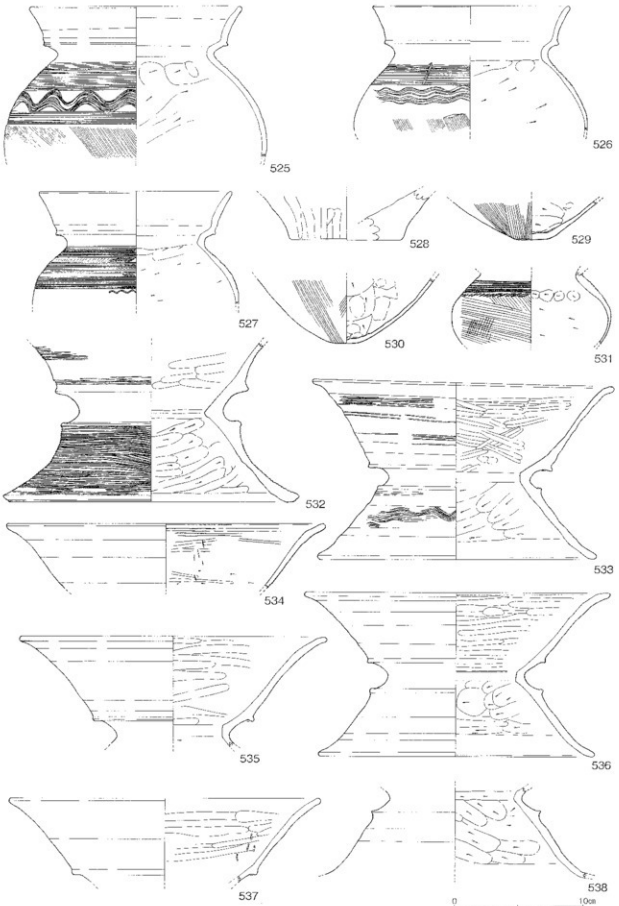
この土坑は弥生時代後期から古墳時代初めにかけての廃棄土坑と考える。



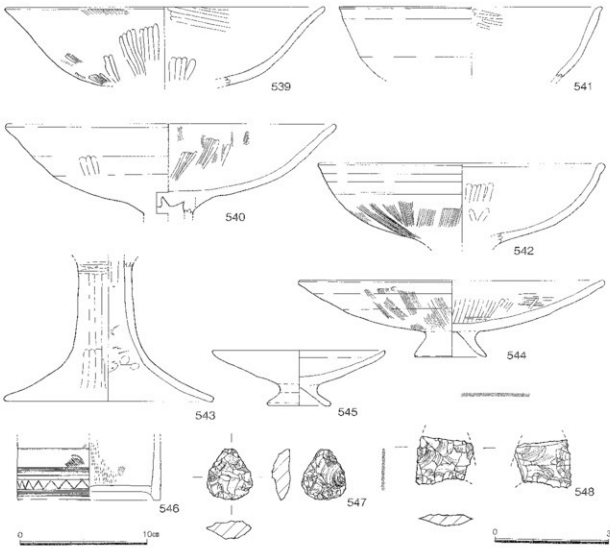
第87図　土坑ＳＧ2405出土遺物実測図（1）（Ｓ＝１：３）



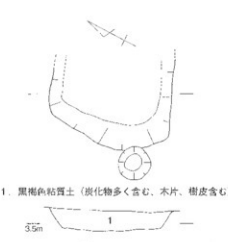
第88図　土坑ＳＧ2405出土遺物実測図（2）（Ｓ＝１：３）



第89図　土坑ＳＧ2405出土遺物実測図（３）（Ｓ＝１：３）



第90図　土坑ＳＧ2405出土遺物実測図（４）（Ｓ＝１：３）

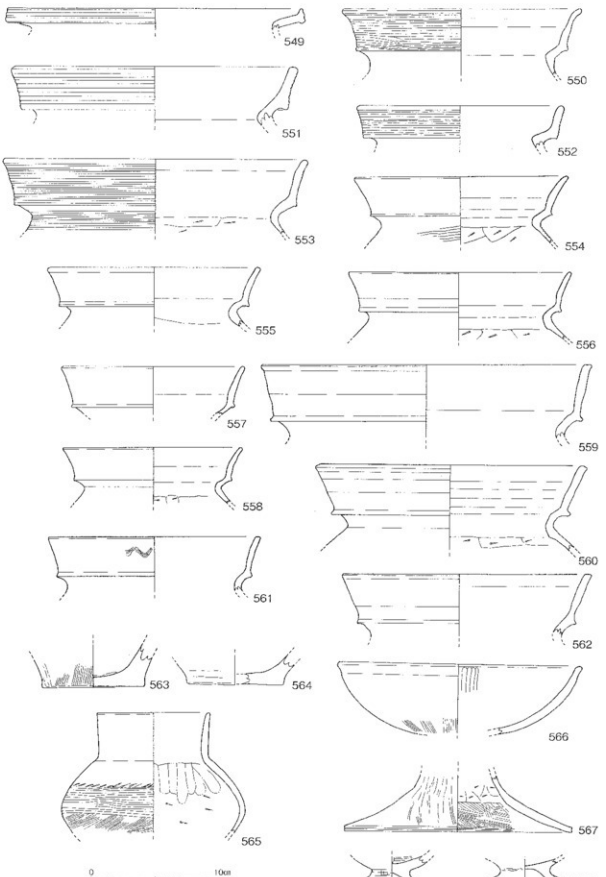


第91図　土坑ＳＧ2359実測図
（Ｓ＝１：30）

土坑　ＳＧ2359（第73・91・92図）

調査区南西、標高3.6m、工事立会調査で検出した。主軸はＥ－19°－Ｎにとる。幅1.0m、検出長は0.6mで深さは検出面より0.2mを測る。東側は撹乱により確認出来なかった。土坑内は木片、樹皮、また炭化物を多く含む黒褐色粘質土であった。

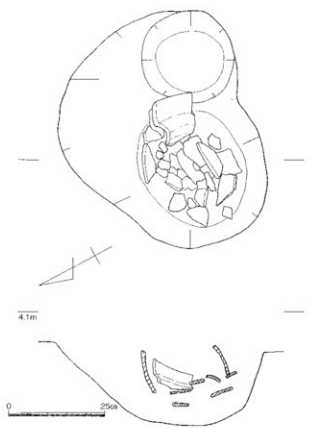
出土遺物は549が壺でヘラによる２条の凹線を行う。550～562は複合口縁の甕である。550～553は口縁外面に櫛状工具による平行線文を９条～19条施す。554～558は口縁外面に貝殻腹縁による成形後ナデで消したように見え、断面は薄く引き出したようになる。559・560は口縁端部を折り曲げ、561・562は口縁端部にわずかな平坦面を持つ。



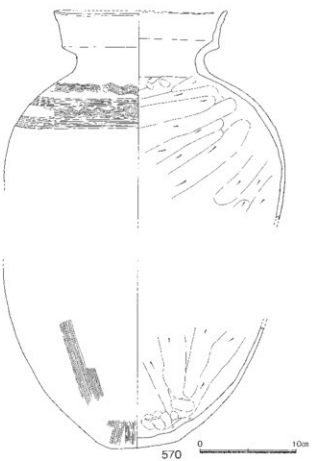
第92図　土坑ＳＧ2359出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

土坑　ＳＧ2223（第73・93・94図）

調査区中央、標高４m付近で検出した。平面形は、いびつな楕円形で、長径0.55m、深さ0.2mを測る。墓壙の可能性も考えられるがここでは土坑とした。734は、上圧により押しつぶされた形で出土した同一個体の複合口縁の壺である。口径17.7cmを測るが、口縁端部を薄く引き出したようである。肩部に櫛描き波状文と平行線文をくり返し施す。体部は球形状に張り出し、底部は平底をもつ。穿孔は見られなかった。草田５期の遺物と考えたい。



第93図　土坑ＳＧ2223実測図（Ｓ＝１：10）

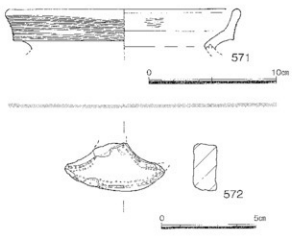


第94図　土坑ＳＧ2223出土遺物実測図（Ｓ＝１：４）

土坑　ＳＧ2290（第73・95・96図）

調査区南側、標高3.8m付近で検出した。複合口縁の甕571は、貝殻腹縁による平行線文を行い口縁端部は丸くおさめる。分銅形土製品572は貫通孔がないため下半部と考えられる。周縁に沿って櫛先による列点文２条が施される。最大幅5.3cm、厚さ1.2cmを測る。製作、使用されたのが弥生中期から後期前半を中心とする時期とされており、甕571が草田３期を示していることから572についても時期差はないものと考えられる。これは東側の土坑から出土した。

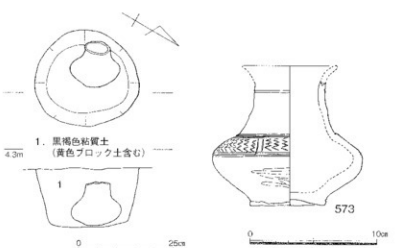
第95図　土坑ＳＧ2290実測図（Ｓ＝１：60）



第96図　土坑ＳＧ2290出土遺物実測図
（Ｓ＝１：３、Ｓ＝１：２）

土坑　ＳＧ2117（第73・97図）

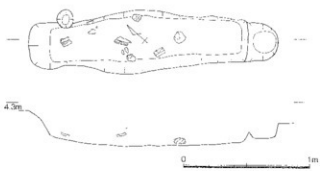
調査区中央よりやや北側、標高4.25mで検出した。径0.27m前後の円形の土坑である。深さ0.15mを測り、土坑内は黒褐色粘質土に黄色ブロック混じりの土層であった。その中より口縁部を一部欠くものの弥生前期の壺573が出土した。ヘラ描きによる口頸部界、頸胴部界の段はやや不明瞭であるが頸部と胴部上半に施されたヘラ描文の間に無軸羽状文を描き、縦方向の直線文で文様を区画している。胴部は大きく張り出し底部は上げ底となる。



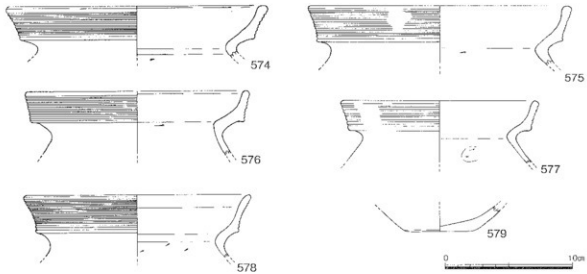
第97図　土坑ＳＧ2117実測図（Ｓ＝１：10）出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

土坑　ＳＧ2101（第73・98・99図）

調査区中央よりやや北、標高約4.2m付近で検出した。墓壙の可能性があるが、ここでは土坑とした。長径1.7m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。主軸をＥ－42°－Ｎにとる。出土遺物は複合口縁の甕741～746は、櫛状工具による平行線文６条～12条を巡らす。草田3期の遺物と考えたい。



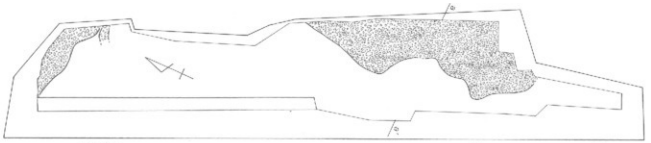
第98図　土坑ＳＧ2101実測図（Ｓ＝１：30）



第99図　土坑ＳＧ2101出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

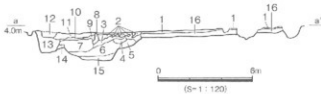
Ｇ区　第３遺構面（第100図）

Ｇ区第２遺構面検出後、地山確認のため、明茶褐色砂質土（第80図172層）の人力掘削を行い明茶褐色シルト層（第80図173層）で北端と、中央から南側にかけて旧河道２本を検出した。旧河道についてはトレンチ調査を行ったが、遺物は出土しなかった。



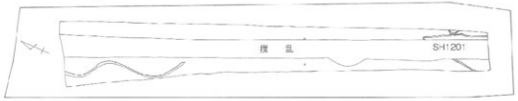
旧河道範囲

0　10m
(S=1：300)

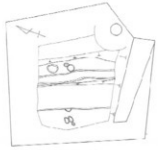


1．暗褐色砂質土（ブロック多く含む）
2．青灰色　よくしまった砂質土
3．明褐色砂質土（地山状）ベースに暗褐色ブロック含
4．黄褐色　よくしまったシルト
5．黄褐色　よくしまったシルト　φ1㎜の砂黄土多し
6．暗灰色砂　φ1～3㎜程度の小礫　よくしまる
7．暗灰色砂　⑥と同質だがやや暗い
8．黄褐色＋青灰色　よくしまったシルト
9．黄褐色　よくしまったシルト
10．青灰色＋黄褐色
11．黄褐色砂＋青灰色　φ12～5㎜大の中礫含む
12．緑灰色砂質
13．暗灰褐色砂層　φ1㎜大の砂
14．黄褐色シルト　ほぼ地山
15．灰色砂層　φ1㎜大の小砂
16．明褐色　地山

第100図　旧河道ＳＧ3001実測図（Ｓ＝１：300、Ｓ＝１：120）

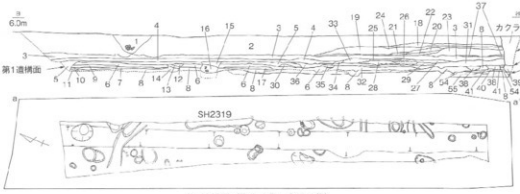


第1遺構面（中世～近世）

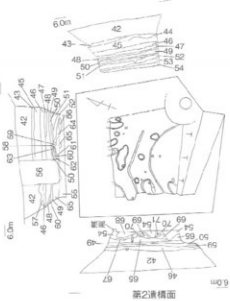


第1遺構面

1. 黒色砂質土
　　コンクリート・アスファルト他　撹乱
2. 黄茶褐色砂質土　盛土
3. 緑灰色強粘土　旧耕土
4. 暗灰色強粘土
5. 褐灰色強粘土
6. 褐灰色粘質土
7. 暗灰色シルト
8. 黒色よくしまったシルト
　　弥生～古墳包含層
9. 黄褐色砂質土
10. 暗灰色粘土
11. 暗灰色シルト
12. 淡灰色粘質土
13. 暗灰色粘質土
14. 褐灰色粘質土
15. 暗灰色粘質土
16. 黒褐色シルト
17. 茶褐色粘質土
18. 黒褐色粘質土
19. 茶褐色粘質土
20. 明茶褐色砂質土
21. 暗灰褐色砂質土
22. 明茶褐色砂質土　礫を多量に含む
23. 褐色砂質土　礫を多量に含む
24. 灰褐色砂質土
25. 暗灰色シルト
26. 褐灰色砂質土
27. 明茶褐色砂層
28. 灰色よくしまったシルト
29. 灰褐色シルト
30. 明茶褐色砂層
31. 灰茶褐色シルト
32. 暗灰色粘土
33. 暗灰色粘土
34. 褐灰色粘土
35. 暗灰色粘土
36. 灰色シルト＋黄茶色砂層
37. 黒褐色砂＋灰色砂土
38. 黄褐色粘質土
39. 黄褐色粘土ブロック
40. 淡灰褐色粘土
41. 灰褐色粘土
42. 灰＋黄色砂層　盛土
43. 黒褐色粘土　盛土
44. 灰褐色粘土　盛土
45. 褐灰＋暗褐色粘土
46. 灰色粘土
47. 灰茶褐色土
48. 灰色粘土
49. 灰褐＋青褐色粘土
50. 黄褐色砂質土
　　18C末～17C初の遺物含む
51. 灰色粘土
52. 灰色砂質土　やや粘質
53. 白灰色粘土
54. 黄褐色よくしまったシルト　地山
55. 黒色粘土無遺物層
56. 黄色黒砂土　下水道の埋乱
57. 灰＋黄色粘土
58. 灰色粘土ブロック
59. 灰褐色砂層
60. 灰色砂層　やや粘性
61. 暗灰褐色砂層
62. 茶褐色砂層
63. 灰色粘土ブロック
64. 暗灰＋茶褐色砂質土
65. 黒褐色粘質土　弥生～古墳包含層
66. 暗褐色粘土
67. 暗灰褐色粘土
68. 茶褐色砂質土
69. 暗灰褐色粘土
70. 暗灰色粘土
71. 茶褐色砂質土ブロック



第2遺構面（弥生時代～古墳時代）



第2遺構面

H区

H区　第１遺構面（第101図）

H区は、昭和60年に発掘調査が実施された、鹿島歴史民俗資料館の西隣に位置する。標高4.0m～5.0mは盛土で、4.0m～3.2mの灰色粘土層（第101図３～５・33層）が堆積している。その下の暗灰色粘質土（第101図６・46・48層）、黄褐色砂質土（第101図132・９・31・50層）が第１遺構面で、中・近世の遺構、遺物を検出した。

第102図　溝状遺構ＳＨ1201実測図
（Ｓ＝１：40）

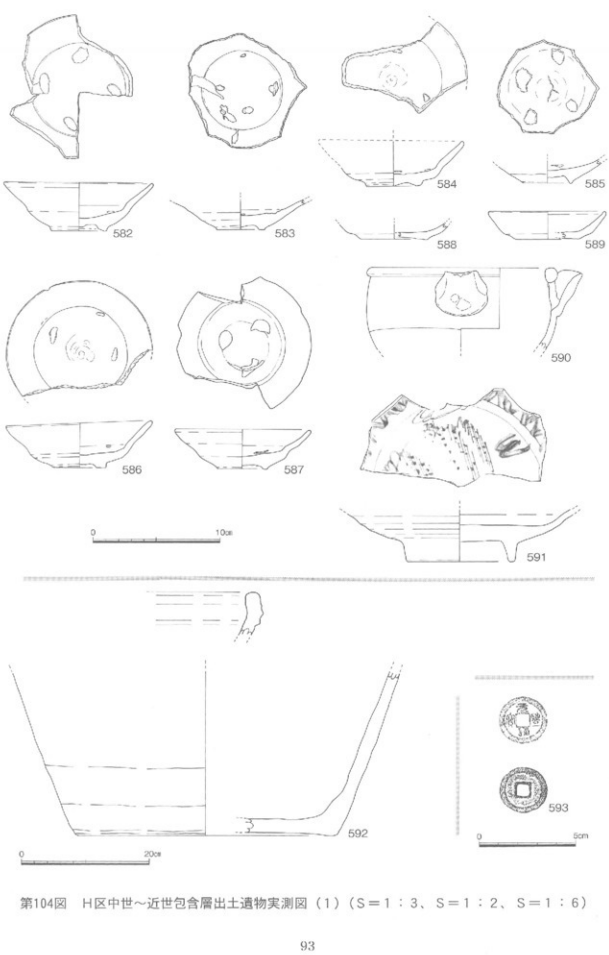
第103図　溝状遺構ＳＨ1201出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

溝状遺構　ＳＨ1201（第101・102・103図）

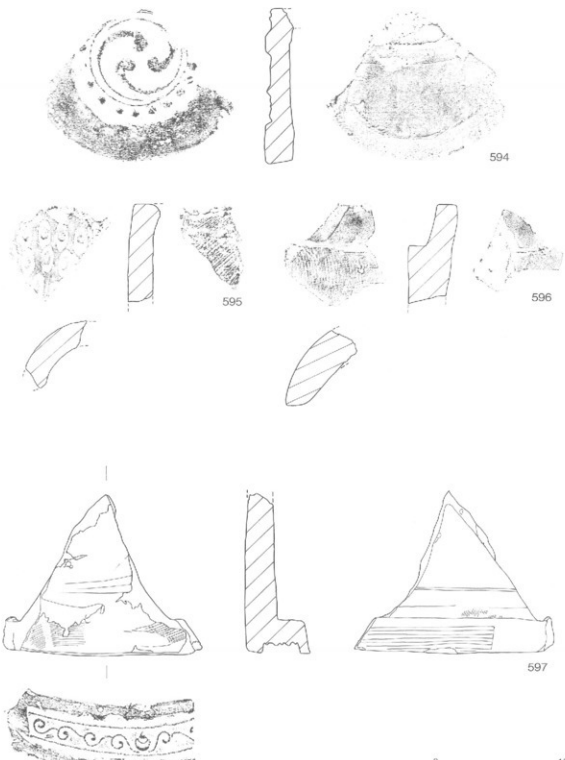
H区南、標高3.2m付近で検出した。西側と南側は大きく撹乱を受けており、検出長3.5m、幅0.3m、深さ0.14mを測る。土坑内は明黄褐色砂質土であった。782は底部径8.4cmの中国白磁の四耳壺で、釉薬により灰白色を呈する。11世紀後半～12世紀前後と考える。
783は瀬戸美濃の皿である。にぶい黄色を呈す。
16世紀末と考える。

中・近世包含層出土遺物（第104・105図）

古代から中世にかけての包含層から、陶磁器や銭貨が出土した。582、584～586は唐津の皿である。584～586は赤褐色の胎土に釉をかけている。内面底部に重ね焼きの痕跡、胎土目で、587は砂目である。583は肥前系の皿と思われる。582～586は16世紀末～17世紀初、587は17世紀初～中頃である。590は唐津の片口鉢で胴部は無釉。17世紀台と考える。591は初期伊万里の皿である。592は備前系の甕で、外面にぶい赤褐色～灰赤褐色を呈す。銭貨593は元豊通寶である。16世紀後半～17世紀前半の中世の渡来銭である。594は軒丸瓦で巴文。17世紀台と思われる。595は丸瓦で楕円形のスタンプ状の圧痕があり、凹面はコビキＡである。596は丸瓦の尻部小片で縄目の叩き痕がある。焼成は瓦質で表面は黒く、断面は灰白色である。中世の瓦と思われる。597は軒平瓦である。文様は宝珠と唐草で九州系の搬入品の可能性がある。



第104図　H区中世～近世包含層出土遺物実測図（1）（S＝1：3、S＝1：2、S＝1：6）



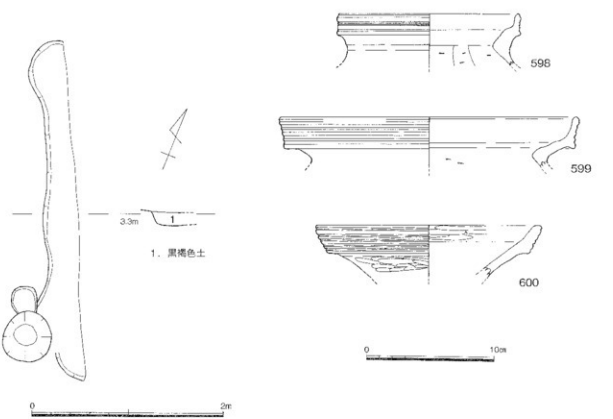
第105図　H区中世～近世包含層出土遺物実測図（2）（S＝1：3）

H区　第２遺構面（第101図）

H区第１遺構面の人力掘削を行ない、黒褐色粘質土（第101図８・65層）の弥生～古墳時代の遺物包含層の下、標高３m付近で黄褐色シルト層（第101図54層）の地山層を検出した。第２遺構面では、柱穴や土坑、溝状遺構を検出し、弥生～古墳時代の包含層から遺物が出土したが、細片が多かった。H区は黒色包含層が薄く、一部消失しており、何らかの掘削を受けているものと考える。

溝状遺構ＳＨ2319（第106図）

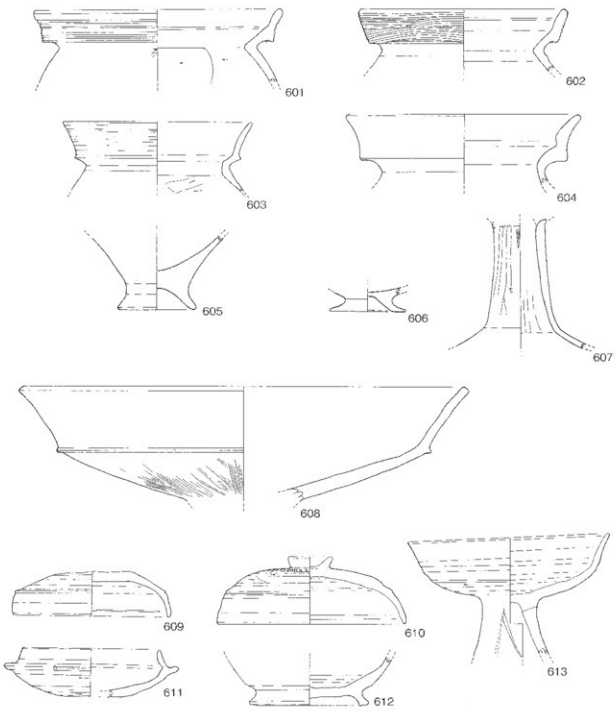
調査区北より、標高3.3m付近で検出した。幅0.3m～0.4m、長さ3.6m、検出面からの深さ0.12mで、溝埋土は黒褐色土であった。東側は調査区外へつづく。598、599は複合口縁の甕で、口縁外面に４～５条の凹線を巡らす。600は鼓型器台の器受部である。ヘラ状工具による擬凹線文を巡らす。内外面ともヘラミガキを施す。草出２期と考えたい。



第106図　溝状遺構ＳＨ2319実測図（Ｓ＝１：40）出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

弥生時代～古墳時代の遺物包含層出土遺物（第107図）

601～604は複合口縁の甕である。櫛状工具による平行線文を施す。603はヨコナデによりナデ消しが行われる。607・608は高坏である。608は口径35.2cmを測る大型の坏部で外面にハケ目をとどめる。609～613は須恵器の蓋坏、坏、高坏であるが古墳時代後期から中世のもので立会調査で出土している。混入の可能性がある。



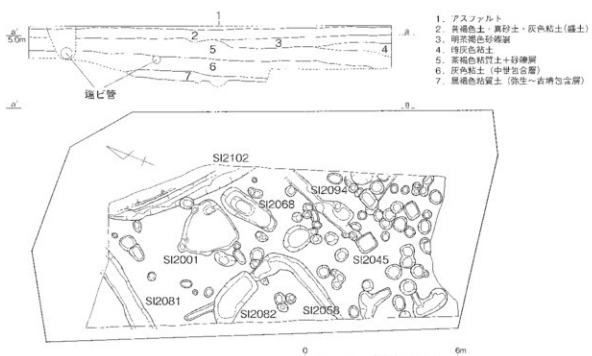
第107図　H区弥生～古墳時代包含層出土遺物実測図（S＝1：3）

工事立会調査（第57図）

周知の遺跡である佐太前遺跡の周囲を流れる広岡川改修工事に伴い、平成19年度～平成21年度にかけて発掘調査が行われ、事前の調査が困難である広岡川河川敷、及び道路部分について工事立会調査を行った。

Ⅰ区（108図）

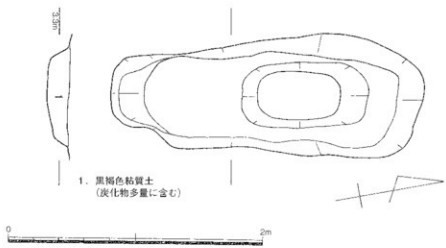
佐太神社前面の工事立会は道路、仮橋及び狛犬の保護に加え、参拝者、付近の住民の安全を考え弥生～古墳時代にかけての第2遺構面の調査のみとなった。土坑、溝状遺構、柱穴等を検出し弥生～古墳時代にかけての遺物が多く出土した。



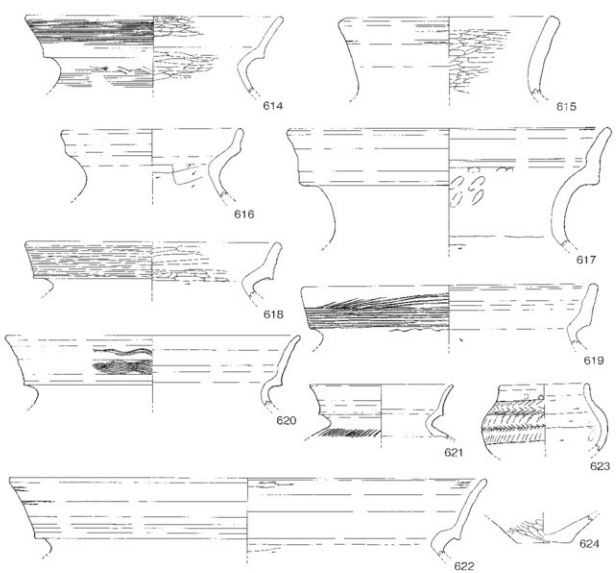
第108図　Ⅰ区第２遺構面実測図（S＝１：150）

土坑　SI2068（第109・110図）

調査区北側、標高3.35m付近で検出した。長径2.45m、幅0.55m～1.0m、深さ0.17mを測る。土坑内は、炭化物を多量に含む黒褐色粘質土であった。614・616・617は複合口縁の壺で、614は口縁部が外傾し、外面に櫛状工具による平行線文15条を巡らし、肩部にハケ状工具による刺突文を施す。内面はヘラミガキが行われる。616は口縁外面に貝殻腹縁による成形後ヨコナデを行う。617は内面に指頭圧痕をとどめる。615は櫛状工具による成形後ヨコナデが行われ、内面はヘラミガキを施す。618～622は複合口縁の甕で、618・619は口縁外面に櫛状工具による平行線文を施す。620は口縁外面に一部波状文がある。621は小型の甕で、口縁は外傾し肩部に貝殻による連続刺突文を施す。622は口径36.9cmの大型の甕である。口縁は外傾し断面は薄く引き出したようになる。623は丸底の小型の壺でヘラ状工具による連続刺突文、貝殻腹縁による連続刺突文を施す。



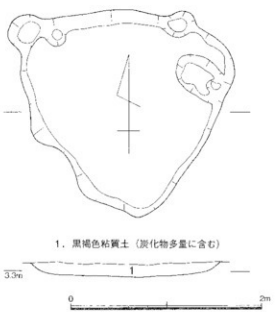
第109図　土坑ＳＩ2068実測図（Ｓ＝１：30）

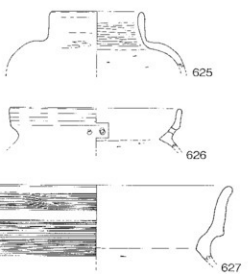


第110図　土坑ＳＩ2068出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

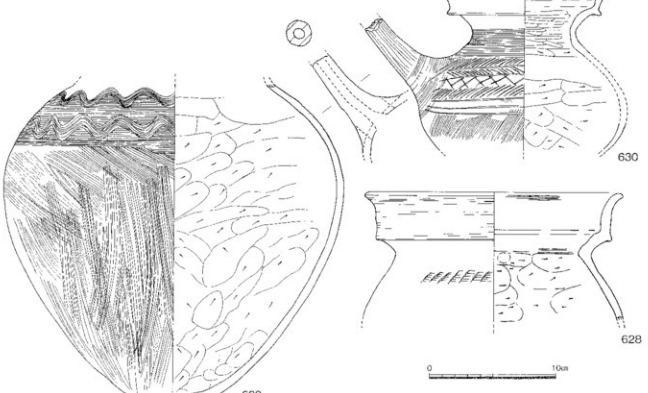
土坑　S I 2001（第108・111・112図）

調査区北、標高3.4m付近で検出した。平面三角形を呈し、長径2.2m、深さ0.13mを測る。土坑内は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土であった。出土遺物625は小型の直口壺で、口径7.1cmを測る。内外面ともヘラミガキがなされる。626・627は複合口縁の甕である。626は頸部に紐通しの孔を2つもつ。627はやや外傾して立ち上がる口縁で外面には櫛状工具による多条の平行線文





第111図　土坑S I 2001実測図（S＝1：40）



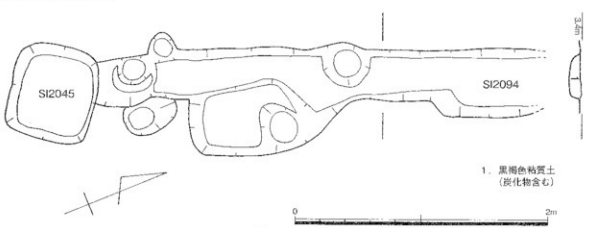
第112図　土坑S I 2001出土遺物実測図（S＝1：3）

を巡らし、一部ヨコナデで消す。

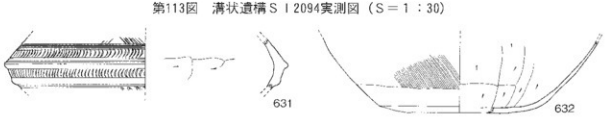
628は口縁端部が外傾し厚みがある。肩部に櫛状工具による連続刺突文をもつ。629は口縁を欠損し、肩部～底部が残る。肩部には櫛状工具による直線文上に２条の波状文を施す。肩部から底部にかけて長いハケ目が施される。わずかに底部を残す。630は複合口縁の注口土器である。複合口縁の稜は鋭い。頸部下に多条の平行線文、ヘラ状工具による刺突文、線刻、３条の凹線文、その下にハケ目を施す。注口部はヘラミガキを行う。内面は口縁から肩部にかけてヘラミガキ、肩部から下にヘラケズリを行う。

溝状遺構　ＳＩ2094（第108・113・114図）

調査区南東、標高3.4m付近で検出した。検出長3.5m、幅0.4m、深さ約0.1mを測る。溝の南西側は上坑ＳＩ2045で切られる。溝内埋土は炭化物を含む黒褐色砂質土であった。溝内からは、ソロバン形の体部をもつ装飾した壺631が出土している。ヘラ状工具による「く」の字状の連続刺突文を凹線文の間に施す。上坑ＳＩ2045から出土した632は平底を持つ甕の底部と考えられる。ススが付着していた。



第113図　溝状遺構ＳＩ2094実測図（Ｓ＝１：30）



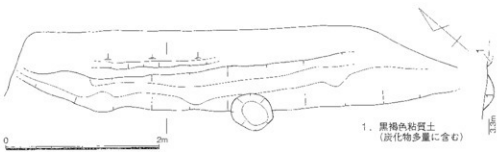
第114図　溝状遺構ＳＩ2094出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

溝状遺構　ＳＩ2102（第108・115・116図）

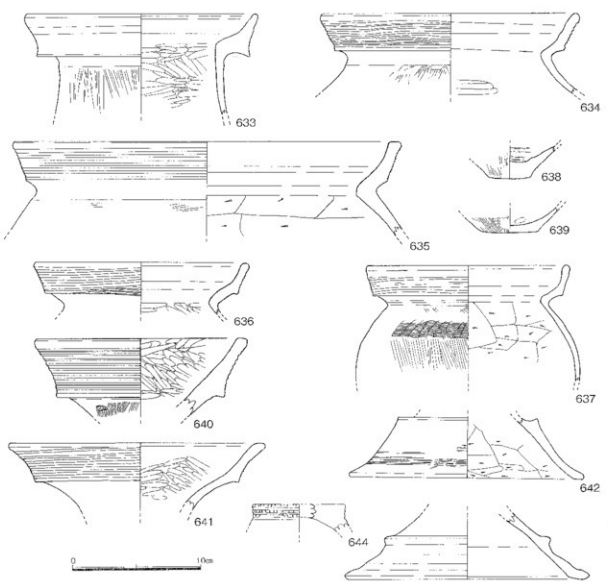
調査区北端、標高3.4m付近で２本並んで検出した。北側の溝は調査区域外のため検出できなかった。検出長5.56m、幅0.4m～0.7m、深さ0.12mを測る。溝埋土は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土であった。633は複合口縁の壺である。口縁は厚みをもち、外面は貝殻腹縁による器面調整をナデ消している。頸部は幅の広いヘラミガキがなされる。634～637は複合口縁の甕である。

口縁は厚みをもち外傾する。外面は櫛状工具による平行線文がなされる。640・641は鼓形器台の器受部で外面は擬凹線文を巡らし、内面は丁寧なヘラミガキがなされる。

この溝の底面から、獣骨か人骨か不明だが、骨が出土している。



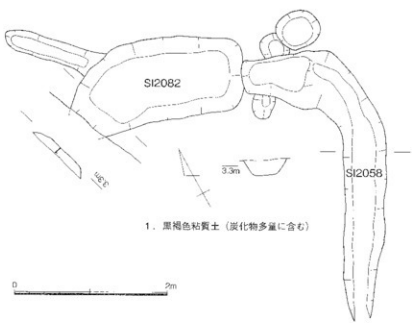
第115図　溝状遺構ＳＩ2102実測図（Ｓ＝１：50）



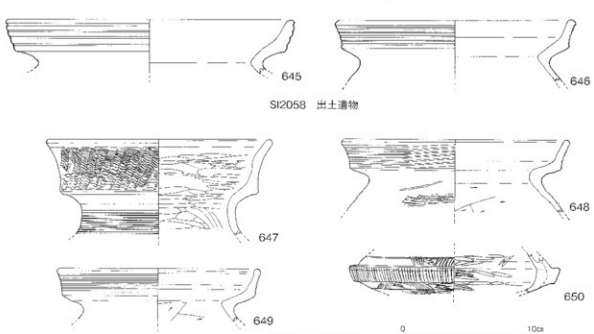
第116図　溝状遺構ＳＩ2102出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

溝状遺構　ＳＩ2058（第108・117・118図）

調査区西、標高3.3m付近で検出した。ＳＩ2082の東側とＳＩ2058の西側は小土坑で切られている。土坑ＳＩ2082の検出長は2.1m×1.1mで、深さは検出面から0.1mを測る。溝ＳＩ2058は長径約3.6m、幅0.55m、深さ0.18mを測る。土坑及び溝内は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土であった。ＳＩ2058出土の645・646は複合口縁の甕で、外面にヘラによる擬凹線文４条～６条を施す。ＳＩ2082出土の647は複合口縁の壺で、口縁外面に櫛状工具による平行線文を描き、その上に波長の短い波状文を施す。甕648・649は、口縁外面に貝殻による平行線文を施す。650はソロバン形の体部を持つ装飾した壺である。内面はヘラミガキを施す。



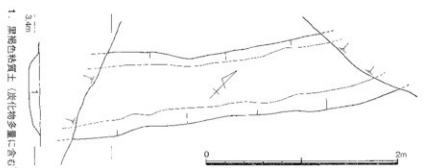
第117図　土坑ＳＩ2082・溝状遺構ＳＩ2058実測図（Ｓ＝１：50）



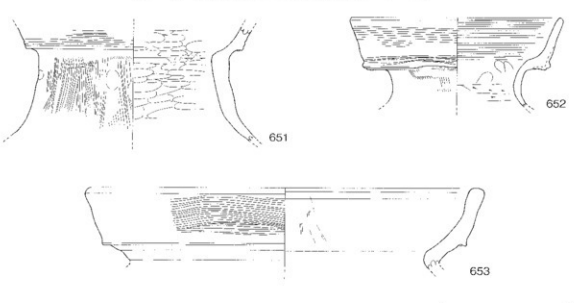
第118図　土坑ＳＩ2082・溝状遺構ＳＩ2058出土遺物実測図（Ｓ＝１：３）

溝状遺構　S I 2081（第108・119・120図）

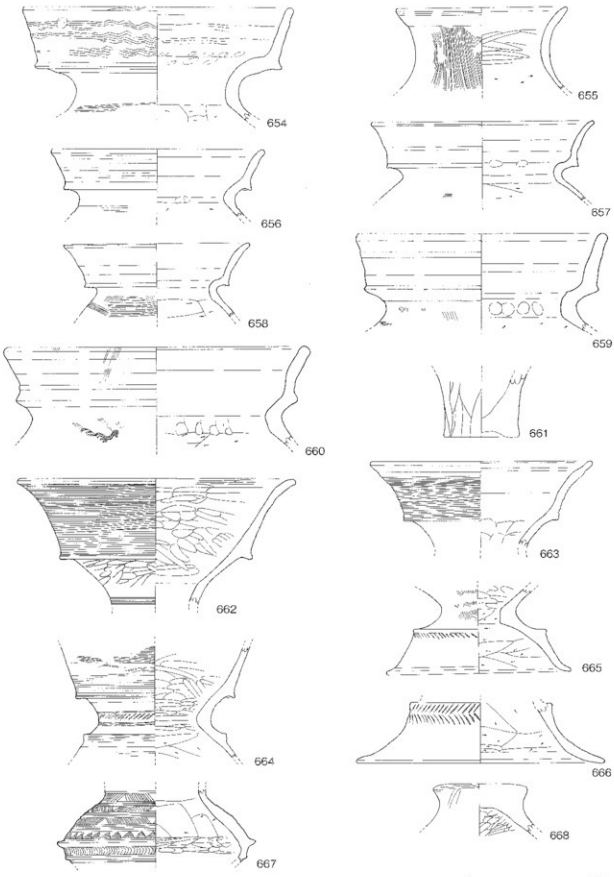
調査区北西端、標高3.4m付近で検出した。検出長は3.4m、幅0.7m～0.9m、深さは検出面より0.11mを測る。溝の北側と南西側は調査区域外へ続いており、規模は確認出来なかった。溝内は炭化物を多量に含む黒褐色粘質土であった。651・652は複合口縁の壺で、口縁外面にヘラ状工具による平行線文を巡らし、一部ナデ消しを行う。651は頸部にハケ目を施し一部指頭圧痕を残す。内面はヘラミガキがなされる。652は内面にヨコのハケ目を施し頸部下はヘラケズリがなされる。654は口縁外面を貝殻腹縁による成形後、波状文を巡らし一部ナデ消しを行う。656～658は複合口縁の甕で口縁は上方に薄く引き出され、稜は斜め下向きに突出する傾向にある。また659・660も複合口縁の甕で口縁部はやや厚い。662～666は鼓形器台である。いずれも貝殻腹縁による平行線文を巡らす。662は筒部中央に3条のヘラ描直線文、664は貝殻による連続刺突文、その上にはヘラ描直線文を施す。また脚台部は貝殻による平行線文の一部を消す。665は脚台部に貝殻による連続刺突文を施す。666は貝殻腹縁による羽状文を施す。内面の調整は器受部はヘラミガキ、筒部から脚台部はヘラケズリがなされる。667はソロバン形の体部をもつ装飾した壺である。



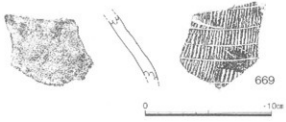
第119図　溝状遺構S I 2081実測図（S＝1：40）



第120図　溝状遺構S I 2081出土遺物実測図（1）（S＝1：3）



第121図　溝状遺構ＳＩ2081出土遺物実測図（2）（S＝1：3）



第122図　M－３出土遺物実測図（S＝１：３）

M－３出土遺物（第79・122図）

工事立会調査地Ⅰ区東側の工事立会で出土した。M－３マンホール設置工事の重機掘削土中より出土した、半島系の瓦質土器である。弥生～古墳時代の遺物包含層である黒褐色砂礫層から出土しており、外面は縄目を使用したタタキ後、ヘラ状工具による沈線を施す。内面の調整は不明瞭であるが凹面がわずかに残る。外面は灰色を呈しやや軟質である

参考文献

鹿島町教育委員会『佐太前遺跡』1987年

鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５　南講武草田遺跡』1992年

廣江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古第８号』1992年

島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅴ』（海崎地区３）1989年

島根県教育委員会『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅵ』（海崎地区２）1988年

島根県教育委員会『古志本郷遺跡Ⅵ』（Ｋ区の調査）2003年

島根県教育委員会『青木遺跡Ⅱ』（弥生～平安時代編）2006年

前原市教育委員会『高祖城』2003年

松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様相と編年　山陽・山陰』木耳社1992年

鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書３名分塚田遺跡２』1987年

鹿島町教育委員会『掘部第１遺跡』2005年

島根県古代文化センター（勝部・松本・森岡）『古代文化研究』№８「山陰地方分銅形土製品集成」2000年

坪井利弘『日本の瓦屋根』理工学社1976年

兵庫埋蔵銭調査会『中世の出土銭補遺Ⅰ』1996年

兵庫埋蔵銭調査会『中世の出土銭－調査と分類－』1994年

鹿島町立歴史民俗資料館『重要文化財佐太神社－佐太神社の総合的研究－』1997年

島根県教育委員会『波積沖遺跡』1999年

第4章　まとめ

今回の佐太前遺跡の調査は、A～D、G～Iの7つの調査区に分割して調査を行っている。

A区の調査では、標高5.4m～5.5m付近でB区の第1遺構面へ続く土層の堆積を確認しているが、遺構自体は確認できなかった。この辺りがB区から続く第1遺構面の西端部にあたるのかもしれない。

B区では、標高5.5mから第1遺構面を検出している。第1遺構面は8世紀頃の須恵器が出土する遺物包含層の上に構築された遺構面であり、ここから検出された建物跡SB1001や、溝SB1016～SB1019は、これ以後の遺構であると考えられる。ピットの中には柱根が遺存しており、角柱が使用されていた。また建物構造が中世の渡橋沖遺跡から検出されたSB01と類似する建物であり、8世紀以降～中世頃の遺構と考えている。残念なことに後世の掘削で遺構面ごと掘り飛ばされており、第1遺構面の遺物包含層（生活面）は確認できなかった。

さらに掘削を進めた標高5.2m～5.3m辺りから第2遺構面を検出しており、土坑やピット、自然流路と考えられる溝を検出している。遺構内からは時期不明の土器細片しか出土していない。第2遺構面の基盤となる第20層は無遺物層であり、上面に堆積している第15～19層からは縄文時代の遺物しか出土しておらず、第2遺構面は縄文時代まで遡る可能性のある遺構面であることを指摘しておく。

C・D区の調査では、第1遺構面は標高4.6m～5.0mから検出している。第1遺構面では多数のピットや土坑、溝を検出している。土坑からは弥生時代中期の遺物が出土している。この第1遺構面は、B区の第1遺構面とは別である。

さらに掘削を進めた標高4.5m～4.9mから第2遺構面を検出している。弥生時代前期後葉の大溝や、土器溜まりを検出している。弥生時代前期後半の大溝は延長65.8mにわたって検出しており、集落を区切るものであった可能性がある。また、出土遺物からは弥生時代前期中葉にこの集落が成立したことが明らかになった。周辺の地形からはこの溝の南方に現在の佐陀宮内の市場と呼ばれる集落が位置する微高地があり、佐太前遺跡の集落本体はこちら側に存在するものと考えられる。この大溝からは大量の弥生土器が出土しているが、ほぼ同時期のものと考えられ、弥生集落としての佐太前遺跡の成立はこの時期に求められる。また、この結果はこれまでの採集遺物から推定されていた時代観とも一致する。この遺跡では、弥生時代前期に成立する集落でしばしば認められる突帯文系の土器が伴わず、完全に突帯文系の遺物が払拭された段階で成立するものと考えられる。この盆地で先行して成立した北講武氏元遺跡（鹿島町教育委員会1989）では、突帯文土器を伴う段階のもので、これに後続する、あるいは集落そのものが移転した可能性が考えられる。佐太前遺跡と同じころに成立している遺跡として、佐太講武貝塚低湿地部（鹿島町教育委員会1997）、稗田遺跡（鹿島町教育委員会1994）の資料があり、また古浦砂丘遺跡の墓地群も同じ時期のものを含むものと考えられる。それぞれ突帯文系の遺物が払拭された段階のものである。この段階に盆地内各所に分村がなされたと解釈できるが、最終的には佐太前遺跡に収斂する状況が考えられる。ただし、北講武氏元遺跡と指呼の距離にある堀部第1遺跡は、北講武氏元遺跡の墓地とも捉えうる位置にあるが、この墳墓に供献された土器は遠賀川土器に限られ、同じ墳

墓群と考えられる古浦砂丘遺跡も同様の供献形態を示しているとすると、墳墓群の土器だけでは一律には語ることはできない。

また、C、D区では縄文時代後期～晩期の自然流路を検出している。ここでの出土土器は、後期から晩期ではあるが、前述したように晩期も前半に限られる。また、一部B区のように縄文中期の土器も認められてはいるが、継続して集落が営まれた様子はなく、縄文時代の遺物が断続的に出土する佐太講武貝塚低湿地部の様相同様、集落が点々と移動をくりかえす状況を想定すべきかもしれない。

G区は佐太神社の前面に位置している。『出雲国風土記』によると出雲国一宮である熊野大社に次ぐ二宮で、古代末から中世にかけて勢力を誇っていたことが知られている。

G区第1遺構面、標高4.1～4.2mで検出した5棟の建物跡が、出土遺物から中世以降の建物跡であり、神社との関連がうかがわれる位置にある。

佐太神社本殿は重要文化財として指定を受けているが、付随して棟札、指図板が残存し、本殿の附として指定を受けている。この本殿配置を示す指図板は、貞享期（1684年～1687年）以前、以後のそれぞれの社殿配置が記録している。この配置図に沿う建造物がこの本殿前にも配置されていた可能性が十分考えられた。

この指図板によれば、図1のように貞享以前の社殿配置図は主軸をE－36°－Nにとる。貞享期より11°偏西しているが、検出した遺構面で、同じ主軸の建物跡は検出されていない。SG1002は、主軸をE－31°－Nにとる。出土遺物をみると布目をとどめる中世の瓦が出土している。SG1003は主軸をE－32°－Nにとるが、遺物は出土していない。SG1005は主軸をE－30°－Nにとる。遺物をみると、柱状高台が出土している。12世紀前後の遺物である。このことから推察すると、前述の3棟は貞享期以前の社殿配置のなかで建造された建物であると考えられ、出土遺物もこれに矛盾しない。

図2は貞享期（1684年～1687年）以後の社殿配置で、主軸はE－25°－Nにとる。文化期（1804年～1817年）以降もほぼ同一の主軸であり、基本的にこの配置は現在まで引き継がれている。G区で検出したSG1001も同軸である。瀬戸の鉢が出土しており16世紀末と考える。SG1004は主軸をE－27°－Nにとる。遺物は瀬戸美濃の天目茶碗が出土している。時期は15世紀末～17世紀初頭のものである。これらの遺物は、貞享期とは時期的に違いがあるものの、ほぼ同一面からの検出であり、遺物は混入と考えてもよかろう。主軸がほぼ同一であり、この2棟は貞享期以降と考えたい。

さらに掘削を進めた標高4.2～3.7m付近で第2遺構面を検出しており、建物跡を5棟、土坑や柱穴を検出している。出土遺物から、弥生時代後期から古墳時代前期と考えられる。弥生時代後期を中心とする土よりも遺物のほうが多い、と表現できるような非常に遺物の密度の高い包含層が堆積しており、この時期に非常な集住があったことがわかる。SG2405、2359のように、ある程度の一括性を示す遺物が出土した遺構は、以前の佐太前遺跡の調査（鹿島町教育委員会1987）のSK58と近い時期のもので、出土例の比較的少ないこの時期の良好な資料と考えられる。

H区では、3.2m付近で第1遺構面を検出しているが、遺構、遺物は少なかった。中近世の包含層より、16世紀～17世紀にかけての陶磁器が出土しており、その頃何らかの掘削が行なわれた

ようである。

第２遺構面は、標高3.3m付近で検出しており、溝や柱穴を検出しているが、遺構に伴なう遺物も少なかったが、出土遺物は、弥生時代後期の遺物であり、G区第２遺構面と対応している。

Ｉ区では、標高3.4m付近で第２遺構面を検出し、土坑や溝を検出している。出土遺物はG区と同様弥生時代後期～古墳時代初めの遺物であり、G区、H区の第２遺構面と対応する。

このように、佐太前遺跡においては、弥生時代前期後半から集落が成立し、大規模な集落に成長するが、弥生時代後期にひとつのピークを迎えていることが出土遺物量から窺うことができる。この遺跡では、弥生時代前期段階から、今回検出したように木器制作、緑色凝灰岩の玉生産をおこなっており、付近の拠点集落であるといえよう。また、縄文時代にさかのぼる遺物があることも今回の新たな知見といえる。

こうした弥生時代前期からのこの遺跡の拠点集落化という前史をもとに、『出雲国風土記』国引きの章に「狭田国（さだのくに）」伝承として伝えられる一定規模の領域が成立したものと考えられる。銅鐸２、銅剣６を出土した志谷奥遺跡もおそらくは佐太前遺跡を抜きには考えられない。今回の調査では立会で瓦質土器片１点のみの出土であったが、1985年の鹿島町教育委員会調査では、朝鮮半島系の陶質土器など、渡来系遺物が出土しており、講武盆地全体でも弥生時代から古墳時代まで、点々と渡来系の遺物が検出されており、こうした遺物が示す海上交通の掌握によって弥生時代後期に集住が進む集落とも考えられる。

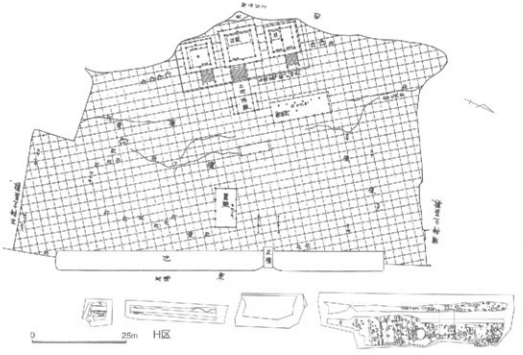


図１　佐太神社社殿配置（貞享以前）と調査区との位置関係

（注）社殿配置は掛図板（和田1999）より一部改変　神社内のスケールは任意（約S＝１：1000）

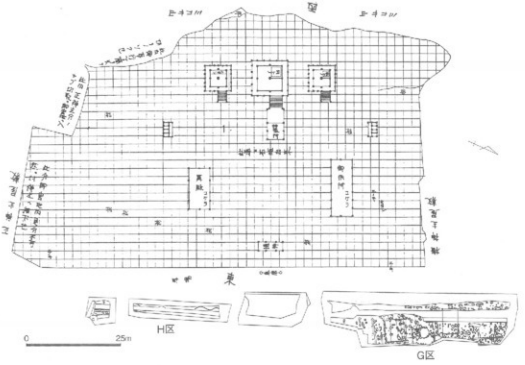


図２　佐太神社社殿配置（貞享期：1684～1687年）と調査区との位置関係

（注）社殿配置は指図板（和田1997）より一部改変　神社内のスケールは任意（約Ｓ＝１：1000）

佐太前遺跡弥生時代前期の大溝から講武盆地を望む

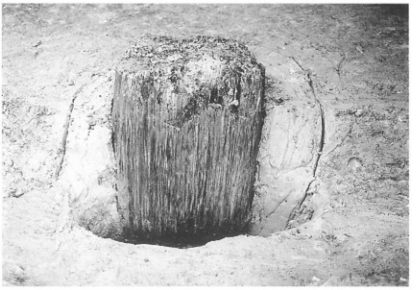
佐太前遺跡弥生時代前期の大溝から佐太神社周辺

図版2

佐太前遺跡調査前風景
（C・D区東から）

A区土層堆積状況
（東から）

B区SB1001完掘状況
（東から）



ＳＢ1001柱根検出状況
（東から）

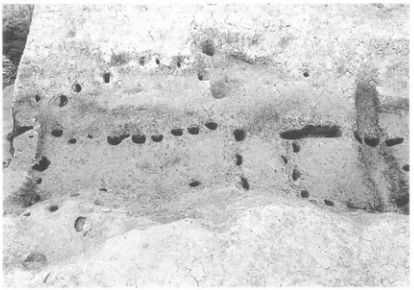
ＣＤ区ＳＣ2002（西から）

ＣＤ区ＳＣ2001遺物出土状況
（東から）

図版4

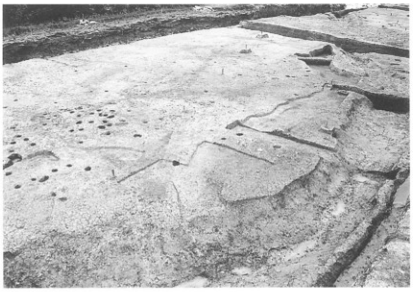
ＣＤ区ＳＣ2001遺物出土状況
（西から）

ＣＤ区ＳＣ2001土層堆積状況



ＣＤ区ウッドサークル検出状況

ＣＤ区ＳＣ2001鋤未製品
出土状況



ＣＤ区ＳＣ2001完掘状況
（東から）

ＣＤ区ＳＣ2640遺物出土状況
（東から）

図版6

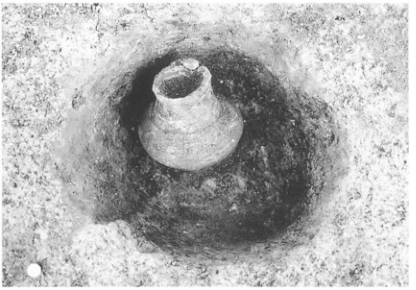
現地説明会風景

G区第1遺構面完掘状況
（南から）

G区第1遺構面掘立柱建物跡
SG1003～1005
完掘状況（西から）

G区土坑ＳＧ2405
遺物出土状況（西から）

G区土坑ＳＧ2223
遺物出土状況（南から）

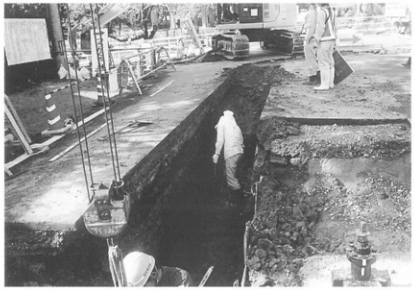


G区土坑ＳＧ2117遺物出土状況
（南から）

図版8

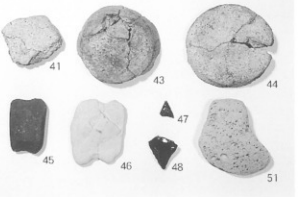
G区第2遺構面完掘状況
（南から）

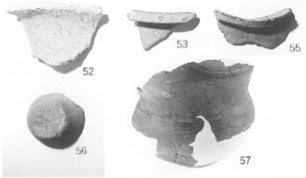
H区第2遺構面完掘状況
（南東から）



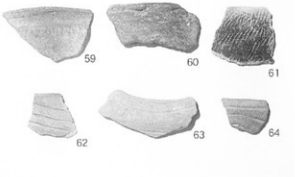
工事立会風景

8
10
11
12
13
14
15
16


41
43
44
45
46
47
48
51


52
53
55
56
57

58

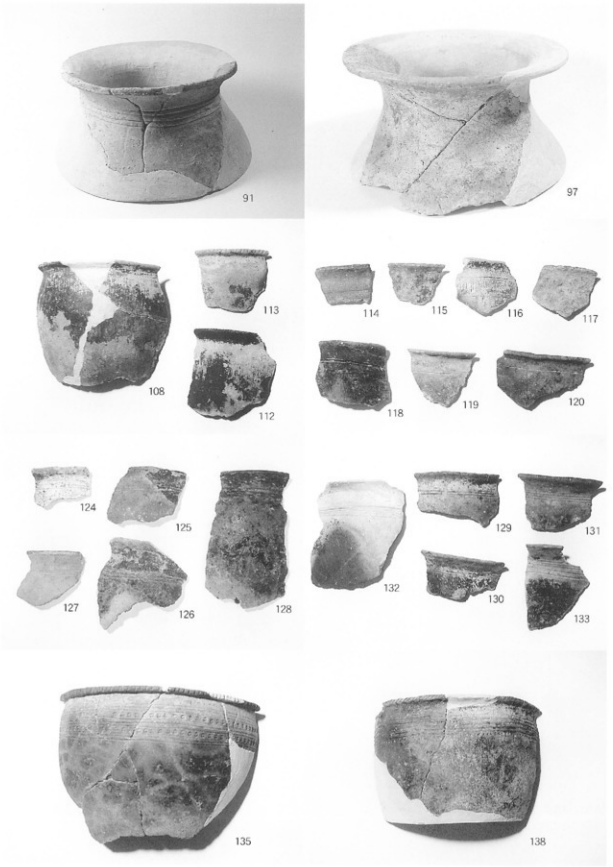

59
60
61
62
63
64

71
72
73
74
75
76
77
78
79

80
81
82
83
85
88

90
92
93
94
95

図版10

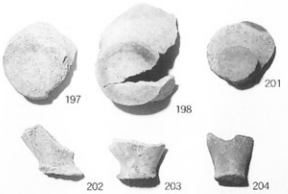

91
97
113
108
112
114
115
116
117
118
119
120
124
125
127
126
128
132
129
131
130
133
135
138

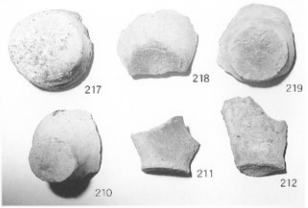
143

155
156
157
158
161
162
163
165

159

160

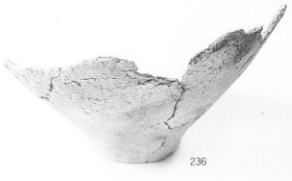

197
198
201
202
203
204


217
218
219
210
211
212

223
224
225
226
227
228

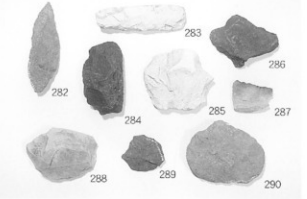
234

図版12


236

238
239
240
241
242
243

258
259
260
261
262
263


283
286
282
284
285
287
288
289
290

291
293
292
294

296
295
297
298
299

300
301
302

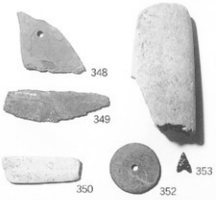
309

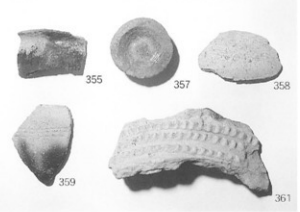
308

307

306

319 321 465 320 322 324


348 349 353 350 352


355 357 358 359 361

372 373 374 375 376 377

378 379 380 381 382 394

図版14

409

410

411

412

413

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

425

426

427

428

429

430

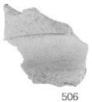
431

432

433

436

435


506

508

509

512

513

514

515

516

517

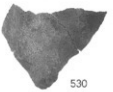
518

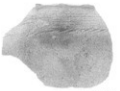
520

521

526

527


530


531

523

524

525

532

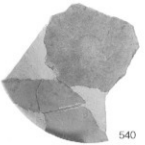
533

536

図版16

537

539


540

541

542

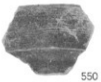
543

544

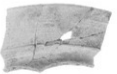
547

548

546

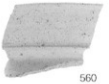

550

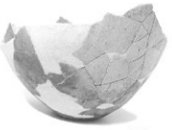
551


554

555

559


560


570

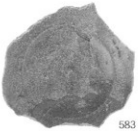
572

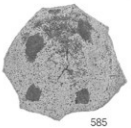
573

580

581

582


583


585

586

584

587

588

589

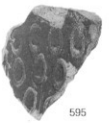
590

591

592

593

594

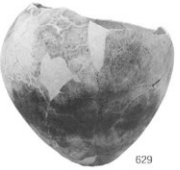

595

597

596

609

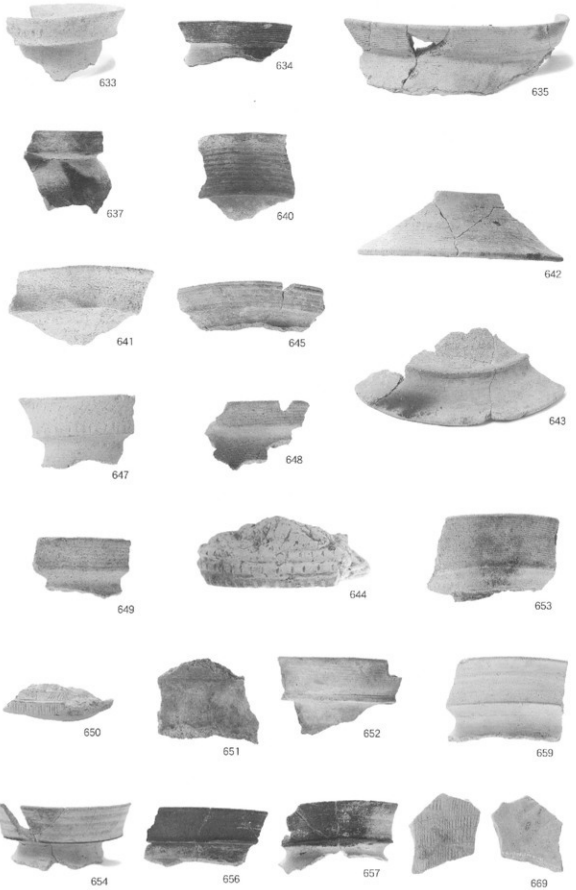
611


629

630

631

図版18


633
634
635
637
640
642
641
645
643
647
648
649
644
653
650
651
652
659
654
656
657
669

報 告 書 抄 録

ふりがな	さだまえいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	佐太前遺跡発掘調査報告書
副書名	広岡川河川改修工事に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第１３５集
編著者名	藤原　哲・清水初美
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター２Ｆ　TEL：0852-55-5284 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1　TEL：0852-85-9210
発行年月	2010年８月

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
佐太前遺跡（さだまえいせき）	島根県（しまねけん） 松江市（まつえし） 鹿島町（かしまちょう）	32201	K-3	35° 30′ 34″ 133° 00′ 23″	20071119 ～ 20100309	3,280㎡	広岡川河川改修工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
佐太前遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世	自然流路 大溝 竪穴住居跡 掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・陶器・磁器・瓦・木製品・石器	弥生時代前期の大溝 縄文時代の自然流路検出 中世から近世の包含層・建物跡 弥生時代から古墳時代の包含層検出

広岡川河川改修事業に伴う
佐太前遺跡発掘調査報告書

2010年8月

発行　松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷　有限会社　黒　潮　社
島根県松江市向島町182－3